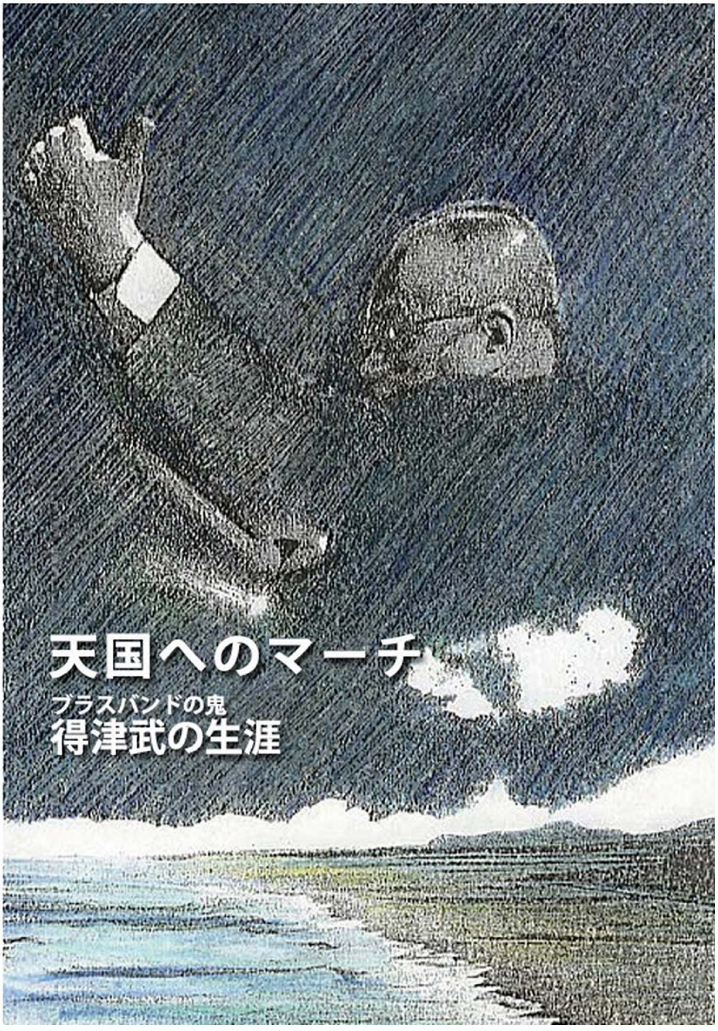
ブラスバンドの鬼
得津武史の生涯

天国へのマーチ

西谷尚雄
Nishitani Hisao

笑いと涙が
いっぱいつまったこの本は、
あらためて音楽に国境がないことを
証明してくれた。　CWニコル

僕の『鯨の歌』の訳詩もしてくれた、旧友　西谷尚雄（マイク）は高いユーモアのセンスをもつ極めて優秀な作家であり、才能豊かな音楽家でもある。
『天国へのマーチ』はかつてのイギリス映画『BRASS』の流れをくむ、素晴らしい音楽映画にもなるだろう。ぜひ英訳されて海外でも出版されるべきだ。歴史的なストーリーであるにもかかわらず決して古びず、極めて日本的でありながら国際的に受け入れられる内容だと思う。


天国へのマーチ
ブラスバンドの鬼
得津武の生涯

西宮市立今津中学校吹奏楽部におくられた詩　8
草稿に寄せて／CWニコル氏のメッセージ　10

〈序　章〉　12
〈第一章〉　17
（一）プロローグ　17
（二）最後の軍艦マーチ　28
（三）病院の一室　32
（四）ワシは生まれも育ちも和歌山市　34
（五）尋常小学校代用教員に！　40
（六）いきなり招集令状が…　42
（七）速成 陸軍軍楽隊　44
（八）ピアニストの奈都子と結婚　46
（九）特殊部隊入隊で人間電波探知機になる！　48

（十）ワシにそっくりな娘が誕生　51
（十一）米軍キャンプのジャズ・バンド結成　52
（十二）進駐軍キャンプで軍艦マーチ　55
（十三）音楽に国境はあらへん　58
（十四）一つの破局　66
（十五）ジャズ・バンド最後のステージ　71
（十六）運命を導く夜明けのラッパ　74

〈第二章〉　78
（十七）そして、今津中学へ　78
（十八）「オッサン」から「センセイ」に　80
（十九）死ぬまで楽器を放すな　82
（二十）得津式スパルタ訓練　84
（二十一）指揮棒を天ぷら棒に替えて　86
（二十二）「先生、死なん程度にどやしたってください」　88
（二十三）アサター、ヒルター、ナイター　92
（二十四）お弟子制度　96

（二十五）「こん畜生、ハゲ茶瓶！」 100
（二十六）昭和三十五年、コンクール初優勝！ 104
（二十七）オカヤンのために生まれ変わる 106

〈第三章〉 112
（二十八）〝うどん〟とムチの特訓兵器 112
（二十九）「ジャリ、ゴミ、チリ」の言い分 118
（三十）究極の指導法で一週間に一曲マスター 120
（三十一）頼もしき我が息子たち 122
（三十二）地域の〝余興〟は大入り満員 126
（三十三）虎キチ（阪神ファン）の心意気 128
（三十四）ああ、美智子妃殿下（現・皇后陛下） 131
（三十五）おおきに、教育長 133
（三十六）良き理解者、歴代の校長先生たち 136
（三十七）我が恩師、我が親分！ 138
（三十八）自慢すべきは、我が朋友たち 140
（三十九）陰で支えてくれた参謀たち 145

（四十）体罰代行もさせた名誉子分　147
（四十一）得津一座の泣き笑いドサ回り　152
（四十二）今津サウンドの秘伝　156
（四十三）拝啓、文部大臣様　163
（四十四）なんとかならんのか、日教組　165

〈第四章〉　168
（四十五）栄光に翳りが　168
（四十六）まさかの連敗　173
（四十七）栄光への再挑戦　175
（四十八）天ぷら棒で微妙な音は出ない　176
（四十九）栄光の奪回　180
（五十）いつのまにか尚子も恋を知る年に……　185
（五十一）黙って見つめた尚子の婚礼　188
（五十二）卒業式「いつでもワシのとこへ来いよ！」　190
（五十三）蛍の光　196
（五十四）究極の練習作戦　200

〈五十四〉の2　ある前兆　204
〈五十五〉楽器盗難事件　206
〈五十六〉退職記念演奏会　209
〈五十七〉天国への旅立ち　212
〈終章〉　216
〈五十八〉十一月六日　216
〈五十九〉「吹きまくれ！　思い切り吹きまくれ！」　217
〈カーテンコール〉　224
〈エピローグ〉　265
あとがき　286

天国へのマーチ　ブラスバンドの鬼　得津武の生涯

西宮市立今津中学校吹奏楽部におくられた詩

トランペットの穴に飛び込む
フルートの中を通りぬける
クラリネットにかけた指に響く
サキソフォンをムチャクチャに叩く
怒鳴られても何でもない
怒鳴られる度に進むのだ
先生は怒鳴って引っ張り上げるのだ
どなり声にうなずいて
吹く吹く吹くならすならすならす
休みは正月の三日間だけ
後はくる日もくる日も練習練習
朝はほかの生徒が登校する前

放課後はくらくなるまで
おかけで夕星と仲よくなった
厳しいから進歩する
進歩するからおもしろくなる
おもしろさはゆとりとなり自信となる
音が一つになると微笑でいっぱいになる
体がうれしさで丸くなる
たかなれブラスたかなれブラス
先生の笑い声がバスーンにからまる
ホルンが喜び胸をゆする
トロンボーンが空気をはずませる
ああそうしてそうしてみんなが
みんながはずんでいる

サトウハチロー

草稿に寄せて／CWニコル氏のメッセージ

僕がマイク・ニシタニ（僕は彼をこう呼ぶ）と友だちになったのは、かれこれ三十年ほども前のことだ。僕はその頃、沖縄海洋博覧会のカナダ館長補佐をしながら、同館員たったウイルフーウイ〝グリーと日本語で『漫才』の練習をしていた。ラジオやテレビ出演の依頼があったとき、ウイルフが以前からの知り合いたったマイクが、我々を自宅に招いて漫才の特訓をしてくれた。

そんな出会いがあって僕の『鯨の歌』の訳詩もしてくれたりした。

その頃マイクと僕の背格好はよく似ていて、彼のシャツも背広もぴったり。安月給でやりくりしていた僕にとって『衣装に困らない』という恩恵まで与えてくれた。

マイクは高いユーモアのセンスをもつ極めて優秀な作家であり、才能豊かな音楽家でもある。

『天国へのマーチ』はかつてのイギリス映画『ＢＲＡＳＳ』の流れをくむ、すばらしい映画にもなるだろう。

ぜひこの作品が英訳されて、海外でも出版されるべきである。

この本は歴史的なストーリーであるにもかかわらず、決して古びない、そして極めて日本的でありながら、国際的に受け入れられる内容でもあると思うからだ。

笑いと涙がいっぱいつまったこの本はあらためて音楽に国境がないことを証明してくれている。

最後に、癌と戦いながらもこの本の出版まで頑張り続けたあなたの努力に心からの賞賛を贈ります。

二〇〇六年一月二十一日ＣＷ・ニコル（長野県黒姫山にて）

〈序　章〉

「照れくさいからオレのことを本なんかにするのはやめてくれ！」
といっていた得津武史氏が、久しぶりに私の夢の中に現れて、
「おい！あの本は一体どうなっとるんや」
とたずねられた。
「すみません、もうすぐ書き上げます」
とこたえたが私はその時、病院のベッドの中にいた。
長年のサラリーマン生活の疲れが出たのか、広告代理店を退職後、右の腎臓がガンに侵され、何かとトラブルの元だった胆のうも一緒に摘出することになったのだが、肝臓との癒着などがあり手術は予想外に難航した。
手術後の発熱が続く私に得津氏は、
「どないしたんや、ワシの本ができるまえに、お陀仏になったらあかんぞ、しっかりせん

か！」

と、怒鳴られた。

得津氏とは西宮市立今津中学校吹奏楽部を率いて、全日本吹奏楽コンクールで十五回も日本一の王座に輝き、吹奏楽界の傑人として名声を博した得津武史氏のことである。

奇跡のような実績を残し、『軍艦マーチ』に送られてこの世を去った彼の壮絶な生涯を小説や映画にできないものかと考え始めたのが今から約二十年前だった。

私の夢まくらに立った得津氏はこの話を聞いて、

「照れくさいから、やめてくれ」といいながらも、どうなったのか天国で気がかりにされておられただろう。

腎臓は片方だけになったが、なんとか元気を取り戻した私は、退院後早速ストックしてあった得津資料や映画のために書いたプロットなどをもう一度読み返してみた。

そもそも、この話は『我が道を行く』というタイトルで映画化される予定で、一九八九年の東宝映画ラインアップに発表され、日活、東宝と渡り歩いた歴戦錬磨の笹井英男プロデューサーの下で、着々と製作準備が進められていた。

笹井氏は、当時ＣＭプランナーだった私と多くのＣＭ制作を共にし、やがて映画を一緒

に作ることを夢見ていた。

「良い映画は、良い脚本から」が口癖だった笹井氏は、まず脚本を『野良犬』『隠し砦の三悪人』などで有名な黒澤組の名匠、菊島隆三氏に依頼した。

菊島氏は当時体調をくずされ入院中であったが、私の書いたプロットを病床でご覧になるとすぐにアイデアが浮かんだらしく、早速笹井氏に電話があった。

「笹井さん、ファースト・シーンに、こんなのはどうだろう……」

今津の商店街を少年達が、手に手にラッパをもって駆け抜けて行く。

ただことではなさそうな気配に、ねじり鉢巻きの親父たちも後を追う。

「いったいどないしたんや！」

と声をかける商店街の人たち。

「得津先生が死なはったんや！先生と約束した『軍艦マーチ』を葬式で吹かなあかんのや！」

雨の中を別の少年たちがサックスやトランペットを抱えて走る。走る、走る、走る。

我々が考えていたラストシーンを冒頭に見せる逆転の発想であった。

「いいじゃないですか、よろしくお願いします」

日活、東宝と、日本映画の最盛期を知るプロデューサーである笹井氏は、

「これはきっと良い映画になりそうだ」

と予感した。

しかし、その感慨にひたる間もなく、私たちは菊島隆三氏逝去の訃報を受け取ることになってしまった。

さらに日本全体にジリジリと迫ってきた経済不況の風圧にも堪え難く、映画化の話は頓挫したのである。

それから二十年。私の心にくすぶり続けた「得津武史物語」は映画化こそ断念したが、この物語への熱い思いが時とともに風化してしまう前に、小説の形にでも上梓しておきたいという考えに至った。

あらためて得津氏の近親の方々や、今はもうごま塩頭になった教え子の方々から、当時を懐かしみながらお話を伺い取材をさせてもらった。

そして、今だから話せる話や、新たなる発見の数々に触れることができた。

心を躍らせながら、二十年ぶりに私の筆が動き始めた。

この小説に聞き手として登場する私『多木比佐夫』は歌を書いたり、音楽イベントの演

出や台本書いたりする、いわば筆者の中の夢っぽい部分だけを受け持つ分身である。

得津氏危篤の知らせを聞いた時も、偶然ご息女の尚子さんとコンサートのリハーサル中だったため、私の車で急遽病院へかけつけたのだが、意識はすでになく、残念なことにご存命中直接お目にかかることはできなかった。

従って、この小説では、私の分身〝多木比佐夫〟が天国への待合室にいらっしゃった得津氏の七十二時間の時空に赴いて、ご自身から直接たっぷりとお話を伺うことにした。

得津氏のあの独特な語り口と天衣無縫なキャラクターをできる限りストレートに再現するのが，リアルな得津氏を描写する一番の方法だと考えたからである。

では、お待たせ致しました。『ブラスバンドの鬼 得津武史の生涯』へしばしのタイムトリップにお付き合いください。

〈第一章〉

（一）プロローグ

一九八二年の春。

私、多木比佐夫は朝日放送ラジオのジャズ番組『サンデー ジャストインタイム』の企画構成を担当することになった。

レコードを一切使わないで、すべて生演奏の六十分番組をやろう、という私の無謀な持ちかけに、関西ジャズ界の雄、古谷充と美しいピアノタッチで定評のある十川尚子が「おもしろそう」と快諾してくれた。

古谷充はアルトサックスをはじめ、五本のリード楽器をスタジオに持ち込み、多重録音でワンマン・ビッグバンドを試みたり、十川尚子はピアノ、キーボード、ヴォーカル、時には古谷とのアカペラ・コーラスもやったり、あらゆる音楽的な実験を二人でこなす、楽

しさ満載の番組になった。

せいぜい続いて一年だろうと思われていたこの番組だが、スポンサーの後押しもあって半年後にはドラムスの上場正俊、ベースの浜崎衛、ギターの大西教文という手練のリズムセクションも加わって、より充実した音楽番組に成長した。しかし毎回エスカレートするアレンジ、リハーサルに要する負担が増加して、やむなく多くの固定ファンに惜しまれながら四年目の春を迎えて、にいったん閉幕することになった。

もともとクラシックピアニストだった十川尚子は、この四年間でジャズ界の大御所、古谷充の薫陶を受け、ジャズ・シンガーとしての大きなキャリアと自信を身につけることができた。

どんなアーティストやタレントでも四年間も続いたレギュラー番組が終了すると一種の虚脱状態に陥る。そんなエアーポケットの中にいた十川尚子にキングレコードからデビュー・アルバムのリリースをしてはどうかという、うれしい話が舞い込んだ。

マンハッタン・ジャズクインテットの生みの親であり、当時ジャズ関連プロデューサーの第一人者であったキングレコードの川島氏が私の提案した「Chako in the Wonderland」の企画に興味を示してくれたのである。

一九八四年の夏。

東京音羽のキングレコード・スタジオでは、ジャズピアノの世良譲やクラリネットの北村英治、ＮＨＫ交響楽団（Ｎ響）のコンサートマスター堀正文などそうそうたるメンバーが顔をそろえ、アレンジには服部克久という文字通りワンダーランドのようなアルバムのレコーディングが愛称 Chako と呼ばれる、尚子を中心にわきあいあいと進められていた。

そのリズム録りでドラムスを演奏していた武田光司が懐かしそうに、十川尚子に近づいて挨拶した。

「ごぶさたしています。得津武史先生のお嬢さんですね。昨年、先生のご葬儀の時、お目にかかりました。私は西宮の今津中学のブラスバンドで、先生に天ぷら棒（指揮棒）でどやされて育った一人です。おかげで今、こうしてミュージシャンとしてなんとかメシを喰っています。先生の教え子は人気ドラマーの村上ポン太秀一やフルートの梅谷君など、東京にもたくさん出てきて、私のようにジャズをやったり、クラシックのオーケストラに入ったりして頑張っていますよ。本当に先生のあの天ぷら棒の一発をくらわなかったらプロになれていなかったかもしれない、なんてみんなで話し合っていますよ」

レコーディングが終わった夜、スタッフと私たちは、西麻布の中国料理店でささやかな

打ち上げを開いた。

ささやかでなければならなかったのは、その夜、レコーディング・ミキサーと私は、徹夜でトラックダウン（録音したテープを音量や音質を調整しながらミックスし、マスターテープにまとめ上げること）を行う予定になっていたからである。

レコーディングの苦労話が、ひとしきりはずんだところで、乾杯のビールに、目をトロンとさせた尚子が、父・得津武史のエピソードをユーモラスに話してくれた。

当時、若者に圧倒的な人気があった毎日放送のバラエティＴＶ番組「ヤングｏｈ！ｏｈ！」やラジオ番組「ヤング・タウン」などで、噺家、桂三枝師匠に鍛えられた尚子の話しぶりは私たちを無心に聞き入らせた。

ブラスバンド界の権威であり、「全日本吹奏楽コンクール（中学の部）」で西宮市の下町「今津」の名を全国に知らしめた人物として伝え聞いていたが、実の娘である尚子から聞く父、得津武史氏の話は、改めて私たちに大きな感銘を与えた。

彼女は昔から時々、幼児語をケロッとした顔で、ユーモラスに会話に交えることがある。例えば「カイチョー」は「かわいそう」であり、「オイチュウ」は「おやすみ」という風である。

そして、父親のことも「ゴンタの父ちゃま」と言った。

得津武史氏と尚子の関係は幼少期に断絶していたため、彼を「お父さん」と呼んだ記憶はない。「ゴンタ」というのは母や世間からそう呼ばれていたからだろう。

父と母の離婚の悲劇を、遠い記憶に風化させてしまったようなニュアンスが父を「父ちゃま」と呼ぶ彼女の幼児語に現れているような気がした。

尚子は、クラッシックピアノの手ほどきを、母・奈都子から受け、やがてピアノ界の第一人者である、安川加壽子氏に師事。本格的なクラッシックの勉強をした。

しかし、幼い頃からピアノの練習の傍ら、当時流行のドリス・デイの歌やグレン・ミラーのサウンドをすぐにピアノで弾いたり、口ずさんだり、とりわけ大好きなディズニー映画のメロディーは声や雰囲気までそっくりに真似ることができた。

やがて叔母の千江子からジャズピアニストとしてのテクニックを受け継ぎ、現在はヴォーカリストとしても、関西の代表的なジャズ・ミュージシャンたちと共演する実力派に成長していた。

打ち上げ会で尚子は、「なぜ、父と別れて暮らすことになったのか」という不幸な思い出には触れようとしなかったが、歳月とともにブラスバンドに命を賭けた「音楽家」としての父『得津武史』の存在に敬意と誇りを持つようになっていた。

彼女は「ゴンタの父ちゃま」の数々のエピソードを、爆笑を誘いながら話してくれたが、最も私たちの心をとらえたのは今や伝説となりつつある、『軍艦マーチ葬』のことであった。「オレが死んだら軍艦マーチで送ってくれ」が口癖だった、先生との約束を果たそうと教え子たち数百名が、みんなラッパを持って集まり、演奏禁止令の出されていた、「軍艦マーチ」を出棺の葬送行進曲として演奏したという話であった。

スタジオに帰った私は収録の終わったテープの編集作業であるトラックダウンを始めても、その葬儀の話が頭から離れないでいた。その夜はスタジオの強い冷房のため風邪気味だったせいもあるが、何度も同じフレーズを再生されるトラックダウンの音と「軍艦マーチ葬」のイメージが、脳裏に不思議な共鳴現象を起こしていた。

映画界の巨匠、フランシス・コッポラは、ラストシーンから映画を作っていくというが、私も「軍艦マーチ」の流れる葬儀のシーンから逆行して、得津武史氏の物語を映画にできないだろうかと夢想していた。

これこそ昔から探し求めていた、音楽映画のテーマになるのではと考えると、胸騒ぎが収まらなかった。

明け方になって、十川尚子独特のキュートなヴォーカルで歌いあげた、タイトル・ナンバー「Winter Wonderland」が心地よいバランスでできあがって、トラックダウンの作業は終わった。

レコードが発売され、記念のデビュー・コンサートやキャンペーンで気ぜわしい月日が過ぎたある日、私は西宮立今津中学校のブラスバンド・コンクール金賞受賞の記念コンサートが開かれる知らせをうけた。

得津武史氏亡き後、今津中学は「全日本吹奏楽コンクール」に苦戦したが、後を継いだ石川學氏の捲土重来を期した情熱と努力が、5年後再びブラスバンドの名門西宮市立今津中学校に金賞をもたらしたのである。

私は初めて今津サウンドを耳にしたのだが、腕白そうなイガグリ頭の少年たちが吹いているものとは思えないほど繊細なテクニックと、ダイナミックなアンサンブルに圧倒された。特にアンコールとして演奏されたデューク・エリントンの「ソフィスティケーテッド・レディー」は、ニューヨークのマンハッタンを彷彿させる洒落気があり、とてもイガグリ

中学生たちの演奏とは思えなかった。

どうしてこんな少年少女にこのサウンドが出せるのか、五十名ばかりの日なたくさいイガグリ頭の腕白達が、まぎれもなくワーグナーを、そしてデューク・エリントンを謳いあげている。私はその奇異な光景に驚きと不思議な感動をおぼえた。

アンコール曲が終わって拍手が鳴りやまぬ間に、私は指揮者の石川氏をたずね握手を求めた。そして伝統の今津（得津）サウンドを受け継いで守り抜かれたご苦労やエピソードなどを伺うことにした。

それから私は数ヶ月にわたり、今津中学ブラスバンドの練習を見たり、今や神格化された得津氏の話を夢中になって聞き漁った。

吹奏楽専門誌のバンド・ジャーナルや新聞などに掲載された記事、変色した十六ミリ記録フィルム、ビデオ・テープなどを丹念に何度も見るうちに、得津の数限りないエピソードや、辛辣な罵声による練習風景の断片が、寝ても覚めても、頭から離れなくなってしまった。

本人に会ってみたかった。会って思う存分音楽の話や少年たちとの長い吹奏楽の戦いの話を聞いてみたかった。

ある夜、私は夢の中で得津氏と会話していた。

「あんた、ワシみたいな、がらくた教師の話を聞いてどないするねん。え、何？映画にする？あほ、そんな照れくさいことやめてくれ。それで、……いつ出来るねん、その映画たらは……」

後に、この会話を得津の声色を使って比紗子夫人に話したら、

「まあ、そっくり！気持ち悪う……。」

といわれた。

私に得津氏が乗り移っているみたいだと思われたらしい。

「多分、あの人はそんなことといいながら、まんざらでもないんでしょうね」

と笑っておられた。

その後も再三、私は夢の中で得津氏と会話した。

客観的な資料や情報はかなり揃ったが、どうしてもどすのきいた本人の声で、あの独特

な語り口で、直接、話を聞いてみたかった。

そして、奇妙な私の願いを聞きいれてくれることになったのだ。

「君はワシが倒れて病院へ担ぎ込まれた時、娘たちを連れてやって来てくれたな、あの時はまだこっちの世界へ来るかどうか、迷ってる時やったんや。どうや、ワシの話を聞きたいのなら、その三日間に戻ってもう一度君は来られるか？」

夢の中でしかできない奇妙な会話だが、不思議な異次元の世界へタイムスリップするように、私は得津氏の指定した約束の時空へ向かうことにした。

子供時代～戦中

（二）最後の軍艦マーチ

「守るも攻めるもくろがねの浮かべる城ぞたのみなる
浮かべるその城日の本のみ国の四方を守るべし……」

と歌われた、旧日本海軍の代表的軍歌として知られる、行進曲『軍艦』（軍艦マーチ）は、一八九七年（明治三十年）頃、鳥山啓の詞に瀬戸口藤吉が作曲した行進曲である。

戦時中は戦意高揚を目的に頻繁に演奏され、いたずらに多くの兵士を死に追いやった。そのため、忌まわしい軍国主義の象徴とも言われたりしたが、戦後はその戦意高揚の威力がパチンコ屋で活用され、負けても負けてもパチンコ玉を買って挑戦させる絶大な効果をあげているという。

しかし、この行進曲が傑作である理由に、第二次大戦後戦勝国である米軍の吹奏楽団が好んで演奏したり、日本を象徴する曲としてサミットの公式な迎賓曲として演奏されるなど、戦後半世紀を迎える昨今でも、とかく物議をかもしながら存在感の衰えない楽曲である。

そんな問題付きの「軍艦マーチ」を得津が事あるごとに好んで演奏したのは、彼が青年時代を過ごした戦時下に皮膚呼吸的にすりこまれた楽曲だからというだけではなく、時代と目的を超越して少年ブラスバンドの志気を昂揚させるストレートで豪快な威力を持っていると解釈したからだ。得津がこの曲を高らかに演奏する姿を不穏な軍国主義者と見るのは短絡的であろう。

私にはむしろ自分のキャラクターをカリカチュライズして見せる得津独特の「テレかくし」のように見えて仕方がない。

しかも難曲の練習で疲れ切った時は「例の奴、いくぞー！」と元気付けにこの曲を演奏し、得津サウンドのビタミン剤ともなっていた。

以来、「軍艦マーチ」は得津バンドと得津自身を象徴するテーマ曲となり、奇しくも得津にとって、ブラスバンドを指揮する最後の曲ともなったのである。

得津はハワイ旅行が大好きで何度も夫人と訪れており、ハワイアン・ミュージックは「ビールに一番合う音楽や！」と楽しんでいた。従って彼の頭の中で「軍艦マーチ」とハワイアン・ミュージックは同列に等しい爽快な音楽として存在したのかもしれない。

得津は、少年たちをその夢のハワイへなんとかして遠征旅行に連れて行きたいと願って

いた。

昭和五十六年十一月。

今津中学を退官してからも地域の少年達の指導を依頼されていた彼に夢の実現をもたらしたのは、当時弱冠二十六歳の西宮市市会議員で西宮市吹奏楽連盟理事長でもあった今西永兒氏。得津サウンドの信奉者としてぜひ海外にそのすばらしいサウンドを響かせたかった。

少年たちにとっても始めての海外遠征旅行であったため、得津は普段よりも厳しく熱の入った練習に打ち込んでいた。

「あほっ。バカモン。そんな屁みたいな音出しとったら、アメリカのガキに笑われるゾー。しっかり吹けー。吹きまくれー」

指揮棒を思い切り指揮台に叩きつけて、気合いを入れた。

いつも使っている天ぷら棒は海外での演奏に似合わないと正式な細い指揮棒を振ってみたが、指揮台を叩く音は迫力がなく、得津のいらだちが募った。

少年たちは、眼の前に迫った夢のハワイ旅行に向かって、力いっぱい演奏するのだったが、ホーンセクションがうわずってミストーンをする。シンバルがタイミングを間違える。得津の目が、眼鏡越しに光る。

「こらぁー」

と振り降ろす指揮棒が、ポキッと折れる。

「くそ！こんな、やにこい（華奢な）指揮棒はあかん！」

得津が足下の天ぷら棒を取ろうとして、うつむいたその時、得津の頭に落雷を受けたような、強烈な衝撃が走った。

演奏を中断した少年が叫ぶ。

「先生！得津先生！どないしたんや！」

得津は頭から指揮台に倒れ込んで意識を失った。

「先生しっかりしてください。病院はもうすぐです」

そう声をかけた救急車の乗務員は、なんと偶然にも十年前に今津中学のブラスバンドでトランペットを吹いていた○○君であった。

「先生、大丈夫ですか」

少年たちが呼んだ救急車の中で、自分を呼ぶ声を遠くに聞いた得津は一度、意識を取り戻した。

「なんやお前か。ワシはいったい、どこへ……」

得津はそこでまた、意識を失ってしまった。

県立西宮市民病院の集中治療室に運ばれ、すぐに検査が始まった。クモ膜下出血の重症であった。

その夜、得津はＩＣＵで大いびきをかいて眠り続けた。

かけつけた得津夫人や近親者たちとの会話は、一言もできずじまいであった。

翌朝、再び脳出血が起こり、担当医の笹生院長は手術を断念せざるを得ないと判断した。いわゆる脳死の状態になることが宣告されたのである。

そして、得津の心臓は一時停止した。

（三）病院の一室

得津武史の世界への私のひたむきなイマジネーションの旅は、時空間を超越し、異次元の扉を開いて、私を県立西宮病院一階にある、特別治療室へ到達させた。

まくら元には、現在の心拍数、血圧を知らせるマルチモニターや、酸素ボンベ等、多くの医療器具が緊急の治療に対処すべく並べられている。

光は南側のカーテン越しに入ってくるが、外は霧のような雨が降っており、部屋の中は淡いブルーの空間が占めていた。

私は南側の窓際に座って、ベッドの中の得津と対面していた。

得津はゆっくりと目を開いて、

「おう、来ていたのか」

私を認識するといきなり、

「あんたは音楽が好きでっか……」

とたずねられた。

得津の最初の言葉であった。かすれていたが、ぬくもりのある声だった。

「はい。僕は、子どもの頃から父の遺した蓄音機とSPレコードに夢中で古いジャズに傾倒していましたが、今、その原点のようなブラスバンドのサウンドに夢中になっています。しかも、あの腕白少年たちが大人と同じ楽器を持って、すばらしい音楽を演奏する光景は、単純にそれだけで不思議な感動をおぼえます。そして、得津サウンドと呼ばれるブラスサ

ウンドがどのようにして生まれたのか、どんなドラマがあったのか知りたくて、どうしてもご自身から直にお聞きしたいと思ってやってきました」

得津は、しばらく天井を睨んでいたが、ゆっくり語りはじめた。

（四）ワシは生まれも育ちも和歌山市

家は緑あふれる豊かな自然と黒潮が運んでくる温和な気候に恵まれた水軒浜の近くにあった。

産声をあげたのは、大正六年（一九一七）十二月十日。

第一次世界大戦が終わるちょうど一年前の混乱期や。

親父は和歌山市内で撚り糸工場を営んどった。朝早うから、晩遅うまで工場で黙々と働き通しの、いわゆる職人気質の人間やった。

お母(か)んは若い頃小学校の教師をしとったから、よう通る声ではっきりしゃべる、しっかりもんや。

弟が生まれたのはワシが十一歳の時やから、それまではほとんど一人っ子状態で、「タケシ」とか「タケちゃん」とかいうて、そらようかわいがってくれた。

幼い頃は水軒浜で毎日磯遊びをして遊んどった。今は埋め立てられて臨海工場地帯となっとるが、かつては海水浴客でにぎわった景勝地やった。

あの頃はただもう水に浸かっているだけで楽しかった。形はむちゃくちゃやったが泳ぎだけは誰にも負けん自信があった。

だから、学校の教師になってからは、生徒たちと競泳して勝つのがワシの喜びやった。ただし距離は二十五メートル。それ以上は勝つ自信がないので泳がんかった。

やんちゃ坊主のワシは、みんなが水を汲む井戸の淵に足をかけて靴紐を結ぶなんて序の口。自転車の荷台に後ろ向きに乗って、わっぱで鶏の首を引っ張りまわして遊んだもんやった。かわいそうなことをしたおかげで大人になってからは、鶏がまったく食べられんようになった……。

そんな悪さをしては、お母んや小学校の先生に怒られた。

先生に怒られると必ず隠れるのが音楽室のグランドピアノの下や。その頃から少なからずピアノとは〝ご縁〟があったわけやな。

「音楽取調掛所」なるものをご存知か？

東京音楽学校、東京芸大の古い呼び名や。ワシの叔父はここの出身で、親戚の中でも一番カタい人やった。

当時、叔父は和歌山県立男子師範学校の音楽教官やった。あまりのゴンタ（きかん坊）にワシは、叔父の家の座敷牢のような部屋に放り込まれていたことがある。

そこでは日曜日に、どこかのお嬢さんの下手くそなピアノのレッスンがあった。ワシは〝座敷牢〟でそのレッスンを聴きながら、

「あのくらいのことならオレでもやってやるぜ！」

と、始めたのが音楽の道に入る第一歩やった。

ピアノを弾く前は必ず手を洗い、ピアノに向かって「お世話になります」とおじぎ。叔父の前で「お願いします」と深くおじぎ。そしてレッスン終了後はこの逆の順序で、叔父にお礼のおじぎ。ピアノにおじぎ。手をきちんと洗って終了。本当に厳しいものやった。

こんな厳しい叔父が、一日だけ解放してくれる日があった。お彼岸や。

「ご先祖を大事にせよ、墓参りをしてこい！」

やっとレッスンからから開放や。

ところが、殺生が許されないこの日ばかりは好きなトンボ釣りもハゼ釣りも絶対禁止。心躍る少年のワシにとって、それは無理というもの。愛用の竿を裏から持ち出し、アゼ道を少し離れた小川に向かってまっしぐらに走るもんや。

しかし、仏さんや神さんはそんなワシの行動をお見通しやった。トンボを捕っての帰り道、みごとに田んぼの肥溜めに落ちてしもた。

お母んにバレたらえらいこっちゃと、慌てたワシは近くの川にドボンと服ごと飛び込んだが、あまりの臭さにあっさり御用となってしもたんや。〝ウン〟の悪い話やで（笑）。

中学校はあの『黒潮迫る紀の瀬戸に……』という校歌で知られる、和歌山県立和歌山中学校や。当時はゲタの音を高らかに響かせて、和歌山城の砂の丸に集まって、よくケンカをしたもんや。

ケンカ相手は、師範学校、高等小学校、工業学校の連中やからほとんどワシより年上やった。商業学校は人数が少ないから相手にとって不足。海軍中学校は良きライバルやった。このゲタでパカッと張り飛ばす感覚がシンバルを思い切りジャーンとやるのに似てるやろ。

それでワシはシンバルの音が好きなんや。ひょっとしたら〝張り飛ばす〟快感もこの頃におぼえてしもたんかも知れん。

とにかくケンカとなればゲタをぬいで、パカッと張り飛ばす。

今の中学生のように、シンナーを吸ったり、先生に暴力を振ったりするようなケガラワシイ奴は一人もおらんかった。けんかにもロマンがあったんや。

しかし、ワシらはシンナーこそ吸わんかったが、先生の目を盗んでタバコは早ようから吸うとったな。

ある日、それがお母んにバレて

「頼むから学校や外では吸わんといてくれ」

といわれた。

次の日、家に帰ると勉強机の上に灰皿が置いてあったんでびっくりした。

さすがのワシも親に

「申し訳ないことをしたなぁ」

と、それっきり吸うのは止めたんや。

ワシは年の離れた弟と二人きりの兄弟やが、従兄弟たちは多かった。彼らの親は口をそ

ろえていうたもんや。

男には「得津の武史みたいなことをしたら、あかなして（ダメだ）。戦争中やのに非国民のような音楽やらしてよオ」（和歌山弁や）

女には「得津の武史のような悪い男にダマサレタラ、あかなよ！」

医学博士、造船会社の重役、中学校の校長、パン屋の社長と親戚はいろいろいるが、みんなから長い間、俺はケイベツのマナコで見られていたようや。

非国民といわれながらも音楽を志した以上、叔父の出身校と同じ東京音楽学校を二回受験したが、二回とも落ちた。なぜか軍事教練の点が四十八点では、音楽学校であれ、どんな国立・公立校でもあかんかったんや。

「お前は東京の学校に行かしたら何をしでかすかわからんから、親の目の届く大阪の学校の方がええ！」

ということで、昭和十年四月から大阪音楽学校（現・大阪音楽大学）のピアノ科へ通うことになった。

和歌山駅発七時二十分。帰りは大阪なんば発十七時の特急に乗る。途中の岸和田駅からは前髪のかわいいサッちゃんが一緒の楽しい通学となった。

二十歳の春やった。

中国大陸から砲声と軍靴の音が聴こえ始めた昭和十四年、卒業演奏会でサッちゃんは、ショパンの『ピアノ協奏曲第二番ヘ短調』。ボクはメンデルスゾーンの『ピアノ協奏曲第二番ニ短調』を弾いたんや。

信じてや、これでもワシはピアニストやったんやで。ただし我が恩師、大阪フィルハーモニーの朝比奈隆先生にはずばりこういわれたが……

「これほどメンデルスゾーンと人相風体が、かけはなれたピアニストも珍しい！」

ワシは時々その言葉を悪夢のように思い出すんや。

（五）尋常小学校代用教員に！

まあ、メンデルスゾーンはともかく、無事、音楽大学を卒業したワシは、親父に小学校のセンセイになることをすすめられた。わしは嫌やともいえず、

「一年だけやで。二年目からは好きなことさせてや！」
と約束し、大阪市立南田辺小学校に赴任した。
『大阪南田辺尋常小学校 代用教員ヲ命ズ但シ唱歌担任月給四拾五円支給』の辞令を受け取ったワシは、
「センセイでもオシッコしやはんのか？」
とまじめに聞く小学生を見て、
「こんなかわいい生き物たちがこの世に存在するのか」
と不思議に思ったもんや。
それにひき替え、このごろのガキはド憎たらしいな！テレビがいかんのか、親や先生がいかんのか…。
当時、唱歌担当やったワシには、今でも口笛で吹きたくなるような懐かしい曲がいっぱいある。
『菜の花畑に入り陽うすれ……』
『我は海の子、白波の……』
『しばしも休まず槌打つ響き……』

このごろはやりの、けったいな歌より素直できれいなメロディーや。
おふくろが台所仕事をしながら口ずさんでいたこんな歌がひょっとしたら、オレの音楽の原点かも知れん。
懐かしいなあ。
得津が私の前で口笛を吹こうとしたが、音は出なかった。

（六）いきなり招集令状が……

子どもたちと楽しい穏やかな日々が続いた昭和十四年の春のこと。
中味「四十五円也」の初めての月給を、袋のまま親父に進呈したら、親父は何もいわずに涙をポロポロ流してくれた。
「ああ、生まれて初めて親孝行した！」
と思ったら、その時、家の門をトントンと叩く音がした。

「得津さん、おめでとう！」
届けられた封の中身は赤紙、招集令状や。目の前は真っ暗になった。
君死にたまふことなかれ
すめらみことは戦いに
おほみずからは出でまさね……
与謝野晶子の詩が胸を刺す。
「勝手にさらせ！」や。
入隊したのは、陸軍の中で一番ガラの悪い、馬で大砲を引っ張る信太山野砲兵第四連隊、思いを寄せていたサッちゃんには、
「ワイはな、お国のため、天皇陛下のために死んで来るんやさかいに、ええとこあったら嫁はんに行けや」と別れた。
サッちゃんは一つ小さくうなずいたが、涙は見せんかった。
旧陸軍の精鋭となった俺は、関東軍東部国境警備の一兵として満州の西東安に駐屯することになった。

昭和十五年。零下四十度の極寒に耐えながら、兵役を続けていた僻地で、『サッチャン別府ニテ死去』の電報を受け取った。

こんな戦地でワシが生きているのに、なんで内地の娘が先に死んでしまうのか。

ワシはしばらく呆然と立ち尽くした。

（七）速成 陸軍軍楽隊

気持ちを持ち直しつつあった、ある日のこと、俺は西沢部隊長に呼ばれた。

「得津一等兵、お前は音楽学校出身だったな。それなら特別任務を与える。いいか、余の命令は、天皇陛下の命令である。可及的、速やかに軍楽班を編成せよ。そしてお前が指揮をとれ。かかる辺境の地で兵士たちの志気を鼓舞するのは、音楽以外にはない。連隊記念日に間に合わせよ！」

えらいこっちゃ、ワシは連隊中を駆けめぐって仲間を集めた。

「トランペット」はサーカスのオートバイ乗りやったH一等兵と青函連絡船のI二等兵。「サキソフォン」は村の青年団で指導員をしていたH上等兵。「小太鼓」は写真屋のM二等兵。そのほか、北海道の荒磯で魚を釣っていたH二等兵、馬喰のS二等兵、チンドン屋のPや活動写真小屋の楽士の上がりまで集めまくった。

連隊記念日まで、後一ヶ月しかない。『天皇陛下の命令』やからやるしかない、楊柳の枝を毎日五、六本折って、シゴキにシゴイた。

ひどい音やったが、なんとか吹こうとしている曲が何であるかがわかる程度の音になってきた。

そして、とうとう連隊記念日が来た！

「よし、もうこうなったら音量だけで勝負せい！向かいのソ連軍の兵営まで響け」

とばかりに、連隊歌『ああ国防の第一戦、五条の勅論かしこみて』を、我が速成の大音痴軍楽隊が演奏し、それに合わせて兵士たちは声の限り歌いよった。

みんな感激して涙、また涙やった。ろくに音もでんラッパのH一等兵はあまりに自分の音が情けないことも手伝って、ポロポロ泣いとった。

そんなワシらの演奏にのって勇躍送り出した連隊は転進を続けて沖縄へ向かったが、そ

こで、ああ何ということか、全員玉砕したことを帰還後に知らされた。

軍楽隊をやってなかったらワシらも運命を共にするとこやったのに。すまん、すまん。ほんまにすまんことをした。

その後、練習を重ねた『満州第七九五部隊、速成軍楽隊』は、猛練習の結果、それなりに腕をあげて開拓団慰問や東安放送局で月一回の定期放送をやるようになり、指揮者のワシは兵長に二階級昇進の栄誉を受けた。この時ばかりはつくづく音楽をやっといてよかったと思うた。

そして、これが生涯、吹奏楽と運命を共にするきっかけになったというわけやな。

（八）ピアニストの奈都子と結婚

昭和十八年、除隊したワシは満州に出征する前、音大へ通うために下宿していた天王寺区生玉町の土地持ちの名家である十川光三氏の家に世話になっていた。

光三さんはワシを本当の息子のようにかわいがってくれ、その四人の姉弟たちとも仲がよく居心地の良い家やった。

特に次女の奈都子はピアニストで、顔も心もかわいらしいチャーミングな娘やった。

ワシは、ひと目で奈都子に惚れてしもた。

もっとも二人きりのデートなどしたことはなく、奈都子はワシが必死で語る子どもの頃の武勇伝をただ黙って興味深げにうなずいて聞くだけという、一方通行の〝会話〟やったが、ワシらはなんとなく通じ合えるモンがあったんや。

戦火の激しくなった非常時のご時世に、天皇陛下には申し訳なかったけれど、この奈都子と一緒になることに決めて、上本町の生国魂神社で形ばかりの結婚式を挙げた。

花嫁は実家に姐(ねえ)やが四、五人もいる良家のお嬢様なのに衣裳はモンペ姿で、ワシは軍服やった。

昭和十九年二月、神社の境内には梅の花が咲き始めとったが、ちらちら白いもんが降る寒い日やった。

（九）特殊部隊入隊で人間電波探知機になる！

新婚気分にひたる間もなく昭和十九年九月二十九日、中部二十二部隊へ再召集が来た。もはや、我が大日本帝国の敗色は濃厚やったが、いわゆる補充兵というエキストラの兵隊をお国は必要としとった。

なんで信太山の野砲第四連隊の栄誉ある兵隊が「また負けたかー！」の歩兵第八連隊へ入隊せなあかんのかと准尉に聞いたら、

「お前ら、ほんまに幸せなやつらや、陸軍の兵隊が港々で喜びを味わえるんやさかいな」

それはどういう意味か、気になって問い正してみると、なんと日露戦争で使うたような三十八式野砲を、透かしたら向こうが見えるようなブリキ製みたいな戦標船の甲板に積んで、アメリカの潜水艦を砲撃するという船舶砲兵隊や。つまり、戦闘の最前線で戦わされるあの『暁部隊』やということがわかった。

もう、ワシは目の先がまっ暗になった。こんな作戦にかり出されたら、命がいくつあっ

ても足りんがな。

ところが、「軍隊は運隊」とはよういうたもんや。ちょっとしたことで運命が変わりよる。その中隊の中から、音楽をかじっとった奴ばっかり五名が選び出されて、人間電波探知機をやらされることになった。

音楽やっていた奴は、耳の訓練ができている、その特殊な耳で敵機の来襲を聴きわけて情報本部へ通報せよ、というわけや。

そのメンバーというのがまたおもしろい。

ロシアの名歌手シャリアピン直筆のサイン入り楽譜を持っているという、バス歌手の牧嗣人中尉。東京芸大で、学生部長をやっている山本正人上等兵、作曲家の岩河三郎報国隊員、それに我が国を代表する偉大なるピアニスト井口基成二等兵。

ある日、我々は敵機の音を録音したレコードを聴いて耳を訓練するために、高級なデンチク（電気蓄音機、今のレコードプレーヤー）が必要となった。

ワシは、昔からの知人で、東安の時代には楽譜を送ってもらったりした関西交響楽協会の野口幸助さんに当時の音文教事務所へデンチクを借用に行ったことがある。その時、この重い電蓄を担がせたのは当時すでに、ピアノ界の権威やった井口基成二等兵やった。

大きな電蓄にロープをかけて、丸太棒で担ぐヒョロ長い大先生の姿を見るのはグツ（具合）が悪かった。ピアノの大先輩でも、ワシは上官やから二等兵の代わりに下士官が荷物を担ぐわけにはいかんのが軍隊というもんや。

それに内務教育で大先生の井口二等兵を殴らなければならない時もあった。

その日は、ノッポの井口先生の前をチビ新兵が担ぐデンチクを持って、協会のある梅新から甲子園までゆらゆら歩いて帰っとった。後をついて歩くワシは、送ってくれた野口さんに両手をちょっと広げて「グツ悪いわ」というゼスチャーを何度もやったもんや。

この電蓄で訓練した、B―29の編隊何機、グラマンが何機というのは、みんなかなりの確率で当てるようになった。飛行機のエンジンの音は、編隊が多くなればなるほど倍音の構成が複雑になるが、ハーモニー感覚が秀れている奴らにはそうむずかしい仕事やなかった。

後にワシはこの作業のお陰で四十人くらいのブラスバンドのどの楽器がミストーンを出したかが、わかるようになった。

（十）ワシにそっくりな娘が誕生

戦争の終わる直前の昭和二十年六月、ワシに初めての子どもが生まれた。

それが尚子や。ワシに似てタレ眼でちっちゃくて、何ですばらしいピアニストの両親からこんな指の短い子が生まれるのか。そんな子を母親の奈都子が一生懸命育ててピアニストにしてくれたんや。

「多木さん、あの子の音楽はどうや、ピアノもがんばってやってるんか？」

ふと現実に戻ったように、私の顔をのぞきこむようにする得津氏の表情は、この世の中で一番気になる存在が一人娘の尚子のことであることを物語っていた。

「はい、ピアノだけじゃなく、彼女のヴォーカルも好きだというファンが多くなって、近いうちにデビュー・アルバムのＬＰを作る予定です」

「そうか、歌もやるんか。いっぺんくらい聴いてやりたかったなあ」

得津は眼を閉じると、うっすらと眼尻を光らせた。

病室の南側の窓はオレンジ色からダークブルーに変わっていた。

昏睡を続ける得津のそばには、比紗子夫人と何かあれば一番にかけつける教え子の板橋さんが心配そうに控えていた。

（十一）米軍キャンプのジャズ・バンド結成

翌日はひと雨来そうなどんよりとした曇り空であった。

西宮の市役所と市民会館のビルの谷間は、ちょうど市民病院へのプロムナードのようになっており、私は足早に病室へと向かった。

得津は昨日より少し気分が良さそうに昨日の続きを話し始めてくれた。

「人間音波探知機がやれるという音感能力のお陰で、またしてもワシは命拾いしたわけや」

そして無事に終戦を迎えた。

和歌山の実家はB―29の焼夷弾で全焼。父も亡くなって、ワシは老母を引き取って西宮で一緒に暮らすことになった。

戦後の日本人の共通した苦しみは、「飢え」やったなあ。ともかく、やたらと腹が減った。昭和二十二年、日本はまだ戦後の混乱期の真っ只中で飢えに困ったワシは、南田辺小学校の音楽教師をやりながら、進駐軍のキャンプ巡りのジャズ・バンドを編成することにした。

ちなみに昭和二十三年当時の教員の月給は八級十号の俸給で七千六百三十八円。ところがバンドの月給は三万円や。しかしキャンプへ行くのは高給のためだけじゃなく、浅ましい話やが、コカコーラや白いパンに兵隊の飲み残しのビール、コンビーフの缶詰なんかが目当でもあった。

我がジャズ・バンドのメンバーは終戦後に、それぞれの楽器を一つだけもらって復員してきた旧陸・海軍の軍楽隊の連中と、弟がやっていた学生バンドの仲間を「腹いっぱいメシ食わしたる」とそそのかして結成した。

当時「腹一杯」というのがどれだけ魅力的やったか、わからんやろなあ。

管楽器セクションは吹奏楽出身者で充分演奏できたが、ピアノとドラムが問題や。ピアノは迷ピアニストのワシがやるとして、ドラムは我流で練習したという上田敬一君を雇った。彼は学生時代、器械体操をやっていて、手足をバラバラに動かすことのできる器用な運動神経の持ち主で、決して音楽性を買ったわけではない。

完璧とはいえないが一応、トランペット二、トロンボーン一、サックス三、それにピアノ、ベース、ドラムのいわゆるナインピースバンドができあがった。

かくして、陸軍兵長の軍楽隊指揮官殿は、終戦とともに「バンマス」と呼ばれるジャズメンになったわけや。服装も派手なツイードのスーツにラバーソール（ゴム底の革靴）。とても、元軍人、現在小学校の先生とは思えぬイデタチやった。

「吹きまくれーッ！」

ワシは練習の時だけ、軍隊調が残ってしまう。

「大きい音の出せん奴は、小さい音も出せんぞー」

激しい練習で唇から血のにじむ者もいたけど、さすが軍楽隊出身や、平気な顔で吹いとった。食べる物が悪いから皮膚も弱っとったんやろう。

つい、この間まで軍歌が飛び出していたラッパの歌口から、聞いた事もない横文字音楽

が流れはじめた。

「ほう、これがジャズちゅうもんか。」

（十二）進駐軍キャンプで軍艦マーチ

その頃の日本は、いままで経験したことのない敗戦という異常事態の苦しみを味わっていたわけやが、一番しんどかったのが猛烈なインフレやった。

毎日どんどん貨幣価値が下がって、メンバーの生活は大変や、米軍からもらう演奏料をなんとかして値上げしてもらわんことには生活に困る。しかしアメリカ軍隊というのはそう簡単に値上げに応じてはくれなかった。

そこでワシはいろいろ策を練った。

メンバー全員に神風特攻隊の鉢巻きをさせて、フル ボリュームでお得意の『軍艦マーチ』を演奏させたんや。

海軍軍楽隊出身のブラスの連中は久しぶりの『軍艦マーチ』に陶酔したように演奏しよった。

「吹きまくれーッ！」と、ワシが怒鳴る。

そしたら、ステージマネージャーのルイス中尉が、ステージへすっ飛んできよった。

「ネバーハップン！」

と青筋をたてて怒りながら、賃上げの書類にしぶしぶサインしよった。神風の恐ろしさを充分知っとったんやろうな。

ワシらの演奏はそんなド迫力のサウンドだけが売り物やから、お上品な将校クラブよりＮＣＯクラブ（下士官専用）とか、サービス・クラブ（兵隊専用）で人気があった。

メンバーの一人、トロンボーンのＹは、フィリピン・レイテ湾の大戦闘の生き残りや。しかも米軍の捕虜になった経験があって、その収容所で、

「お前は何ができるか」

とたずねられたＹが、

「トロンボーンが吹ける」

とこたえると、大喜びで兵士たちのバンドに入れてもらい、その途端に待遇が良うなったそうや。

まさに「芸は身を助ける」で、捕虜の間はまるまると太ってたが、戦争が終わって日本に帰ってきてからは、食べる物がなくてみるみるうちに痩せよった。

彼は日本に帰る時背中に白いラッカーでＰＷ（プリズナー オブ ワー：戦争捕虜）と書いたジャンパーを着とったが、Ｙが米軍でおぼえた『ヘイバップリバー』というジャズを歌う時、そのダブダブのジャンパーを着てステージに上がったら大受けやった。

Ｙはワシに負けんいくらい、イチビリや。こうもり傘をさして、楽しそうな身振りでＰＷの背中を観客にチラチラと見せながら歌うと、米軍将兵はワァワァ笑う。やがて拍手がわき起こり、総立ちになってこの哀れな元日本兵に声援を送った。

「お互いに一生懸命戦ったなあ」という感慨が、ヒシヒシと伝わってくるのをステージの我々も感じたもんや。

Ｙは敵の捕虜になったために軍人恩給が支給されなかった。そんな彼を慰めたり、メンバーの連中の気が沈んだりすると、キャンプの演奏が終わった夜などは、大阪駅前の「呑み屋市」へよく行った。

〝猫いらず（ネズミを捕獲する薬）？〟で無理矢理に醗酵を調節したとかいう、わら屑の浮いている質の悪い「どぶろく」や、その「うわずみ」と称する酒を懐具合にあわせて飲む。

それに、鯨の脂身の燻製をかじりながら飲む焼酎もうまかった。
ワシはみんなに、よういうた。
「酒、ちゅうもんは愉快に飲まなアカン。くよくよしとったら、うまいことあらへん。さあ、飲め、飲め！」
ワシと一緒やと、飲めん奴まで調子にのって飲みよった。

（十三）音楽に国境はあらへん

進駐軍キャンプの仕事で一番うれしいことは、ひもじい我々にとって夢のような飲み食いにありつけることや。なんとも不思議な味のするコカコーラとか、とろけるようにおいしいアイスクリームなど、ワシらの胃袋がびっくりするくらいのうまさやった。
ルイス中尉が時々連れて行ってくれるソーダファウンテンと称する喫茶店での話やが、この部屋に入るとなんともいえないコーヒーのいいにおいが漂っている。みんなそれにつ

られて

「コーヒー・プリーズ」

というが、バーテン兵は首をかしげて

「What?」

と、まったく通じない。

そこで太鼓の上田敬一の登場となる。彼は以前にキャンプで働いたことがあり、発音がちょっと違う。

彼がバーテン兵に人差し指を出して得意げにいう。

「カッパノフェー」

そうすると、不思議なことに

「オーケー」

とコーヒーを出してくれた。

因みに「カッパノフェー」と聞こえるのは、[Cup of Coffee]のことらしい。

そのほか、紅茶のことは「ブラック・ティー」とか「ホット・ティー」ではなく、「ハッティー」。ミルクコーヒーは「ミーコー」。ウオーターは「ワラ」。

ついでに「いま、何時？What time is it now?」は「掘った芋いじるな」で通じると上田は教えてくれた。

「カッパノフェー」「掘った芋……」

当分ワシらは口癖になった。

こんな浅ましい話もある。

ワシがキャンプのどこかで缶詰めを拾ってきた時や。演奏の休憩時間に缶詰めを開けたら、おいしそうなチョコレートの粒が、たくさん入っていた。ワシが真ん中に座って、みんなに片手を出させ、手のひらに数粒ずつのせていく。中にはどさくさまぎれに両手を出しとるのもいたがワシはその手をバシッ。平等に配り終わった。

みんな、米軍兵士に見つからないように、コソコソと食べた。甘くておいしいチョコレートやった。

ところが翌日、北野シアター（当時米軍接収中）に出演中、全員が下痢症状を訴えた。どうもチョコレートが怪しい。

あとで灰皿代わりに残しておいたその空き缶をルイス中尉が見つけ

「誰だ、下剤を盗んだ奴は！お前らか！」

と怒鳴られた。

英語の不得意なワシとリクエスト曲をいいに来る兵隊のやりとりは漫才よりおもしろいといわれた。

兵「タンコブーシー」炭鉱節
「たん瘤はあらへん」
兵「ストゥリンパー」String of Pearls
「ワシのバンドにストリッパーはおらん」
兵「サンサンデモーニン」Some Sunday Morning
「サザンデでモオ?、そんな九九あらへんで」
兵「ツビンナロンロンタイ」It' been a long time
「茶びんをどんどん叩いてどないやて」（関西で、RとDが入れ替わる地方がある）
兵「ナシノヨーヨー」支那の夜（米軍はヨルをヨーヨーと言う）
「支那のヨーヨー、ミタコトナイ」
兵「チチミトナイ」Teach me tonight「うん?」

兵「チ・チ・ミ・ト・ナィ」（ゆっくりいう）
「ワ・シ・ハ・ミ・タ・イ」
兵「テキサラデナイ」Texas Saturday Night
「ハンバーガーでもよろしおま」
兵「ナランデー」Night and Day
「おいみんな、並べ言うとるデ、なんぞくれるんかいナ。早う並べ」
兵「ダメーノ」Domino
「ダメ、ダメやのう?ワイらの音楽、ダメやてか」
兵「アゲーン」Again
「もっぺんこの曲やれてヵ。」
兵「ソーボートチャイ」Slow boat to China
「ソっとボーっとチャイするんか」
兵「ディーパープ-」Deep Purple
「屁こいとるんか」
兵「ラマンコカコーラ」Rum and Coca Cola

「ラマン こりゃ こりゃって なん残っちゃ」

もっともオモロイのがあったが忘れてしもた。

いろんな曲をやったが、ほとんど米軍からパクった、『十センパート』（テンセントピース）という譜面で演奏したんやが、ピアノは一小節に左手で「ブン」右手で「チャ」、「ブンチャ」「ブンチャ」でたまに退屈まぎれに分散和音をカラカラと入れ、合いの手にしたもんや。

迷ピアニストでも充分弾けたんやが、チクショウ！一年ぐらいで音楽の様子が変わり始めた。

誰が発明したかわからんが『ブギ・ウギ』ちゅうもんが出てきよってなあ。暇やった左手が間段なく付点八分を弾かんならん。右手はそれより忙しいフレーズや。『パンプス・ブギ』『バックビート・ブギ』『レッドバンク・ブギ』『カウカウ・ブギ』『チュウチュウ・ブギ』『バンブル・ブギ』くそ忌々しい音楽やで。

ワシはほとんど手抜きしたけど、ベースにドラムはツービートからフォービート、サックスはマウスピースをガバッと銜える品のない奏法に変わっていった。

時には演奏中に楽しいハプニングもあった。

アメリカ兵が突然ステージへ上がって来て一緒にやらせろという。ワシは白い奴（白人）よりドン公（黒人）が好きやった。ドン公というのはタドン（炭の一種）のように真っ黒な兵隊のことや。

ある日、テナー・サックスを我々のメンバーから借りて一緒に演奏したら、これが信じられんくらいすごかった。ワシらもノリにのってすばらしい演奏になったが、これがジャズの醍醐味、ジャム・セッションちゅうもんやそうな。

その『Cジャム・ブルース』が終わった時、ワシは思わず黒い電信柱みたいなアメリカ兵と、ステージ上で恋人のように抱き合ったもんや。

こんな話もある。

ワシらが例によってまるでバンドテーマにでもなったような「軍艦マーチ」を高らかに演奏していたら、兵隊の一人がストップをかけるどころか、「俺にも吹かせてくれ」と自分のラッパを持ち出してきて朗々と吹き始めた。

「軍艦マーチ」を憶えていて、一緒にやるのかと思ったら、なんと彼が吹いているのは、『錨をあげてAnchors Away』やないか。言うなれば、この曲はアメリカの「軍艦マーチ」、同時にぶっつけて演奏しても、これが奇妙にアンサンブルしよる。

すばらしい音楽の日米戦争で盛り上がって、兵隊たちもオレ達も大歓声をあげた。
「なんで、こんなにすばらしい音楽をやれるやつらと、この間まで殺し合いをしとったんやろか。」

言葉の全然通じない同志が音楽で完璧に話ができてるがな。目と音と心で話し合うのや。こんなすばらしいことはあらへん。

その夜はクラブに集まった兵隊たちと、わしらは不思議な一体感を味わいながら、みんな立ち上がってこの演奏にいつまでも拍手をおくった。
音楽に国境はあらへん。
すごいな、音楽の力は！
ついでに「軍艦マーチ」はやっぱり、名曲や！

（十四）一つの破局

進駐軍バンドの仕事にうつつをぬかしていたワシに、南田辺小学校が良い感情を持たなかったのは当然のことかも知れんが、学校への出勤はとうとう週一回くらいになってしまい、ついに校長と大ゲンカ。ついでにワシのことをボロクソにいうた先生もハットバシテ（張り飛ばして）南田辺小学校を辞めてしもた。

音楽の傾向も変わってきて、小難しいモダンジャズを眉間に縦じわつくってやる若者のバンドが出てきよった。

進駐軍バンドも新旧交替の時期が来ていたんや。

職を失ったワシの生活をきっちり支えてくれたのは、妻の奈都子やった。

ワシのスタイルと違って、本格的な美しいピアノタッチを聴かせる奈都子の演奏は、ラジオやテレビの番組『素人名人会』『宝塚ファンコンテスト』など週に七本のレギュラー番

組に出演する超売れっ子のピアニストとなっていった。
反対にワシは安定した仕事もなく、昼間からブラブラして酒を飲んでいた。
同居していた母親にはそんな状況が情けなかったらしく、何度もたしなめられたが、意地っ張りのワシは母にも奈都子にも辛くあたることが多くなった。
なにしろ結婚する時、奈都子の父親は
「うちの娘は武史君にではなく、お母さんに差し上げます」
といったくらいワシの母親を信頼しとった。それだけにワシの情けない姿をそばで見ているのがたまらんかったんやろう。
母はおれと暮らすことに愛想をつかして、置き手紙もせんと、弟の家に行ってしまった。
自分に責任があるのは重々わかっていただけに、どうにもやり切れん気持ちだけが空回りした。
ワシは家族のことも考えず荒れまくる自分の神経を麻痺させようと安酒をあおった。
そんな酔漢の俺を怪訝な顔で、
「へー、あんたがあの有名な得津奈都子の旦那かいな」
とあきれ顔で見つめる奴もいた。

ワシは家へ帰ると気が狂ったように奈都子にくってかかった。

あげくの果てに当時バンドマンの間で、流行っていた覚せい剤『ヒロポン』にまで手を出す始末で、たまにバンドの仕事に出くわしても、うまくピアノを弾けるわけがない。指がもつれて、しまいにげんこつで弾いたら、すぐクビになってしもた。

「もう二度とピアノなんか弾かんぞ」

と怒鳴って家へ帰った時、一番先に目に付いたのが奈都子の命でもあるピアノやった。

ワシはそれをアイスピックでメチャクチャに突き刺してしまった。

奈都子に手を出したのも、そんな時や。

尚子は子ども心に、そんな暴力的な父親から必死になって、母親をかばうようになった。

「なんとかせなあかん」そう思いつつも、酒の勢いにのると、別人の凶暴なワシが意思とは裏腹の言動に出てしまう。

そして、とうとう親子、夫婦で素直に話をするチャンスを失ってしまい、奈都子は尚子を連れて逃げるように家を出て行った。

次の言葉が見つからないのか、得津は「ふーっ」と長いため息をつき、思い直したように続けた。

やがて、正気に戻ったワシはやっきになって二人を捜した。早よう捜して連れ戻さんと、ワシら親子は一生、離ればなれになってしまう。

やっきになって捜しあてたアパートに、二人はひっそり隠れるように住んでいた。

しかし二人は、もう窓も扉も心も開こうとしてくれなんだ。

ワシは窓ガラスに小石を投げたり、強引に侵入しようとしたりしたが、通りがかりのポリ公に見つかって、ごっつう叱られた。

あきらめての帰り道、ワシはまだ小学校四年生だった尚子のことが気がかりで仕方なかった。これからあの子はどうなるんやろ、素直に育ってくれるのやろか。自分のしたことにこれほど後悔して悩んだことはなかった。

その頃から、尚子は辛いことがあると、一人でピアノに向かって、人一倍練習することで悲しみに打ち勝とうとしたらしい。さらに指が短いというハンディがありながら、ピアニストとして自立する心を作り上げていったんや。

ワシは考えた。ワシのもっともワシらしくない時代、そして、もっとも嫌いな自分から一日も早く抜け出して、その記憶を封印してしまおうと。

数分の沈黙があった。

「多木さん、その後ワシには子どもがいない、子どもは今中の子どもたちだけやというてきたのは、そんなわけがあるからですよ」

看護婦がハートスコープをチェックに来た。心拍数、体温、血圧。

医師はこのままの状態が続いても、意識が回復する望みはないと夫人に伝えた。

得津は少し疲れた様子で私に、「明日、またな」と目配せした。

私はその夜、ロイヤルホテルのラウンジバーで演奏する十川尚子のピアノを聴いた。いつものように、尚子のピアノサウンドは優しくきれいで、くったくのない明るさは、あの

逆運の幼児期を越えてきた人のものとは思えなかった。

（十五）ジャズ・バンド最後のステージ

十一月五日、医師は近親者の面会を許可した。多くの人たちが、意識のない得津と寂しい面会をした。

数人の人たちが、手を取って声をかけたが反応はほとんどなかった。

ハンカチで目頭をおさえながら最後の面会者が退室した後、しばらくして得津の脳波が私に語りはじめた。

「今日は、いよいよ今津中学へ行く話やな。今日がんばって話しをしてしまわんと時間がなくなるな」

あの荒れ狂っていた時から数カ月が過ぎたある日、小学校の専任音楽教師の話が舞い込

んだ。

なぜか、今度はこの辺りでも最もお品の良いといわれる夙川小学校や。戦後の混乱期をようやく抜け出した昭和二十七年やった。

ギャバジン（戦後流行った腰のある丈夫な綾織物）のズボンにラバーソールの靴を履いたバンドマンを副業とする音楽教師は、はたから見ると奇妙な人物に見えたやろな。

ピアノの技量はさておいて、あっちこっちで演奏するジャズ・バンドのリーダーという稼業も楽しかったが、あのまま続けていればさしずめ、どこかの地の果てでストリップの伴奏でもやることになったやろう。

「このあたりが潮時や」と思い切って解散することにした。

なんば、高島屋の特設ステージで行われた、ワシらの最後の演奏会に夙川小学校の同僚の先生達がおもしろ半分で見に来てくれていた。

その中に一人、ワシの人生の後半、心の支えになってくれた女性が混じっていたのや。

新しい学校の同僚の比紗子や。

彼女は宝塚歌劇が大好きで夢見ることの好きな反面、現実面ではサッパリした気性の持

ち主やった。

彼女のワシの第一印象は予想に違わず最悪で、

「女性をすぐに見下す嫌な奴！」

だったらしい。

当時のワシは自分が荒れまくっていたこともあったが、確かに女性に対する妙な敵愾心（てきがいしん）があったのかも知れん。

しかし、比紗子にとってワシの第一印象が最低やったということは、まあ裏を返せばこれ以上は悪くならんということや。

そんな姿カタチは最悪なワシが演奏する音楽が、見てくれとは大違いのロマンチックで優雅なものやったという、大きなイメージとの落差に興味を持ったということかな（笑）。

花束を贈られて、ジャズバンドを廃業したワシはしばらくママさんコーラスの指揮をしたりしていたが、上品な夙川のマダムを相手にガラの悪さは変えようがない。

「アホカー、もっと気合い入れて練習せえ！」

と怒鳴るわけにもいかんし、所詮ワシには肌があわんので、これもご辞退申しあげた。

（十六）運命を導く夜明けのラッパ

夙川小学校で教員をして、どうにか、その日その日を暮らしていたとはいえ、仕事にまったく身が入らんワシは、またまた、酒に手を出し、夜な夜なあてもなく西宮の繁華街をうろついていた。

映画館・パチンコ・飲み屋…。酔眼朦朧と街をさまようワシから、もはや「酒は愉快に飲まなあかん」というポリシーは完全に抹消されていた。

俺は何のために生きているのや。

音楽か、それも生活するためだけの音楽か、俺っていったい何や、何が夢で、何が希望なんや、何のために生まれてきたんや！

同じことを何度も何度も自問自答しながら、酒をあおった。

飲み明かすこともしばしばあったが、そんなある日、降りしきる雨の中でとうとう操縦

機能を失ったワシは、ついに学校らしき建物の軒先にうずくまって寝てしまった。

夜明けになってその校門あたりがにわかに騒がしくなった。

薄目を開けたワシの目に真っ先に飛び込んできたのは、楽器を抱え、校門を乗り越え、構内のグランドに駆け込んでいく少年たちの姿やった。

やがて、彼らが練習するラッパのロング・トーンが聞こえ始めた。

濃い霧のような混濁した意識の中で、この世のものとも思えない音に耳をかたむけた。

それはワシにとって、つい最近まで聞き慣れていたはずの音でもあるのだが、遠い遠い昔の懐かしい音のようでもあった。

ワシはイガグリ頭の少年たちが一生懸命吹くラッパの音にじっと聴きいった。

そんなことがあったある日、昔ワシと一緒に吹奏楽を志したことのある、鈴木竹男さんから電話がかかってきた。

それは何と、あの夜明けのラッパを聴いた中学校、西宮市立今津中学校の音楽教師にワシを推薦したいという話やった。鈴木さんは実はその今津中学吹奏楽部の指導者やったんや。

「得津さん、今津中学校はね、生徒の大半が通学する道の両側に、映画館、パチンコ屋、飲食店が軒を連ね、ご存知の通り夜は酔っぱらいの街にあるんですよ」

ワシは思わず頭をかいた。

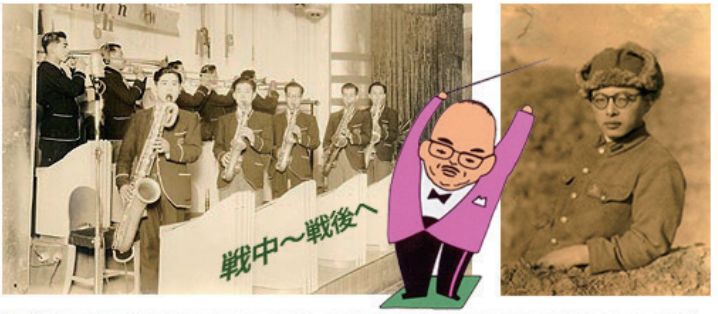
「この街は教育的環境にはほど遠い。こんな状態のもとで、音楽の授業に高尚なクラシック音楽を聴かせて理解させるのは無理というものだ。だからこそ彼らに楽器に触れさせて音楽を演奏する喜びを与えてやりたいんだ。僕が手掛けてきたこの吹奏楽部を君が代わって鍛えてくれないか。君なら絶対にできる！」

今津か……

今津中学のイガグリ坊主の、ブラスバンドか……

あまりにも唐突な鈴木さんからの誘いやったがワシはこの話を聞いた瞬間、なぜか身震いするような運命的なものを感じた。

Allgro Assai


戦中～戦後へ

滿洲第795部隊吹奏樂團

〈第二章〉

（十七）そして、今津中学へ

この道より　我を生かす道なし　この道をいく　　実篤

ワシはこの言葉が好きや。いや、好きというよりむしろこの言葉こそワシのすべてやといいたい。

この道、とは『吹奏楽の道』。もっとはっきりいえば、『今津中学校吹奏楽部指揮者としての道』なんやとワシはしっかり心に決めた。

あの日、夜明けのラッパを聞くまで、ぐうたらなワシは酒におぼれてすっかり自分の歩む道を見失っていたんや。

お上品な夙川小学校から、西宮市の『文化果つるところ』といわれる、西宮市立今津中

学校に転勤が命ぜられたのは昭和三十一年のことやった。

『今津』は、かつては灘五郷の一つとして、麹の香り漂うもの静かな町やったという。しかし、その当時の今津にはそんなもののカケラも残ってはいなかった。

生徒の大半が通学する道は、およそ教育的環境にはほど遠く、生活保護を受けている生徒数がもっとも多いのも今津中学やった。

まさに今津を「文化最果ての地」と表現した人もいる。こんな環境の音楽教育で、ベートーベンを説き、シューベルトを話し、その作品をレコードで聴かせたところで、消化しきれない生徒がほとんどといっても過言ではない。

彼らにはベートーベンもシューベルトも同じような外国人で、やたらにこ難しい退屈な曲を作って、「俺たちを悩ます」くらいにしか感じておらん。

「音楽とは縁なき衆生」である彼らに、音楽に親しみ、音楽を聞く姿勢を養うのは、ともかく「楽器」というものを手にして、学友たちが実際に目の前で力いっぱい楽器を演奏して見せることや。

そして、みんなが合奏すると、不思議なくらい心が揺り動く空間ができる『吹奏楽』という世界を体験させるよりほかにはないとワシは思った。

自分の出す音はたった一つの音なのに、それをみんなが決められた音をきちんと出すとすごい音の空間ができる。これはいってみれば、みんな責任を持って、自分のことを正しくやれば、すばらしい世の中になる、という社会科の勉強にもなるわけや。

意を決してワシは今津に赴任した。

（十八）「オッサン」から「センセイ」に

前任の鈴木竹男さんはワシが赴任するとすぐに阪急少年音楽隊に指揮者として招聘されることになった。今や阪急少年音楽隊は大阪の吹奏楽界を代表する立派な楽団に育ったのは鈴木さんの功績といえるやろう。

さて、今津中学のブラスバンド部の指導をその紳士的な鈴木先生に代わって指揮台に登ったワシを、いぶかしげに待ち受けておったのは予想以上にガラの悪い少年たちやった。

「オッサン！」

ワシの風貌をじっくり観察して、まず「オッサン」とぬかしよった。

「オッサン、ほんまに音楽の先生か？」

確かにほかの先生からすれば、「オッサン」のイメージに近いかも知れんが、

「そんなタヌキみたいな腹つきだして指揮やれるんかいな、いうとくけど、ボクらはみんなまじめに吹奏楽をやってるねんぞ。おもちゃのラッパ吹いてるのと違うで！」

楽器を吹いていればすばらしい音を出すのに、同じ口から出る言葉は最悪なガキどもやった。

しかし、ガラの悪い言葉はその日が最後、我が得津式スパルタ訓練による猛練習が始まると掌を返したように『オッサン』から、『センセイ』に変わりよった。

ざまあみろ、これからじっくり、しごきまくるぞ。

昭和三十一年春。

かくして、得津武史と今中イガグリ坊主たちとの、二十五年間にわたる宿命的な物語が始まったんや。

（十九）死ぬまで楽器を放すな

ワシはいつも初めて指導する少年たちに、この古い話をする。

日清戦争時の木口ラッパ卒の話を知っているか？

彼は誠に勇敢な男やった。いや勇敢というより己れの使命を死んでも貫いた、大阪言葉でいうなら、ド根性の持ち主やったといいたい。

木口の隊長はいつものように彼に突撃ラッパを吹くことを命じた。木口がラッパを吹くと必ず勝つというのがジンクスになっていたからや。部隊はラッパとともに突撃し敵陣地を占領した。

ところが、木口の姿がない、不審に思った隊長が引き返すとラッパを口に当てたまま木口は死んでいた。喉には銃弾が貫通した跡があったという。木口は銃弾に喉を貫かれながらも、ラッパを口から放さなかった。命の限りラッパを吹いてたんや。

この話は、いつか吹奏楽部の教訓のようなものになっていた。

「ええか、お前らも一人一人が木口ラッパ卒やと思え。どんなことがあってもラッパを放すな！死んでもラッパにかじりついとれ、ええな！」

子どもたちは、とにもかくにも、このありがたい話を聞かされ、

「木口小平という人は偉い人やな！」

と、とにかく感心する。そして、自分たちもそうならねばと決心する。いや、決心させられるんや。

しかし、木口ラッパ卒は、はじめから「死んでもラッパは放すまい」と思っていたわけではない。彼のラッパに対する情熱や、自分の使命に対する忠実さが、自然にあのような最期になったに違いない。

だからワシは、口では

「死んでもラッパを放すな！」

と叫んではいるが、心の中では「息子どもよ、真剣にラッパと取り組め、そうすれば、いつのまにかラッパを放したくなくなる日が来るぞ、先生が放せ！というてもな」と思うとった。

好きな音楽を楽器で吹けるということは、その音楽をただ一生聴くだけで過ごす人より、何十倍も幸せなことや。そのうちラッパが吹けるということが、大きな誇りになり、死ぬ

まで楽器を手放せなくなる時がくるんや。

（二十）得津式スパルタ訓練

ワシの指導モットーは〝練習〟の一語に尽きる。

ワシの練習方法を簡単にいえば『スパルタ訓練』。ただし、頭に得津式がくっつく。ワシが心血を注いで編み出した、独特の訓練法や。

毎年新学期には、百名余りの新入部員が顔をそろえ、彼らは担任から、

「吹奏楽部へ入るなら、ヘルメットかぶって行けよ」

と、冗談とも本気ともつかないような注意をされる。

しかしワシは、それを否定しようとは思わん。事実、練習中、幾度となく、罵声とともにイガグリ頭に指揮棒やゲンコツが飛ぶからや。

おかげで栄誉ある今津中学校吹奏楽部員としての夢を抱いて入部してきた生徒も、二学

期になるとどんどん脱落して二十名くらいに減ってしまう。

それは始めから予期していたことで、ワシの仕事はこの時から始まるのや。なぜなら、その残った二十数名の面々たるや実に頼もしく、

「ゲンコツよ、来るなら来い！」

とラッパ片手に真正面からワシに挑戦してくるからや。

ワシは毎年そいつらの顔をじっくり眺めて、

「コリャ今年もやり甲斐があるワイ」

と心の中でニタリとする。

無論、ワシにしても好き好んで、その行為におよんでいるのではない。だが、暴力追放が叫ばれている現代社会であれば、ワシなどはいの一番に追放されるやろう。

ところが、ある父兄からはこんなバックアップの声をもらったこともある。

「昔、私は尺八をやっていましたが、寒稽古の時など尺八の先につららが下がったものです。しかし、うちの息子のクラリネットにまだつららが下がったのを見たことがおまへん。先生、まだまだ練習が足らんのと違いますか」

頼もしい親父さんたちの言葉にワシはますますファイトを燃やしたもんや。

（二十一）指揮棒を天ぷら棒に替えて

さっきもいうたように、日に幾度となく彼らの頭に指揮棒が飛ぶが、普通の細い指揮棒では、石頭らには一向に応えんらしい。それに演奏に熱がこもると思わず指揮棒を指揮台に叩きつけるのも毎度のこととなっている。

おかげで一日一本や二本は必ず指揮棒を折る。指揮棒の一番安物を買うと一本六十円、それでも毎日のことやから一ヵ月で千八百円。これでは我が月給袋と相談もできん。

何か代わりはないかと考えても、帯に短かし、たすきに長しで、そう思うように代用品があるものではない。

だからといって指揮棒を折らんように気を遣いながら練習する気にはなれんのや。なにしろ練習を始めたら嵐が吹こうが雷が落ちようが、一切かまわず熱中するからすぐに指揮棒を折ってしまうんや。

いったい、こんな指揮棒をどこのどいつが作るんや。

「おまえたちの石頭のせいじゃ！」

としまいに子どもたちの責任にしたところで、折れた指揮棒が繋がるはずもない。

子どもたちは、

「今日もボチボチ折れるでー」

と時間まで計りよる。

そんな奴の頭にピシッ！といっても、ただニヤニヤと笑うとるだけや。（クソッタレメ！）

ところがある日、阪神市場の天ぷら屋の前を通った時、突然ワシの頭にグッドアイデアがひらめいた。天からファンファーレが鳴ったような気がした。

「あった！あった！ちょうどエエもんがあったがな」

ワシは一人でニヤニヤして雑貨屋に急行し、そのものをどっさりと買い求めた。

早速それを試してみると、握り具合も手ごろだし、指揮台を叩こうが、床を叩こうがビクともせん。これなら石頭のワンパクどもにも少しはこたえるやろう。

「イッセキ、ニチョウ（一石二鳥）」とはこのことや。

「ザマーミロ」とワシは思った。

さて、そのモノとは、何を隠そう、阪神市場の天ぷら屋のおっさんが天ぷらを揚げてい

た箸、いわゆる『サイバシ』と呼ばれる二本の棒や。
それ以来、天ぷら棒はワシの代名詞にもなるくらい有名になった。
後に子どもらが卒業する時は、ワシへのプレゼントとして天ぷら棒を一人が一対ずつ、メッセージを添えて贈られるのが伝統になってしもた。

（二十二）「先生、死なん程度にどやしたってください」

ワシは全体集会でふざけたり、ほかの生徒の迷惑になったりするような、規律が守れん奴には特に厳しかった。人間社会では助け合うことはあっても、人に迷惑や危害を加える奴は徹底的に叱りとばした。そんな時には水虫専用と書かれたスリッパで、張りとばすこともあった。
あくる日、その子が帽子をかぶらないで登校してきたので、また怒ったら
「昨日アタマにたん瘤ができたから帽子かぶれません」

それを聞いてオレは

「そうか、すまん、すまん、今度はもうちょっと加減するからな」

とすぐに謝った。

「天ぷら棒」にしろ、もう一つの「精神注入棒」という剣道部が使う竹刀のような兵器にしろ、イッパツお見舞いする時は、タイミングがもっとも大切やと思う。ちょっと遅れると、子どもの心に無用の傷をつけてしまうことがある。

ワシは子どもが音をミスって、「しもたっ！」と思った時、間髪を入れず「パシッ！」といく。

「叱る」こと「体罰」を与えることは教師のテクニックの中で、一番難しい仕事や。「誉める」のは誰でもできるが、「叱る」のは難しい。

「褒めてやらねば、人は動かじ」という言葉があるが、下手に褒めるとそいつの成長を止めてしまうこともあるからな。

そこでオレは、上手に叱ったり、殴ったりする方法を百通りも考えた。しかし、得津武史式のスパルタは軍隊時代の受け売りで、今の時代に即しておらんと、ケンケンゴウゴウ（喧々囂々）たる批判と粛正を方々から求められた。

その都度、反省もしたが、オレが単なる暴力教師やったら肝心の子どもたちはついて来なんだと思うのや。

最近は悪いことをした生徒は教員室やカウンセリングルームに呼ばれて、一時間ほど延々と説教される。しかし、その頃の今中の生徒ならきっと、こういうたやろ。

「センセイ、はよう、一発殴ってくれ、そのほうがスッキリする」

とな。

女子部員も昼休みに学校を抜け出して、お好み焼を食べに行ったりしたことがあったが、彼女たちに

「ここに並んで歯を見せてみい」

証拠は歴然や。みんな歯に青ノリをつけとった。オレは一人ずつ頭をコツンとやって

「もう行ったらあかんぞ！」

で終わった。

あいつらは、それっきり行かなくなったらしい。

体罰はしつけの一部や、ルール化すればええのや。そのためには先生はすこぶるコワイ存在で、あらゆることをジャッジできるルールブックの存在にならなあかん。

だから、ワシの教室には陰湿ないじめはなかった。

保護者たちからも、

「子どもは先生に預けたんやから、死なん程度にどやしたって！（叱って）」

といわれた。

またある父兄から

「昔私は尺八をやっていたが、寒稽古の時など先につららが下がったもんです。ところが、うちの息子のクラリネットにはまだつららが下がったのを見たことがない、先生まだまだ練習足りまへんで」というバックアップの言葉もあった。

人情味あふれる当時の今津の町は、教師と保護者の関係に何気ない親近感があった。

例えば教員が今津の街を酔っぱらって歩いていたら、保護者から

「先生、こんな遅うまでほっつき歩いていたら風邪ひくで、早う家に帰りや」

と逆にたしなめられることもあった。

保護者、先生、生徒みんなが血の通った連帯感を持った街やったんや。

（二十三）アサター、ヒルター、ナイター

さて、我が吹奏楽部員の練習方法は、一日を三つの段階に分ける、すなわちアサター、ヒルター、ナイターというわけや。

『ナイター』は野球などによってすでに知られている通りで、ヒルター、アサターはこれをもじって、いつのまにか生まれた今津中学校吹奏楽部用語や。別に大したネーミングでもないが、最近よその学校でも使っているらしい。

まず、『アサター』。

これは朝、すなわち始業前の練習のことで、日の短い頃ならやっと夜の明けた頃から部員たちは登校して来る。そして教室にかばんを置くなり各自の楽器を持ち出して練習や。広いグランドのあちらこちらで、息の続く限り長く音を引っ張るロング・トーンをやる。すなわち「一番基礎になる音づくり」をする。

これは別名「宿直の起床ラッパ」ともいうが、いかに朝寝坊の宿直者も起きざるを得な

くなるんや。このアサターは決してワシが強制したものやない。いつからともなく、一人、二人と始めたものが全部員におよんで毎日続くようになったんやからたいしたもんや。

「朝、音を出さんと、何や知らんけど一日中落ち着けへんわ」

とチョコザイ(生意気)なことをいいながら、時には、まだ半分眠っているような顔をして、それでも音だけは一人前に出しよる。

『ヒルター』無論、昼休みの練習や。給食の時間が終わるや否や、校庭の至るところで音が出始める。この時は曲の個人練習、苦手のフレーズ、あるいはまた、曲の中心となるセクションなどの放課後の練習への準備や。

そして放課後、普段は午後三時半から六時半までワシの指揮で本格的な練習となるが、まともに終わることはまずない。

そのほとんどの日が『ナイター』となる。

朝、昼、晩、文字通り三度の食事の如く行う練習に『やり過ぎだ』という批判の声も少なくはなかった。時には直に忠告してくれる人もあった。

しかし、ワシはもちろん、生徒も決して行き過ぎとは考えていない。批判の声が高まった時、彼らはこういいよった。

「先生、僕ら授業をサボって吹いてんのと違う。朝かて、昼かて、放課後かて、僕らの自由にしてええ時間に吹いているねん。野球部の連中も朝、キャッチボールしているし、サッカー部も毎朝蹴っている。僕らに吹くのやめろいうんやったら、野球も、サッカーも体操部の鉄棒も、全部放課後まで禁止してもらわな話が合わんがな」

ワシは「ようし、よういうた！」と心の中で拍手する。

また、そんなに練習ばかりで勉強はいつするのかという人もいる。だが、練習に追われ成績が著しく下がった部員は不思議なことに一人もおらんかった。

成績が落ちて、楽器を取り上げられるのが嫌なのか、きちんと能率よく勉強もやるからか、むしろ吹奏楽部のメンバーは成績上位の生徒が多かったのは信じられんと思うやろが本当の話や。

『アサター、ヒルター、ナイター』という、いつのまにか生まれたこの言葉に、子どもたちは真から親しみ、大切にし、一曲三千回という練習量も今津中学校吹奏楽部がある限り、不滅の伝統であってほしい。

我が吹奏楽部の一年は三百六十二日。雨が降ろうがヤリが降ろうが、暑かろうが寒かろうが関係ない。時によれば元旦からラッパが聴こえることもある。

一年を通じて、練習は夏を乗り切ることが一番の山や。なにしろ暑い、しかし一年のうちで一番実力をつけて、成長するのも夏休みの練習やと思う。

ワシは子どもたちに怒鳴る。

「ええか、けったいな音出したら、プールへ入れたれへんぞ！」

これはよう効く。

子どもたちの暑い夏の唯一の楽しみはプールやった。これを取り上げられたら生きている甲斐がないというほど楽しみにしている。無理もない、アサター、ヒルター、ナイターの練習の中で彼らに与えられた、ただ一つのレジャーなんやから。

ワシはプールを楽しむためにも、真っ黒になり汗まみれになって楽器を握る子どもたちのいじらしい顔を見て、胸をつまらせる思いをする。

練習一時間半、プール十五分。それを三回ほど繰り返していると、身体が綿のように痺れてくる。そこで、ワシは手ぬぐいとハチマキ、子どもたちは全員水泳パンツといういでたちで、芝生にまくらを並べて昼寝する。

すると蝉時雨の合唱がなんとなく今まで練習していた曲に聞こえたもんや。

（二十四）お弟子制度

毎年四月には、ほかのクラブと同じように吹奏楽部にも百人ほどの新入生が入って来る。しかし、前にもいうたように残るのは、そのうち二十人ぐらいや。この残った骨のある奴を一人前に育てるのは三年生の役目やった。パートごとに一人の三年生が一人か二人の一年生を受け持つ。

名付けてこれを『お弟子制度』と呼ぶ。自分の受け持った下級生の面倒は、徹底的に見なければならんというわけや。

入ってきた新入生にとって運命の分かれ道となるのは、楽器の割り当てや。

一般的には歯並びの悪い奴にはパーカッション系。そのほかは唇の格好、体格で選定する。野球チームのようにポジションによって弱点があるとか、その時の編成上の都合でも割り当ては少し変わるが、主に三年生が自分の体格に似た自分の楽器に適合した分身を見つけて、わずかな在籍中に責任持って育て上げることになっている。

この師弟の練習は主として、アサターとヒルターや。黙って見ていると先輩先生の練習は、なかなか厳しい。時にはワシの特許のゲンコツが飛び出したりする。一年生も熱心に「おねがいします」とよくついていっている。

お弟子制度の特徴の一つとして、弟子の失敗は先輩の責任ということがある。だから一年生が失敗して居残りの楽器掃除を仰せつかると、先輩先生はつき合う義務を持っているのや。

時にはナイター終了後も、空き腹を抱えて、何十回となく練習を繰り返している涙ぐましい師弟の姿もある。

やがて、一年生が三年生になった時、彼らも弟子を持たねばならない。その時にこそ、自分たちの先輩の苦労とありがたみを身にしみて感じ直すことやろう。

我が吹奏楽部には、いろいろな特有の用語が生まれているが、その中の一つで、天ぷら棒と並んで常に活躍しているモノがある。

名付けて『精神注入棒』。これにも三種類ほどあって必要に応じて使い分けることになっている。

まず一本目は剣道で使う竹刀や。これには、赤いマジックで「精神注入棒」と記されている。

これでガツンとやると、精神の底の底までしみ通るのやが、残念なことに持ち運びに不便や。だから、もっぱら音楽室にお祀りして、ニラミを利かしている。天ぷら棒で足らん時は活躍することになっているのや。

次に竹竿。といっても物干し竿やない。三〜四メートルほどの細い竿で、主として外での練習、すなわち、パレードやドリルの練習の時にその威力を発揮する。細い割りには長くて力が強いから、ワシがそばまで足を運ばなくても比較的遠くの方へでも出張できるんや。

最後に紹介するのは〝よそ行き〟の精神注入棒や。これはデパートのおもちゃ売り場などで売っているビニール製のバットで、主に演奏旅行などで活用する。ただし、音ばかり大きいだけで、あまりこたえないということと、すぐに凹んだり割れたりするという欠点がある。

このように、それぞれ性能の違った精神注入棒なんやが、一つだけ共通点がある。それは気が短いということや。なぜならワシが声に出していうより速く彼らは、自分たちの役目を果たしている。それに彼らはサボらん。どんな時にでも最善を尽くして自分たちの使命を全うする。

生徒たちもよくこの注入棒を理解しとる。

「○○！」とワシが怒鳴ると、
「ハイ！」といって自分から頭を差し出してくる。
いつか見学に来た人から
「痛いやろ？」
と聞かれた時、彼らは
「痛いけど、やられる理由があるんや、それにゴツンといかれる度にシャッキリするから、やっぱり注入棒はあった方がええ」
とこたえたという。
それに子どもたちは、一日一回、注入棒のゴツンをもらわなんと気合いが入らんし、物足りないという。その彼らの心意気がワシにはたまらんほどうれしい。
子どもたちはブツブツいいながらもカラッとしたゲーム感覚で受け止めているのかも知れんが、痛さを耐えると「優勝する」「日本一になる」という、かけがえのない喜びが得られる単純な目的意識もあったのや。
吹奏楽の甲子園ともいうべき十一月の全日本吹奏楽コンクールでは、毎年約三分の一のメンバーが入れ替わる。高校野球に似ているが、我々の場合、新入生のほとんどが楽器を

初めて手にするわけで、約七ヶ月で一人前に勝負できる演奏者に仕上げなければならん。

しかもなみいる強豪をしりぞけ、難しい審査員の耳にかなった音を出すには並大抵の努力では達成できない。後年、今中が連続優勝できたのは奇跡的だという人も少なくないが、そんな膨大な練習の積み重ねと「お弟子制度」のような新しいメンバーの養成システムが奇跡を呼び寄せていたのやと思う。

（二十五）「こん畜生、ハゲ茶瓶！」

こんな話がある。

我が吹奏楽部の練習はいたって厳しいが、特にナイターの時のワシの練習は、よほど忍耐力を要している者か、全然感じない鈍感でなければ務まらんかも知れん。

だから子どもたちの大部分は毎日練習の度に頭にきて、胸の中では、さぞかし「コンチクショー！」と思っているに違いない。

そんな中でもAは、ワンパクさもやが、練習中にシゴかれるのも人一倍や。日に何度となく天ぷら棒を頭に見舞われ、あげくの果てが楽器掃除。Aの胸中は、煮えくりかえりそうや。そこで彼は憤懣(ふんまん)いっぱいで家に帰り、そして叫ぶ。

「チクショウ！あのハゲ茶瓶！シバキたおしたる。もう二度と吹奏楽部なんか行ったるかァ！」

〝あのハゲ茶瓶〟とはもちろんワシのことや。

Aの母親は、そんな息子を見ていうたらしい。

「そんなに辛いのやったら、辞めさせてもらい」

Aも

「おう、明日から辞めたる」

と意気まいて床につくが、次の日の朝、Aはやはりいつものように朝メシもそこそこに家を飛び出す。

もちろんアサターのためや。Aの頭の中には昨夜の悔しさなどミジンも残っていない。あるのは、

「今日またほかの部員に負けないで練習せんと」

ということばかりや。

しかし、そんな朝の気持ちとウラハラに夜には、また

「ハゲ茶瓶め、シバキたおしたる！」

と叫んで家に帰ってくる。まったくAはおもろい奴や。

Aの母親がワシにこんなことをこうたこともある。

「先生、結局うちの子は先生が好きなんですよ、どんなに前の晩ブリブリ怒っていても、朝になるとケロッとして学校へ行きますものネー」

Aよ、先生のこと「シバキたおしたる」と思うのなら吹奏楽で勝負しようやないか。おまえたちが楽器吹いて、先生が指揮棒振って、どっちが先にまいってしまうか。ワシはトシやから、きっと先に倒れるやろ。せやけどなあ、それだけ気持ちを入れてラッパ吹いたら、聞く人は

きっと感動してくれるぞ。

そのAは三つの時、昔のブリキのような扇風機に指を突っ込んで、左の親指と小指を残して中の三本の指をぶっ飛ばしてしまいよった。お母ちゃんは自分の不注意でケガをさせてしまったと、Aが不憫でしかたがなかったんや。

ところが、そんなハンディがあり、ネクラでひっこみ思案だったAにオレは何のためらいもなくトランペットを持たせてみた。

「どうや、これなら右の三本指で吹けるやろ」

Aはラッパを吹き始めた。それから、また天下無敵の朗らかさと腕白を取り戻しよった。

Aよ、野球とか水泳みたいなものは誰にでもできる。しかし、ラッパはそうはいかんぞ。今、お前に一番大事なことは、ラッパを吹いたら誰からも「うまいナ」といわれるようになることや。そしたら先生はみんなにいうたるぞ。

「おのれら、ラッパを上手に吹こうと思ったら、Aみたいに指を三本ブチ切れ」とな。

今ではAは、あるオーケストラの主席奏者になったそうや、死んでもそのラッパを放すなよ。

（二十六）昭和三十五年、コンクール初優勝！

一年を通じて悩みの種の一つは、近隣へ音の迷惑をかけることやった。三百六十二日、アサター、ヒルター、ナイター。これでは近所から苦情が出るのは当たり前。いくら日本一理解のある土地柄だからといっても騒音問題に抵触する。

そこで、夏でもできるだけ音が外へもれないようにと体育館の窓を全部閉めなければならん。まるで蒸し風呂やけれど辛抱してがんばる。

中元や歳暮の時期になると、大きな身体をできる限り小さくして近所へお詫びとご挨拶にまわる。そんな時、

「コンクールがんばってや、音はがまんするから」

そういう声を聞くと、いつも頭の下がる思いやった。

着任早々に関西大会で二位を獲得し、その勢いで全国大会出場への夢が現実のものとなり始めた時、今津の街ぐるみの支援と願望がひとつになって、練習にもいっそう力がこもっ

た。そして今津中学吹奏楽部の実力をいよいよ問われる時がやってきた。

就任二年目の昭和三十二年十二月。東京両国国技館で行われた、全日本吹奏楽コンクールに『ミリタリー・エスコート』と『詩人と農夫』を演奏して、第三位を獲得した。

続く三十三年の名古屋大会も三位、三十四年の八幡市民会館での大会は二位を獲得し、子どもたちは天ぷら棒の嵐を受けながら、さらに猛練習して着実に全国制覇への実力をつけていった。

そしてついに昭和三十五年、大阪中之島フェスティバルホールで開かれた第八回全日本吹奏楽コンクールで念願の初優勝を勝ち取ることができた。

演奏曲は「行進曲リトル・ジャイアンツ」と「歌劇 シチリア島の夕べの祈り 序曲」。

おそらくこの年のことは生涯忘れることがないくらい感動的やった。

（二十七）オカヤンのために生まれ変わる

初優勝の勢いにのって、ワシの人生後半をしっかり支えてくれることになった、比紗子と再婚することにした。

関東ではオカミさん、関西ではオカーチャン、ワシは家内の比紗子のことをオカヤンと呼んでいる。オカヤンは生まれも育ちも西宮。父親は霊感のある鋭い才能を持ち、人の運命や性格を透視できる姓名学というものをやっている人で、ワシはその父親の大反対を押し切って略奪結婚をしてしまった。

当初ワシと親父さんは、まったく言葉を交わさずじまいやったし、比紗子の母親もワシのような離婚歴があり、子どもまでいて、しかも「ゴロツキ」まがいの男に笑い顔で嫁がせようとするわけがない。

知り合って、結婚を決意してから式を挙げるまで五年もかかった。

ワシは生徒たちはもちろん、比紗子のため、そして自分自身の人生のためにがむしゃら

にがんばった。その甲斐あって今津中吹奏楽部は全日本吹奏楽コンクールの全国大会にまで出場できる実力をつけ、とうとう全国制覇まで成し遂げるに至った。

そんなとき、ワシのがんばる姿を見て、当時の今中の中井校長が比紗子の父親のところへ行ってくれた。

「二人をこのままダラダラつき合わせるのは良くない。得津も身を固めて生活を安定させ、ブラスバンドに集中させたいから、結婚させてやってくれませんか」

と頭を下げてくれた。

頑な父親も吹奏楽界でようやく名前の出始めたワシを認めはじめてくれて

「まあ、あんな男でも比紗子がええというのなら、仕方がない。イヤになったらすぐ帰って来ればいい」

と折れてくれた。

仲人は辻井市太郎ご夫妻。

春の彼岸も過ぎた暖かい日、なんばの高島屋ホールでオレはめでたく年貢を納めたんや。

あまりにもイメージが異なるおれたちに

「お二人のそもそものなれそめは？」

とよく人に聞かれる。

そんな時ワシはいつもこうこたえることにしている。

「オカヤンに誘惑されてねェー」と。

まあ、略奪したのはワシやけれど、最初に惚れよったんは、あっちの方や。ワシの弾く華麗なるピアノ演奏とそれを弾いているワシのイメージのあまりの落差に惚れよったらしい。

何度もいうが、これでもワシはピアニストやったんや。

結婚式の夜、ワシは初めて比紗子のためだけにピアノを弾いた。幸せそうに聴いてくれたが、そんなことは、後にも先にもその夜かぎりやったな。

比紗子との結婚生活は自然のなりゆきで「カカア天下」状態になっていった。

「私に、もし一度でも手を上げたりしたら、すぐ離婚よ！」

と常にいわれていたし、ワシも嫁はんに逃げられるのはもう、こりごりやったからな。

以来、ワシは敬意を込めて比紗子のことをオカヤンと呼んでいる。

オカヤンはワシが間違ったことをいうと、ものすごい勢いで反発する。その結果、腹が立っても、たまにモノを投げつける程度のウサばらしくらいはしたが、ワシは一切暴力的なことはやらんかった。

昔のワシとは大違いや、つくづく昔の自分を思い出して恥じ入っている。

オカヤンは音楽のことに関して

「私は専門的なことはよくわからないから、批判も肯定もしません」

といいながら、特別気に入った演奏を聴いた時は

「今日はよかったよ」

と褒めてくれた。

ワシは正直いって、オカヤンにも苦労のかけっぱなしやったな。

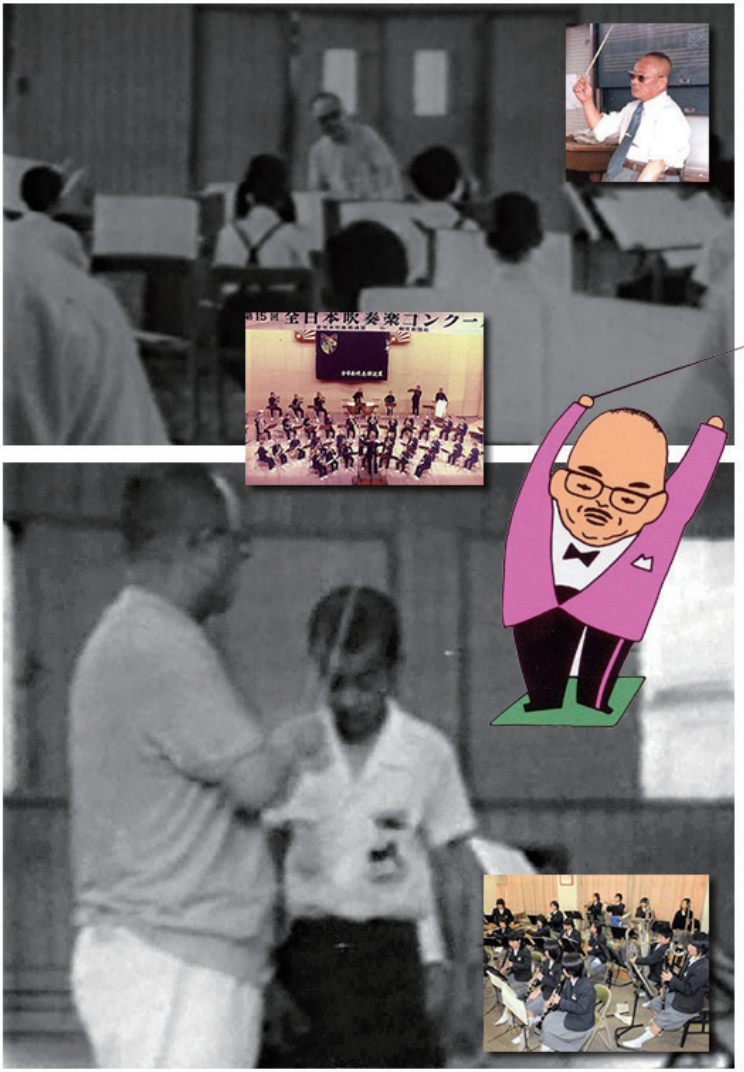
四国の雄といわれた我が盟友、佐倉さん（元・香川大学管弦楽団の顧問は佐倉友章氏）がワシを「ヒモ」とか「下宿人」というのも、もっともような気がする。オカヤン曰く、

「結婚してから、なんにも買うてもろてへん」

人が聞いたら「なんてヒドイ！」と思うからちょっと弁解させてもらう。ワシは、月給袋はそのままオカヤンに渡している。それで適当に自分のものを買ってくれたら良いのや。ワシは女房の尻にくっついて、百貨店巡りするのが大の苦手や。世間の亭主は何であんなしんどいことやりよるんかなあ。

オカヤンは、宝塚歌劇が大好きや。麻実れいとかいう男役がええらしい。ワシが、あまりかまってやれないので、ワシのイメージを追い求めたのかと思って写真を見たら、あまりにも違い過ぎるので、「世界の違いすぎるもの」にケチをつけるのはやめた。オカヤンの唯一の楽しみやから、せっせと阪急電車で宝塚通いをしてもらっている。

オカヤンとは時々、派手なケンカをすることもあるが、まあ、今はワシの第一の理解者やと、できる限り無駄な抵抗はせんことにしている。


第15回全日本吹奏楽コンクー

〈第三章〉

（二十八）〝うどん〟とムチの特訓兵器

クラブ活動は朝七時三十分から授業が始まるまでと、授業が終わってから午後六時までやっている。休むのは正月三が日のみ。

しかし、ワシは子どもが七時三十分から練習するといえば七時には必ず行く。近ごろのガキはまず先生が模範を示さんということを聞かん。

そして、白黒をはっきり見極めてものをいう。中途半端な表現や態度では子どもらは、ついてきてくれん。ダメなものはダメ。ええもんはそれなりにキチンと評価してやる。

「シンプルイズベスト」や。

しかしなあ、ワシの教え方は外部から見たらきつく見えるらしいが、中三ぐらいになると「ああ、またブタがわめいとるぞ」くらいにしか感じとらんと思う。

ところで、特訓兵器として『精神注入棒』や『天ぷら棒』などを紹介したが、ムチばかりではあかん。適当に『アメ』も必要や。

夏など『アサター』『ヒルター』『ナイター』としごきあげると、さすがワンパク共もばて気味になるし、腹も減る。

そんな時はパンを買いに走ったり、うどんの出前を取ったりする。うどん屋もワシの安月給を知っとるから「素うどん」に「アゲ」や「天かす」をサービスしてくれたりする。

夜の体育館ですする「きつねうどん」は練習の効果をあげるのに必須やった。

それにもう一つ。これは体罰に近いが、子どもたちが夏バテせんようにと、ニンニクを生のまま丸かじりさせたこともあった。生徒が弱っていなくても練習中にミスをすると『ニンニクの刑』が待っている。ティンパニーの村上・ポン太は一日の練習で、二十四個も食べさせられた。

後でポン太のお母さんが

「先生、ニンニクは天ぷら棒よりスタミナがついて、よろしいなあ」

といわれた時は冷汗が出た。

ラッパの先からニンニクの臭いが音と一緒に発射され、やがて体育館がニンニクの臭い

でパンクしそうになる。
体育の女教師が
「体育館がモウレツな臭いで窒息しそう」
と悲鳴をあげたこともあった。
しごきの新兵器といえば『タチバサミ』もある。
これはどういう風に使用するかというと、決して、突いたり切ったりして血の出るようなことをするのではない。これで生徒のアタマの格好を思い思いに散髪してやるという、実質的で気の利いたアイデアなんや。
そのデザインをいろいろ紹介すると

①インディアン型
これは、頭部中央の前から後ろへ一直線に髪を残し、両脇を全部剃り落とす、いわゆるモヒカン刈りのことや。

②十円玉
これはすぐおわかりやろう。頭のどの位置でも良いが直径二センチか三センチの円形に

毛を刈る、ただし私は床屋ではないから円形にはならず、たいがいデコボコ形になる。

③三角形

読んで字の如く頭に三角を作るんや。しかし形にするのが邪魔くさいのであまり時間のない時は活用されない。

④トラちゃん型

いわゆるトラ刈りでとにかく形などない。気の向くままにジョキジョキ刈ればそれで良いのや。

その他いろいろあるが、その時と気分によって形も変わってくる。

最初の頃、子どもたちもいろいろ対抗手段を考えよった。ある日、そのタチバサミを持ち出して校庭の木の枝を切って、髪の毛が切れないようにしてやろうと思ったらしい。

ところが彼らの幼稚な目的はムザンにも破れ去った。なぜなら、切れなくなったハサミでもワシはそのまま切る。チョンチョンと刈って行くが、切れないハサミは毛を引っ張って大変痛いのや。それに気づいた彼らは、今度は砥石を持ち出して一生懸命研ぎ始めよった。ほんまにあいつらは、涙が出るほどおもろいやつらや（笑）。

しかしこの新兵器の効力は大きい。今までの注入棒や天ぷら棒の「コツン」はその場限りの痛さだけやが、タチバサミの刑は形が残るし、新しい毛が生えてくるまでには日数もかかる。だから、その間は嫌でも、なぜこうなったかを身にしみて反省しなければならんというわけや。

しかし、子どもたちも心得たもので、新兵器のお見舞を受けた者は、すぐに散髪屋へ行って、できるだけその形が目立たないように頭全体を薄く刈ってもらったりする。そして毛が伸びるまで極力帽子を頭から放さない。彼らにとって一番困ることは、ガールフレンドにそれを見られることらしいな。

ワシはそんなマルやサンカク、トラやインディアンが頭を並べて、ラッパを吹くのを見るのがオカシイやらかわいいやら、実に楽しい光景やった。

練習を見学した人たちも、その光景に、吹き出したり、感心したり、とにかくその一風かわった光景に時の経つのを忘れてしまうという。

ワシは別に見学者を喜ばせようとか、退屈さ狭いと気を遣っているわけではない。それどころか練習している時は誰が来てようが、演奏のことしか眼中にないからや。

練習時のユニークさは、まずワシのドナリ声。

誰かがワシの美声を「カラスがヤスリを飲み込んだような声や」とぬかした奴がおるが、なにしろ学校の音楽室で発せられる声や言葉からほど遠いものであるらしい。

縁日の叩き売りや、テキ屋のおっさんみたいに手ぬぐいを肩にかけ、黒眼鏡で子どもたちをにらみつける。これは練習時の緊張感を高めるのに効果がある。

生徒達の名前は、まともに呼ぶことは滅多にない。

ソロ、クラリネットのMは頬をふくらまして吹くから『フグ』、セカンドクラのKは背中を曲げて吹くから『カマキリ』、トロンボーンのNは『ガイコツ』、小太鼓のTは『ミゼット』、その他『マメダ』、『チンネン』、『ワルガネ』、『ダイフク』、『ガクシャ』、『マンボ』、『ハカセ』、『ノーマク』、『シュウサイ』と並べて行けば夜が明ける。

「フグとカマキリはもっと音を合わせ！」

「ガイコツとミゼットはどこを向いて演奏しとるんや！」

「チンネン！ええかげんな音出すナ！オキョウ読んでいるのと違うぞ！」

という具合や。

〝ワシ式ニックネーム〟の付け方は、後で追々説明することにするが、子どもたちもワシにいろんなニックネームを進呈してくれる。『ビア樽』『ボテ腹』『カメレオン』『赤ブタ』『ガ

ミヤン』『ブー』、威厳のあるものは、あまり見当たらん。

ざっとこんな調子で練習が続く合間をぬって指揮棒が飛び、精神注入棒が活躍するんやから観覧席が驚嘆するのも無理ならぬことや。

しかし、これがかえってワシと子どもたちの親近感を増していくのやから不思議なや。

子どもたちは、あまりありがたくないニックネームで呼ばれても「ハイ！」と気持ちよく返事する。もっとも「ハイ！」といえない奴は、たちどころに天ぷら棒やけどな（笑）。

そうそう、もう一つ忘れていた。学年ずつの呼び名があるのや。

一年生は『チリ』

二年生は『ゴミ』

三年生は『ジャリ』

（二十九）「ジャリ、ゴミ、チリ」の言い分

ジャリ、ゴミ、チリたちのショート・コメントを紹介すると、こんな風や

「先生は練習中は鬼やけど、練習が終わると普通のオッサンになる」

「すぐに怒らはるけど、僕らは先生が嫌いやない！」

「クラスの友だちよりクラブの友だちが大事や。クラスの友だちと遊びに行けないから仕方ない」

「厳しい練習に耐え、続けられたのはクラブをしていた結果に喜びがあったからや。それを一度感じたらもう辞められへん」

「先生は気が変わりやすい。前日に明日は休みにしてやるとか、すぐに終わるといいながら、その時の機嫌で遅うなったり、早ようなったり。コロコロ変わるからこっちは大変や」

「先生は自分の間違いを時々僕らのせいにするんや。ま、ええか。根はいい奴やからな」

「夏の暑い日も毎日先生が先に来て練習始まるからサボられへん」

「先生はなあ、なんかあるとすぐに、ものすごくスケベーな話や汚い話をしはる、あれはちょっと親にはいえんな」

「先生はこのごろ、足が悪いので僕らをよう追いかけへん。そやから自分のとこへ呼びつけてドツキよる。不思議や、それがわかっているのに僕は行ってしまう」

「先生はなんでもやればできることを教えてくれた。現に僕は楽器なんか持ったこともなかったのに、今はフルートが吹けるようになってる。先生、ありがとう」

「先生は演奏だけやなくて、服装も生活態度もちゃんとチェックしはるんや、自分のかっこはおいといてな」

好き勝手にワシのことをボロクソにこきおろす息子たちやが、少年時代にオレと心を一つにして演奏した音楽と、仲間たちとのすばらしいハーモニーを忘れるな。人生ではミストーンや不協和音は極力出すなよ。

（三十）究極の指導法で一週間に一曲マスター

「女好きでスケベー親父」

オレは自分自身ではただの一度もそんな風に思ったことはないが、なぜか周りのモンはみなそういう。

音楽の細かい表現について指導する時、フェルマータ（楽曲の途中で拍子の運動を停止し、この記号の付された音符や休止符を長く持続する）の意味を教えるのに、ワシは子どもらの楽譜にここで「ぐぐっ」と抱きしめて、ここで「ブチュ」とキスするように、とか譜面に書いてやるんや。これがヒジョーにわかりやすいと、大ウケやった。

ブラスバンドの演奏曲で一番華となるのは何といってもマーチや。

今中は一週間に一曲マスターするから、五月からスタートして八月には二十四曲、運動会前になると百曲以上のマーチを暗記する。マーチには名曲がいっぱいあるし、それを演奏するのは、吹奏楽をやった者に与えられる無上の楽しさや。

学校から往復八キロメートルかけて甲山までみんなで演奏しながら、マーチングの練習もよくやった。近所の幼児や小学生たちがおもしろがってついてきたこともあり、女子学生から黄色い声で声援も受けた。

結構我がバンドは人気があった。人の注目を浴びて演奏するリアクションは、自分の演奏技術の自信や励みとなって効果のある練習法の一つやが、Nは逆に沿道のかわいい女の子にみとれてブラスバンドの列からはみ出してしまいよった。女好きなところはワシの悪影響かも知れん。

指導法といえば、元教え子の梅谷忠洋がワシの代わりに子どもたちに変拍子、例えば、「ウエスト サイド ストーリー」に出てくる曲の、二拍子＋三拍子などを教える時のことや。あいつは「トクツ・トクツ・バカ・バカ・バカ」と楽譜に書きよったんや。これがまたよう合うんや。ワシはこんな秘密兵器があったのかと感心した。しまいに「トクツ・トクツ・バカ・バカ・バカ」とみんなで大合唱や。

ジャズドラムのシンバルレガートの練習もアメリカでは、チン、チッチ、チン、チッチ、チン、チッチ、と叩くのを、ノリの良いリズムにするため、「Take Away Take Away」と口ずさみながら練習するらしい。我が今中でもカシコイ練習法はどんどん取り入れた。

梅谷が赤ペンで書いた「トクツ、バカ」の楽譜は今も今中の倉庫の中に眠っているはずや。

（三十一）頼もしき我が息子たち

梅谷忠洋は在学中からフルートの演奏技術だけでなく、ワシに代わって下級生の基礎訓

練をやってくれるなど、さまざまな貢献をしてくれた。
彼の親父さんは今中の目と鼻の先にある西宮でナンバーワンの畳店の主や。
演奏旅行の時など、自家用車を運転して
「先生が来るないうまで、どこでも行きまっせ。ワシは先生が好きでっさかいナ」
と一緒に来てくれる。
旅先でも
「子どもが腹痛を起こしたからちょっと医者まで運んで」
とか、なんやかや甘えて世話になった。
そのお父ちゃんの前で、
「おのれのフルートのピッチが悪いのは頭のセイか、それとも遺伝か！」
などと怒鳴って、頭に天ぷら棒をとばした後で、
「ああワシはなんちゅう先生かいな」
と反省も束の間、オレも親父さんもすぐケロッと忘れてしまうのやからセワないわ。
付録になるが、チューヨーのお母ちゃんはごっつう美人や。山本富士子を優しくしたような顔や。それがなんと、今中初代指揮者で、あの阪急少年音楽隊の鈴木隊長の教え子であっ

たとは。

さらにこのチューヨーは後にクラシックのフリュート奏者としての活躍のみならず、小林幸子の大ヒット曲「思いで酒」も作曲する著名人になったがな。

野田一郎は『シャッキン』『ハナ』『スカンク』という、三つの別名を持っている。

「お前は、ほんまに幸せな奴やなぁ、三つも名前もろて」

とワシに感心されるくらい愉快な三番クラリネットやが、この別名の由来は、まず、彼は郊区外の甲子園球場の近くからご通学であることから始まる。

練習がナイターにおよぶと、大抵の息子たちはエサのために家に帰るが、彼は「先生、パン代百円貸して！」とくるから、まず『シャッキン』や。

次に彼は『ハナ』をいつも出している。ハナカミなど持っているわけがないから、その代用品は右袖口ということになる。だから彼の右袖はいつも白くバリバリになっている。

『スカンク』の由来は、合奏中フォルテで張り切りすぎて、尻でもう一つのラッパ吹きよるからや。多分「ヘ」長調の曲やったんやろな（笑）。

『ワンタン』こと、尾野裕の家は母一人彼一人なんや。アルト・サキソフォンの彼の顔をよく見ると、ちょっと裕次郎の幼い頃のような感じがして、彼の亡くなったお父ちゃんはどんな顔やろうと想像する。

彼はほかの息子たちと同じような〝エサ〟は食べない。朝六時半からワンタンを一杯食べて奮闘する。お昼にお母ちゃんが毎日持って来てくれる弁当も、ナイターが始まる前に上機嫌で食べるのもワンタン。

ティンパニーの村上ポンタ秀一は一月一日生まれのめでたい男や。卒業後はジャズドラムをマスターして、えらい有名になりよったなあ〜。最近は渡辺貞夫、山下洋輔、井上陽水、吉田拓郎とか、東京へ進出してえらい連中と肩を並べて仕事する日本の代表的な太鼓叩きになりよった。近いうちに海外進出も考えとるらしい。ワシの天ぷら棒のご利益のおかげやで。

クラリネットの『武田信玄』、『平清盛』に『小学校』に『ハナ』に『ゲタ』
サキソフォンの『九州』に『サル』
トランペットの『ブラジル』、『ミツイチ』に『オンチ』

ホルンの『ホソメ』に『アホサカ』
トロンボーンの『カバ』に『メガネザル』
小バスの『ノーマク』に『チン』
バスの『ベトコン』に『サクラジマ』
ドラムの『ボケサカ』に『ソンゴクウ』
彼らの話は数え上げればキリがないほどある。みんな忘れられん懐かしいワシの息子たちや。

（三十二）地域の〝余興〟は大入り満員

今津は港に近い下町で人情味あふれる町や。
そんな中で伸び伸びと育った今津中学の子どもがワシは大好きや。今中は山の手の気取った学校とは全く違う。子どもらは山の手育ちにはない豊かで自由な表現力と下町らしいエ

ネルギーを持っていた。

昭和三十年から四十年代は、歌謡曲を学校で口ずさむことでさえ不謹慎といわれていた時代やったが、町内のイベントなどに招かれた時、ワシは木村義弘さん編曲の「ラストダンスは私に」や、羞恥心が完全にマヒしたような大人びたトランペットのソロで「ウナセラディ東京」を演奏したり、「演歌ちゃんちゃかちゃん」から「キャンディーズ」の曲まで演奏したりした。

イガクリ頭に学生服の少年がこんな曲を演奏するもんやからお客に大ウケやった。

こんなこともあった。

打楽器を多用したラテンリズムは、スクールバンドの育ての親といわれるハロルド・ワルターさんがアメリカから来日した時、直接指導を受けた。その時ワルターさんが当時中学生には手の届かない、トランペットのワウワウミュート、カップミュート、ストレートミュートなど何種類も持ってきて今中にプレゼントしてくれた。

そしたら、案の定、吉本新喜劇のオープニング曲をマネして「ホンワカホンワカ……」と演奏した奴がおった。あいつら一度耳にしたもんは、なんでもすぐに吹いてみよる、アドリブの効く性格じゃ！おそらくジャズ屋になっとるやろ。

西宮球場で行われた「二千人の吹奏楽」もおもしろかったなあ。

今中は単独扱いで、「いかさまの手品師」を演奏させてもらったが、スタッフが即席にマジックを習いに行って、指揮者のワシを箱から出したこともあった。

そんなワシらやから、今津の盆踊り大会にも毎年のように招かれ、会場はいつも超満員やった。

ある時梅谷が虎キチのワシのために阪神タイガースの「六甲おろし」をアレンジしてくれた。曲をドラムマーチでつなぎ軍艦マーチに変えていく、みごとなアレンジやったもんやから、『おはようパーソナリティー中村鋭一』のラジオ番組でも放送されて大好評やった。

（三十三）虎キチ（阪神ファン）の心意気

ワシは甲子園球場で「巨人・阪神戦」というと、目を三角にして怒る。

「バカモン、阪神・巨人戦とヌカセ！」とホエタテル。

子どもたちの中に巨人ファンがおると、

「お前は今津から大阪へ行くのに巨人電車に乗って行くんか、阪神電車やないか！」

というてやる。

ワシのことを、みんなは「虎キチ」と笑う。笑わば笑え。「なんとかキチ」といわれるほど熱を入れてみろ。

今津中学は、甲子園球場のすぐそばにある。だから夏休みの練習の時など、ワシは夕方になると、ソワソワしはじめる。球場からの歓声が、手に取るように聴こえてくるからや。そんな時、子どもたちは、

「先生、今日の先発は村山や、試合は早いでー」

などと、挑発して練習を早く終わらせようとする。

「アホウ！村山が投げて阪神が勝っても、ワシらのコンクールの勝敗に関係ナイ！」

とわけのわからんことをいうものの、耳は球場のワーワーという歓声にそば立ち、心は落ち着かず、やたらと指揮台をぶっ叩いたりする。

子どもたちはそれを知っているからニヤニヤしている。心の中では「先生きっとテレビが見たいのに、痩せがまんしとる」と思っているに違いない。

「今日はこれで終わる！」

と厳かに言い渡して、口とは反対に足はソソクサと宿直室のテレビの前へ。その時、阪神が勝っていたら『この世の春』とばかりニヤニヤして、アグラをかく。

もし負けていたら、またすぐに練習のやり直しをやりかねない。ともかく試合展開がどうなろうが全然関係なく、単純に阪神が勝てばそれでええのや。

ところで、最近球場でやたらと太鼓やラッパで応援するのがはやっているが、あのラッパはどうもいかんな。今中のチリでも、もうちょっとマシな音出しよる。

いっぺん、応援団の応援にいったろか。チューヨーのアレンジした『六甲おろし』と『軍艦マーチ』吹至ったら阪神の勝ち星が増えるのと違うやろか。

しかしまあ、貴重な練習時間をさいてそんなアルバイトはやっておれん。ワシには何よりも息子たちとコンクールに勝つことが大事なんや。

それはそうと、多木さんよ。あんたも相当な虎キチやそうやな。あそこのファンになったら、悪い女に捕まったみたいで気がもめるやろう（笑）。

（三十四）ああ、美智子妃殿下（現・皇后陛下）

野球の話で思い出したが、夏の甲子園の高校野球大会に皇太子殿下（現・天皇陛下）御夫妻が出席された。

その時、西宮市は市民会館で歓迎会を開いて今中の演奏をお聴かせすることになった。ワシらは、五年連続コンクールで全国制覇を成し遂げ、その功労で西宮市民文化賞を受賞していたからや。

昼食会の時、市長が美智子妃殿下に

「このバンドの指揮者は、天ぷらの箸で指揮をとるという、ちょっと変わった男です」

と解説されたもんやから、妃殿下が異様に興味を持たれて、食後に

「その変わった方にぜひ会わせてください」

と仰せられた。

驚いた助役は、早速ワシを楽屋へ捜しに走って来よったが、ワシはちょうどその時、演

奏が無事終わってパンツいっちょ（一枚）の真っ裸や。助役が息せき切って、

「えらいこっちゃ！美智子妃殿下がこの市民会館の表に来られて、あんたに会いたいそうや！」

さすがのワシも発狂せんばかりに大慌てや、ワイシャツ、ズボン、ネクタイ、夢中になって着たが、汗だくで、何をどう着たかわからん。

会館前では、市長らが整列してワシの出て来るのを待っている。

しかし、ワシが手間取っているもんやから、炎天下でみんなが汗びっしょり。市長や助役は冷汗も一緒にタラタラ流している。

忙しい両殿下のスケジュールを十分以上も遅らせたワシはともかくかけつけたが、なにしろ慌てて礼服を着たもんやから、ベルトをするのを忘れ、おまけに靴下も履かずに飛んで出た。

ずり落ちるズボンを引っ張り上げながら、おじぎしたら靴から素足がニュッとはみ出す。モジモジして大慌てするワシに、美智子妃殿下は「大変すばらしい演奏をありがとう」とニコニコ。みんなもつられて大笑いになった。

（三十五）おおきに、教育長

『すまじきは宮仕え』という言葉がある。学校務めという職場にいる者はぼやきまじりに、この伝統ある言葉をよく遣うが、ワシにはちょっとニュアンスが違うのや。つまり、堅苦しい学校務めであっても上司に良き理解者がいることもあるということや。

当時の西宮の教育長、刀根館正成さんは陸軍士官学校第六十一期生。世が世なればワシみたいな野砲兵伍長は停止敬礼ということになる。

三年前、全国一になった今津中学を讃えて、我が教育長から、

「西宮の名を全国にとどろかしたお前を西宮の無形文化財にしてやる」

と大変ありがたいお言葉をちょうだいした。

アワテ者のワシは飛び上がって喜び、早速オカヤンに報告した。

「とうとう俺も無形文化財や、教育長からのお言葉や！」

そうしたら、オカヤンは冷ややかにいいよった、

「ホンマにあんたはオッチョコチョイやねえ、無形文化財？そんな柄じゃあないでしょう、それは教育長さんのいつもの冗談よ、きっと、『無毛文化財』かなんかのシャレに決まっているじゃないの、すぐ本気にするんだから」

近い将来ゼロになる予定の、ワシの頭の毛の問題というわけや。

さて、我が教育長は当時、勉強は学校でするもの、家では思い切り遊べと子どもたちに教科書やノートが入ったランドセルを置いて帰らせ、俗にいう「ランドセル問題」で全国津々浦々までセンセーションを巻き起こした張本人。

ワシ流の独断で「ランドセル問題」を説明すると、勉強は学校でするものであって、勉強するために学校はある。教室でしっかり勉強した後には学校に勉強道具を放り出して、放課後は高らかにラッパを吹けというのや。

だいたい、近ごろの子どもはスケールが小さい。ちょっとクラブが遅くなると、塾へ行くとか家庭教師が来るとか、おまけにスポンサーであるオトヤンやオカヤン（父上と母上の今津語）までが、ラッパ吹いているより、自分たちの製造したガキどもの頭の悪いのを棚に上げて、「勉強！勉強！」とけしかけよる。

持ってのほかや。義務教育中にこそ、もっと伸び伸びラッパを吹かせろというのや。

そもそも、塾というものは無免許運転の車に乗っているようなもんや、ちゃんと免許持った塾の先生もおるかも知れんが、塾の経営者はガキのツラが札束に見えるのと違うか。

ワシは、例えばそんな塾へ通う金があったら、その金を貯めて子どもたちを外国へ演奏旅行に連れて行ってやりたい。

外国がどんなものか、外国の少年たちがどんな生活しているのか、そして、音楽という世界共通語で話をさせてやったら、一生忘れられん貴重なことを学ぶと思う。

自分自身や自分の国のことはちょっと離れた外国へ出てみたら、はっきりと見えてくるのと違うやろか。

我が教育長はこの点でワシと同意見やった。おおよそ教育長というのは、カンオケに片足を突っ込んでいるような人が多いのに、我が教育長は考え方も年も若かった。

だから、ワシはこんな人たちが親分なら『宮仕え』も進んですべし、というのや。

しかし、教育長曰く

「得津よ、今年はだめでも、そのうちハワイくらいはなんとかして行かしてやるよ。向こうの少年たちに、ぜひあんたの『軍艦マーチ』を聴かせてやりたいからなあ」

無毛文化財のワシとイガグリ坊主の息子たちが、外国のプロムナードをパレードするの

を、教育長も楽しみにしてくれていたんやと思う。

（三十六）良き理解者、歴代の校長先生たち

今は亡き中井彦三郎校長はワシの仕えた初代の校長。浪花節型の人情派やった。

その頃、我が吹奏楽部はまだまだ練習不足で、全日本へ出場しても、三位、三位、二位と、どうしても一位になることはできんかった。

中井校長は決してワシに「勝て！」とはいわん。それどころか

「身体に気をつけろよ、あんまり酒を飲み過ぎるなよ」

と、本当にワシには慈父のような優しさやった。

しかし、転勤されて、ついに中井校長に栄光の喜びを味わってもらえんかった。心の中で、どれほどそれを望んでおられたかと思うと、申し訳なさでいっぱいになる。

そして大阪、中之島フェスティバルホールでついに感動の初優勝を勝ち取った時、中井

校長はもはや死期を目前にしたベッドの人やったが病床に伺って栄光の優勝旗を見せた時、中井校長は全身の力をふりしぼってベッドからはい出し、優勝旗を握りしめて泣いてくれた。

「ああ、こんなにまで喜んでもらった！」

ワシの顔はクシャクシャになったのは、言うまでもない。

次の木下虎夫校長は、名前の如く勇猛敢闘型やった。

「必ず勝て！」

と、校長自ら陣頭に立って叱咤激励。

勝てば、息子たちの前で握りコブシで涙を吹きながら、

「俺はうれしい！」

とオイオイ泣いた。

木下校長は、息子たちに音楽とは関係のない訓話を引っ張り出して、勝つための精神修養の説教もやってくれた。

その次の園田秀雄校長は、平和主義者や。

子どもたちに

「練習もいいかげんにせんと身体にさわるよ」

と気を遣ってくれる。いつも穏やかで、もの静かなんや。

ところが、全日本はいうにおよばず、いろいろな演奏会や、地方へのドサまわりにも、多忙な教務の時間をさいて必ずついて来てくれ、客席から無言の励ましを送ってくれたものや。時には息子たちと一緒のバスでドサまわりに同行してくれた。

ワシには、この暖かい人たちが見守ってくれたことが、なによりの精神的な支えになっていたし、頑張り通せた活力源やったと思う。

（三十七）我が恩師、我が親分！

全日本吹奏楽連盟理事長で、大阪フィルハーモニー常任指揮者である朝比奈隆氏は、ワシにとってかけがえのない大親分や。

昭和十二年からの音楽学校以来ずっと公私ともにお世話になった。

毎年、元旦にはこの大親分のところへ、年賀の挨拶に行くのが常やったが、必ず学生時代のエンマ帳を出して来て、楽式論は何点やったとか、音楽美学は落第点やったとか、ワシの頭の悪かったことをことさらに強調してクダサル。

その度にワシは冷汗をかくが、ワシの一年はこの冷汗とともに始まるようなものや。この偉大な恩師を持ったおかげで、今までやってこられたと感謝している。

朝比奈先生が大親分なら、大阪市音楽団々長の辻井市太郎氏は、中親分という感じやな。なにしろこの人は、オカヤンとワシの仲人さんやからな。

結婚式の時、水もシタタル花婿はこのワシやのに、どうしたことか係の女の子が花婿につける花を仲人の辻井氏の胸へまちごうてつけよった。

挙式の間、そんなこととは知らずにめでたく式は終了。そのことを知ったのは一年も後のことやった。辻井氏曰く、

「いやナァ、ボクの方が若く見えたらしい。なにしろ頭の毛はボクの方がフサフサしているもんな。新郎の胸に花がないのを式の途中で気づいたけど、その時は気の毒でようことわなんだ。アッハッハッハ！」

何がアッハッハや。毛が薄うても、ガラの悪い顔でも花婿はワシじゃ！

辻井先生と実はアパートが同じ出な。といっても上と下の階やから、行くのが面倒くさい時は、直通のインターホンで用を足す。また、階段を上がったり下がったりも、しんどいからナワバシゴでもかけようと思ったが、オレの体重を支えるハシゴは見つからんかった。

まあ、辻井先生は良き相談相手、いろいろと助言もちょうだいした。そのことを思えば、ちょっとの間、花婿役を盗られたことくらいはガマンせなあかんなあ。

（三十八）自慢すべきは、我が朋友たち

ワシには幸福すぎるくらいたくさんの友だちがいる。それも、酒友、悪友、口ゲンカ友、などと幅広い。おかげでワシはいろいろと鍛えられ、勉強させてもらっている。

まず南の方から紹介すると、四国は香川大学の助教授、佐倉友章氏。「女性にもてる」と自称する彼は、なるほど奥さんと四人のご息女に囲まれて幸せそうや。

ワシとは境遇の違う、その彼にいつやったか演奏旅行で司会を頼んだら

「ご家庭での得津先生は奥さんにとって、ヒモか下宿人なのであります」と大声でぬかしよった。

それくらい家庭を顧みず熱心に吹奏楽部を指導しているといいたかったらしいが、それにしても、もうちょっと気の利いた言い方があったはずや。あれ以来、ワシはどこへ行ってもそう疑われている。

佐倉よ、もし婦人会などから文句をいわれたら、お前責任とってくれよ。

彼との話でもう一つ切り離すことができないものは、ニンニクのたっぷりの特製ギョウザや。四国へ行くと必ず彼とこれを食べに行く。

さすが特製の名に恥じず臭いが強烈や、それを思い切り振りまきながら指揮棒を振ったり、怒鳴ったり、気の毒なのは息子たちや。

以来、ギョウザを喰うと、心許す我がニンニクの友を思い出す。

次は前にも話をした今津中学吹奏楽部、前任指揮者の鈴木竹男さん。

阪急少年音楽隊、阪急百貨店吹奏楽団の親分、人呼んで、『キバ』に『メダマ』。今中への道を与えてくれた人であり、同じ関西の人間であるだけに、常に交流がある。「吹奏楽界の発展に関する諸問題および意見交換」と称して、あっちこっちでイッパイやる。

彼は見かけによらず、誠にタフガイ、二つのすばらしいバンドを切り盛りしながら、頼まれれば休みを返上してでも、地方へ飛んでいって指導するバンドづくりの名人や。

はじめは、彼の顔を見ると「こわそうな先生やナ」と思うが、彼ほど涙もろく、人情に厚い男はいない。

そんな彼だがやはり吹奏楽のことにかけては鬼。エネルギッシュな活動源は、朝鮮料理にホルモン、およそ肉と名のつくものは、目玉も牙もむいてパクリパクリ、その食べっぷりは、百年の恋もいっぺんに覚める形相や。『キバ』『メダマ』のあだ名はそこから由来するのや。

さて次は関東へ。

埼玉県、大宮中学校の先生、秋山紀夫さん。

彼のことをワシらは全日本吹奏楽の牽引車と呼んでいる。まったく彼の活躍たるやスーパーマンに等しい。昨日は東、今日は西と、未成熟なバンドの育成のためには自分のすべてを犠牲にして走りまわっている。頭の下がる思いや。

しかし時々思うのやが、いったいいつ学校にいて、いつ吹奏楽部を指導して、いつ寝ているのかそれが不思議や。

それにつけても、彼がそれほど活躍できる陰の力はやはり奥さんが実に偉いと思う。秋山先生、大切にしいや。元気な奥さんは男の宝やで。

ワシが東京へ行くと、必ず彼と夜の銀座や浅草、新宿などを見学し、語り明かす。また彼が、大阪に出て来るとなんばや心斎橋を同様の目的で探訪することになる。

関東にはもう一人の快男児がいる。大石清さんや。彼は東京芸大の講師であり、全日本吹奏楽連盟の理事でもあるが、ワシとはなぜかボーリング友だち。

といっても二人ともあまり公表できる成績を上げたことはないが、「ボーリングというのはスコアを競うのではなく、ひたすらミゾの掃除をしながらでも、ひたすら重たい玉を転がすことに意義があるのだ」ということになっている。

彼の指導もなかなかユニークで、初めての楽器と取り組む際の注意を、初めてデートする時の心構えにふりかえて音を出させるとか、結構学生たちの人気を集めているらしい。

さて、この人の存在を忘れてはいかん。毎年今津を脅かす良きライバルである、東京の豊島第十中学校吹奏楽部といえば、そこの親分の酒井正幸氏や。

この人がまた偉い。演奏時の少年たちの統率力も去ることながら、舞台を降りた後の行儀作法まできちんと教え込んでおられる。

長崎でのコンサートの時、改めてそう思い直したんやが、彼の故郷である長崎で年老いた父親のためにも優勝しようとがんばったが、その悲願の親孝行は我が今中の健闘に阻まれて果たすことができなかった。しかし、豊島中は今津に続いて二位やったんや。

ワシは申し訳ないような気がしたが、お互い全力で演奏した結果の出来事やったのや。

しかし、決して忘れることができないのは今中の優勝が決まった後の豊島の生徒たちの行動やった。

彼らはわざわざ全員で今中のバスまでやって来て

「おめでとうございます」

と拍手してくれたんや。ポロポロと泣きながら、なあ……。ワシらは感激して、胸がいっぱいになった。

「もし今後オレたちに負けることがあったら、あの豊島中のすばらしいやつらに負けるかも知れん」

演奏も礼儀もあれだけきちんと教え込まれた生徒たちはきっと今日の悔しさを晴らす努力をしてきよるやろう。

その時のワシの偽らざる心境やった。

（三十九）陰で支えてくれた参謀たち

今津中学を卒業後も吹奏楽部の前進に陰の力となって協力してくれたすばらしい、我が参謀たちを紹介しとこう。

まず、大阪市音楽団のクラリネット奏者である木村吉宏君。

彼は今中のために、たくさんの編曲をしてくれている。二、三あげてみると、コンクールの曲はもちろん、『恋のヴァカンス』『ブーベの恋人』『ウナセラディ東京』など、当時はやった曲を若い感覚でどんどん書いてくれた。

ありがたかったが、彼の編曲は懐が痛む。なにしろ彼が編曲した曲は、特殊な楽器を必ず買い足さねばならんかったからや。例えば、ソプラノ・サキソフォン、ピューグル、バス・クラリネット、アルト・クラリネット、ビブラフォーン等々。

おかげで今中は新しいサウンドに挑戦することができたが、その結果、ワシの机のひき

出しには楽器屋の請求書がたくさんたまった。しかし、音楽的な財産と新しいサウンドをしっかり身につけることができた。

次に『テンペイ』こと、高坂滋君や。

彼も後に大阪音楽大学を卒業して、大阪フィルハーモニーのトランペット奏者となった。なぜ、テンペイなるニックネームがついたのかといえば、テレビの天馬天平（竹刀片手に道場に通う青年剣士の日常を描いた作品）の大ファンだったから。

しかも彼には放浪癖があり、月給のある間は、気の向くままに、あっちこっちをウロウロ、ウロウロ。ところが月給がなくなると、ひょっこりと今中を訪れ、アルバイトに息子たちをギューギューしぼる。懐具合に関係なく、今中へ来るようになったら一人前なんやけどナ。

もう一人は今津中学吹奏楽部三代目の指揮者、ワシの後継者の石川學君や。

大阪音楽大学では木村君より後輩で、西宮市吹奏楽団の指揮者であり、トランペット奏者やった彼は、芦屋のボンボン育ち。ちょっと見たら、おとなしくて静かな感じやが、ナンノナンノ、音大の入学試験の時、面接の教官とケンカはするし、吹奏楽団の練習の時などは結構厳しい先生らしい。

ワシはピアノしかでけへんから、ラッパやクラリネットのことは、いつも彼が頼りになっ

ていろいろと助かった。息子たちの面倒もよく見てくれたし、コンクールが近づくと、ワシに鍛えられて、『今津ホテル』の固い床のベッドも何のその。時にはニンニクのかおりも豊かに、ワシに習って天ぷらのハシで指揮をしている。

彼とのエピソードは数々あるが、彼自身からゆっくり話を聞いてほしい。

ともかく彼はワシの跡を継いでくれる重要な人物や。

（四十）体罰代行もさせた名誉子分

ここで忘れちゃならん相棒というか、公私ともに世話になった伊勢昌史君の話をせんといかん。彼は和歌山大学を卒業後、今津中学に美術教師として赴任してきた。

初めて会った時、ワシはこいつに何か運命的なものを感じて、迷わずに名誉子分にしてやった。

あだ名は丹波篠山生まれやから「たんば」や。

もっとも本人にしてみれば、ワシとここで出会ったのが運の尽き。極めて迷惑な話やったかも知れんが、うちのオフクロやオカヤンは「たんばーちゃん、たんばーちゃん」と呼んで可愛いがり、しょっちゅう飯も食わせていた。

本来絵描きやから音楽と格別関係があったわけでもないが、吹奏楽部に非常に興味を持っていたため、いつも裏方としてコンクールや演奏旅行に連れて行くことになった。

たんばは、〝自分はピカソかマチスの生まれ変わり〟とでも思っていたのか、いつもワケのわからん絵を描いとった。

見かねたワシは

「お前、そんな胃潰瘍みたいな絵ばっかり描いていたら、いつまでたっても売れんぞ。誰が見てもわかるような富士山とかバラの花を描けよ」

というてやった。

ところが数年後、たんばはその「胃潰瘍の絵」が認められ「モダンアート展」でグランプリに入選しよったんや。いやあ、これはこれは、お見それしました。

しかし、たんば画伯がどれほどすばらしい賞をお取りになられても、ワシとの親分子分の関係に変化はなかった。

たんばには「体罰代行」もやらせた。
ワシは練習中に悪さしたり、いうことをきかん奴を、たんばのとこへ「ゲンコツ」をちょうだいに行かせたりした。たんばには予めワシから注文を出しておく、
「取りあえず目から火の出る奴を一発ずつサービスしてやってくれ」
すると彼は、
「今日は何人や?よっしゃ、ここに並べ!」
と指示通りに体罰代行を果たしてくれた。
その辺は生徒も心得たもんや。
「今日は練習に身が入らずミスばっかりしました」とか
「朝練をさぼりました」
といいながら素直に自分から頭を出しよった。
だがな、ワシかて人の子や、よっぽどのことでない限り、たんばの処刑場へは行かさんかった。後で聞いたら、
「たんばのゲンコツは本当に目から火が出た」
というとった。

しかし、たんばの処刑も後味の残らん、実にあっさりしたもんやった。それが証拠に殴られた生徒が今でも「たんば」の家へガールフレンドと一緒に遊びに行ったりしてゲンコツの思い出話で盛り上がる。そんな時たんばはいつでも、

「すまん、仕返ししたかったら、どつかしたるで」と、彼らに頭を差し出すことにしているらしい。

体育祭や卒業式となると、ワシはにわかに忙しくなる。日頃世話になっている保護者や迷惑かけている地域の人に挨拶まわりにいかなあかん。まして、かわいい生徒が卒業する時は各クラスを回り、

「何かあったらいつでも来いよ、ワシは学校にいるから」

と一人ひとりに握手して別れを惜しんだ。

なにしろ、毎日毎日あれだけ厳しい練習をしてきてできた繋がりは何より強いからなあ。旅立つ子らを見送るのは感無量なんや。そやからというて、練習を中断させるわけにもいかん。そこで、また「たんばセンセイ」が登場するのや。

こんな非常時は「どつき代行」だけでなく「指揮者代行」もやらせたんや。

さすがのタンバも最初は尻込みしよったが

「適当に指揮棒を振っとけ、生徒も適当にお前の棒に合わして演奏してくれよるわ」

と、何度か振らしてる間に味をしめよったんか、結構気持ちよさそうにやっとった。

朝比奈先生に言わしめれば、

「指揮というものは演奏の邪魔にならなければ、誰でもできるものだ」

とか。本当かなあ…。

そういうこともあっていつのまにかワシと「たんば」は切っても切れん仲になった。

だからあいつが今中に来て七年目に某新設中学校への転勤リストに入った時、ワシは校長に

「こいつを出したら、ワシも吹奏楽部を辞める」

と啖呵切ったら、しぶしぶ撤回してくれたりした。

そんな協力者たちのおかげで、我が今津中学は全国大会に順調に勝ち進み、昭和四十年まで五年連続一位の栄冠に輝いた。

しかしなあ、多木さんよ。「たんば」に会うたら謝っといてくれるか。オレはあいつの教員生活を半分以上引っ掻き回したようなもんやからなあ。

ワシが倒れた時も、自分の本業をほっといて、比紗子と一緒に真っ先にかけつけてくれた。

「たんばよ、ほんまにすまんかった、これからは落ち着いて絵の勉強をしっかりやって、立派な〝絵描きさん〟になってくれよ」

（四十一）得津一座の泣き笑いドサ回り

夏休みが近づくと、子どもたちはいつもソワソワしはじめる。コンクールが近づいて練習がますます厳しくなるからではない。

子どもたちにとって何よりも楽しい演奏旅行が待っているからや。

「今年の夏休みにはどこへ行けるんやろ」

と行き先が気になって仕方がない。

『演奏旅行』は、なるほど楽しそうに聞こえるが、これほど疲れる旅はない。毎年、約一週間の予定で日本の各地からの招きにこたえ、得津一座が『ドサマワリ』の長い旅路につく。

いつも帝産バスを頼み、運転手はスタッフの一員としても〝コキ使える〟気心の知れた、

上田二郎くんを指名した。

五十五人乗りのバスには二、三年生と先生を入れるとほとんど満席になり、楽器を積む余裕はほとんどなかった。苦肉の策で上田は天井から網棚を吊るして、比較的小さなトランペットなどの楽器を置き、大きな楽器はバスのシートを外して収納することにしたが、無理につめこんだティンパニーが現地に到着する頃にはフニャーと楕円形になっていたりする。

ジロやんはそんな失敗もしよったが、コンクールともなれば、「吹奏楽部日本一！今津中学」と書いた垂れ幕まで作ってきてバスに吊るしたり、こまごまとみんなの面倒をみたり、心意気は我が吹奏楽団の一員になりきっていた。日本一になれなかった時は、生徒と一緒に泣きながらくやしがって、その垂れ幕を外しとった。

我が吹奏楽部は、大都会の大ホールで演奏することもあるが、ほとんどが地方の公民館、市民会館そして学校の講堂や体育館や。しかし、ワシには大都会での華やかなステージでの演奏より、地方のささやかな演奏会の方が懐かしい。おそらく、息子たちもそうやろう。

演奏旅行の思い出となると、キリがないが、ただどこへ行っても共通していえることは、演奏を通して強い連帯感と暖かい心の交流が生まれることや。

どこの会場へ行っても、汗まみれになって準備に走りまわってくれる先生や生徒たち、

その姿を見る時、ワシも息子たちも、山道をガタガタゆられてやって来た長い道のりのことなんぞ、いっぺんに忘れてしまう。

そして、演奏の時の会場でわき上がるような拍手を聞くと、疲れはぶっ飛んでしまうんや。まして会場に女の子の多い時など、我が息子たちのハリ切りようは大変なもんや。時々ハリ切りすぎて、椅子からひっくりかえったり、とんでもないミストーンをしたり、ワシは天ぷら棒を振りながら

「アホッ！」

と目でいう、かわいい純粋な子どもたちや。

もう一つ、おもしろいのは宿舎や。山の奥などへ行くと大勢を収容する旅館がない。そこで得津一座は学校や公民館などでザコ寝をする。子どもたちには『今津ホテル』と称する我が校の体育館合宿と違って、すごく楽しいらしい。夜遅くまでワイワイ騒ぎまくる。

西宮へ帰る日が近づくと、みんなそれぞれみやげを買う。これがまたおもしろい。

お母ちゃんにはアレ、お父ちゃんにはコレ、兄ちゃん、姉ちゃん、弟、妹、中には、ガールフレンドにコケシ人形などを買って帰る奴もいる。そんな彼らを見ながら、ワシはまた来年も座長を努める覚悟をする。

一日三回の演奏会という強行軍の日もある。そんな夜は騒ぐのも忘れて眠りこけるも息子たちの寝顔が日に日に逞しくなっていくように見えた。

〝吹奏楽団〟という貴重な連帯意識の体験は大人になってからも彼らの人生に役立つことやろう。

子どもたちの演奏旅行の感想を聞いてみると、

「旅行の間は、先生に朝から晩までくそ暑いのに『ピッチが上がらん』とか、『リズムが悪いから死ね』とか、こづきまわされたりせんし、お父ちゃん、お母ちゃんからは『勉強！勉強！』とギャーギャーいわれんでええわ。」

「遠足の時、担任みたいに、うるさいことをいわんと、得津先生はバスで出発と同時にビールを飲んでイビキをかき始めるから、トランプをして遊んだり、親に叱られたりするような話が自由にできて楽しい」

「演奏旅行のステージでは、練習の時と違って、ちょっとくらいのミスなら、テンプラ棒でコツかれへん」

などと勝手なことをとぬかしよる（笑）。

（四十二）今津サウンドの秘伝

ちょっとまじめな話をしようか。

よく「今津サウンド生み出す秘訣は」と質問される。

やや吹奏楽の専門分野の話になるが、後継者の石川學君のためにオレは得津サウンドを生み出すための要点をこのようにまとめてみた。

①縦の線を合わす
②ピッチを合わす
③スピード感のあるリズムを生み出す
④音色・発音を統一させる
⑤ゴンタな男子生徒の完全操縦法

①基本的に合奏というものは何人でも何十人であろうと合わすという作業が出来ていな

いと、音楽にならん。スコア（総譜）上のピッコロからパーカッションまでの縦の線も、ピッチもスピード感や情感や音色がぴたっと合ってなければ，人の心をうつことはできない。だからオレは一曲三〇〇〇回練習させる、指揮台をテンプラ棒でぶっ叩いてテンポを正確に示す、そして自然に心が解け合うようにそれぞれの音がぴったり合ってはじめて人を感動させる音楽になると思う。これは、実にあたりまえのことやけれど、このことをどれだけ熱心に大切に練習するかで仕上がりが決まってくる。おかげで天ぷら棒で気合いを入れてぶっ叩かれた指揮台は見事に大きな凹みが出来てしまう。

スコアの縦の線を合わせる基礎練習というのは例えば、

のメロディーの演奏に対して細分化したリズム

を刻み、縦の線を合わせる。

昭和三〇～四〇年代には昔ながらの手巻き式メトロノームを使ったが、最近の電動式の

メトロノームや、リズムトレーナーのない時代に生徒たちにリズム感やテンポ感を叩き込むには、この方法がベストやった。

完璧なアンサンブルを目指すためには最初にこの練習を徹底して合奏をする

合奏中は、指揮台をいくら強く叩いても音が生徒達には聞き取りにくい場合はパーカッションにこの役割をさせることもある。

ここで重要なことは、細分化したリズムの指示だけでは駄目で、常に基本となるビート感を出すためにバス・ドラムを使う。完璧なアンサンブルを目指すためには最初にこの練習を徹底して合奏する

コンクールに向けて三千回の練習をさせるが、ただ数を多く練習しただけではあかん。

「オマエのこのリズムが、こう乱れたからもう一回」

「クラリネットのそのピッチが悪かったから（高いとか低いとかは言わない）」

というように、何故もう一回練習するのかをはっきり伝えてから演奏させる。

②ピッチ合わせ

美しいアンサンブルを生み出す基本中の基本は、それぞれの楽器のチューニングや。いくら縦の線をぴったり合わせて完璧な演奏をしても一人ひとりのチューニングが狂っていたら何にもならん。

ワシの愛用のオンボロ・キーボードに合わせて、いつ終わるとも知れない長い時間をかけてチューニングしていると、生徒一人ひとりの奏法の点検や楽器の調子、体調までも見抜くことができる。それ程のしつこさでチューニングはしっかりやる。

キーボードでBフラッとの音を鳴らしながら一人ひとりに吹かせて、高いとか低いとかを一切いわず、「合ってない！」の一言。自分のピッチがピッタリか、ちょっと高いか、ちょっと低いかの三つしかないのだから、自主的に考えて悩ませ、苦しませないと、一生チューニングのできない耳になってしまう。

③生命感のあるリズム

マーチなどを演奏する上でいつも生徒達に要求したことは楽譜通りに吹いただけでは満

足できんということや。

「お前のリズムは死んでいる」

「前へ進んでない」

「お前のマーチは足踏みをしているだけや、前へ歩いてゆこうという推進力が感じられん！」

とよく怒鳴ったもんや。

日本人のリズム感はどうも淡白でいかん、曲がりなりにもジャズをやっていたワシは、アメリカ人でも特に黒人達の持っている独特な「ノリ」の違いを感じたもんや。

人間は生まれながらにしてリズムの中に生きている。「オギャー」と生まれた瞬間から心臓の鼓動のリズムに始まり、時間、生活、地球、宇宙へと限りなくさまざまなリズムの中に生きている。リズムに乗るということは、生きていることの証明や。リズム感のない音楽は死んだ音楽や。

④音色と発音の統一

各楽器の音色については、いつも大演奏家のレコードを聞かせて、フルートはフルート

の音、クラリネットはクラリネットというように、常に理想とする奏者の音色に一歩でも近づく努力をさせた。

基本的には比較練習法を多く取り入れた。マルカート奏（強調されたの意。それぞれの音をはっきり演奏する）とレガート奏（音をつなげて。音の間を切れ目なく演奏すること）、フォルテとピアノ時の発音の違い、というようにいつも比較対照的に練習させた。

得津サウンドを生み出す根源はもっといろいろあるが、もっとも大切なことといえば、毎日一時間以上フォルテでのロング・トーン練習に尽きると思う。

これでピッチの安定した音作りをし、マーチ演奏で必要な演奏体力を養成することができるのや。

今中の生徒達がバテルという言葉を知らなかったのは、アサター、ヒルター、ナイターのロング・トーン練習の賜物だったと思われる。

野球選手が走り込むとか、力士がテッポウする（稽古場にある鉄砲柱を手で押して体を鍛える運動）のと一緒やな。

⑤ゴンタ集団の統率法

ゴンタ集団ともいえるクラブの運営や統率法は今津の場合、まず部長制度を採用せず常に先生の管理下に部員を置き、三年生の下に二年生、二年生の下に一年生というピラミッド型の縦割り制度で運営した。

上級生に演奏上の全責任を持たせつつ、三年生は二年生を、二年生は一年生の責任と技術の向上に努力させた。昔風なら軍隊式、今風にいうなら、体育会系の考え方を吹奏楽部にも取り入れたわけや。

つまり、上級生は技術的にも精神的にも指導者として後輩の面倒をしっかり見る、これは場合によって卒業後もボランティアとして続くことになるのや。

天才は生まれつきではなく、努力することによって生まれる。そのための厳しい練習は、すべての人間に絶対不可欠なものやと思う。苦しみ、もがくことによって、より高度な演奏技術が身に付いていくし、どんな修練でも同じように、楽器もその苦しみを乗りこえないと奏者に音楽の楽しみや喜びを与えてはくれない。

そうして得たすばらしい音楽的個性を持った、四、五十人の個の集合体が結束することに

よって、美しいハーモニーやリズムが生まれ、聴いている人の心をゆさぶる感動的な演奏ができると考えているのや。

石川君、そしてまたその後を継いでくれる指導者、これからの吹奏楽をよろしく頼むで。

（四十三）拝啓、文部大臣様

『必須クラブ活動』なるものを実施せよ。というお上からのお達しがあった。そこでワシはある雑誌を通じて、このことに関する雑感を上申することにした。

こういう文章はできる限り品よくていねいに書かねばならん。

朝夕めっきり涼しくなりました。お元気でございますか。我が今中吹奏楽部もやっと兵庫県のコンクールを終え、部員たちは夏休みの宿題におおわらわでございます。

暑い夏休みも練習につぐ練習などで、あっというまに過ぎてしまいました。

さて二学期を迎えますと、得体の知れない『全校クラブ』なるものが始まろうとしておりますが、

文部大臣様。いったいこれは何のためのシロモノでございますか。

年間たったの十五時間で子どもに何を習得させる、おつもりでございますか。

彼らの心の糧となり、生涯役立つ学習経験をさせてやるには、あまりにも中途半端というものではございますまいか。

これならきっぱり「全員パァーと、遊びましょう！」なる時間にされた方が、爽やかに存じます。

とにかく一度、その時間の我が校へお越になってみてください。あまり広くない運動場には、ソフトボール、バドミントン、陸上競技、サッカーとまるで芋の子を洗うようにひしめいております。これでは怪我人が出ない方が不思議でございます。

予算の方も大変でございます。

トランペット一本の楽器代の予算は五千円也。これではどうにもなりません。場所がない、予算はない、という現状で必須のクラブ活動は、現状理想とされている教育的意義を達成するどころか、なまけものを育てているようなものでございます。

従って四月から始まった全校必須クラブ活動など、「私めにはまったく関わり合いのねえことでござんす」と、ここに謹んでご報告申し上げる次第でございます。敬具

（四十四）なんとかならんのか、日教組

ワシは机上の教育論を唱えるような日教組系の職員のやり方にどうも賛成できんかった。勤務時間外のクラブ活動をさせないで、子どもたちを本当に高めることは難しかったからや。吹奏楽の場合楽器からかろうじて音が出るくらいの中途半端な訓練の指導なら、最初からやめた方がましや。

子どもたちが大人になって、音楽を真剣にやっといて良かったと心から思えるような、自分の一生の財産になるような、体験をさせてやりたいんや。

俺たちを疎ましく思う奴もいたが

「練習は放課後、時間外手当をもらうわけでもなく、喜んでやっているのだからほっとい

てくれ」

という気持ちやった。

ワシはいつも生徒にとって何が大切かを考えると、教師がサラリーマン化するのは生徒にとって好ましいことではないと考えた。

その結果、ワシは日教組を脱退せざるを得なかった。

職員会議に入れてもらえなかったワシは子どもたちに椅子を持って校庭に集合させ、聞こえよがしに「軍艦マーチ」を演奏したこともある。

進駐軍キャンプ時代にやった、同じ類いの単純な嫌がらせで顰蹙もかったが、やっぱりワシは赤旗より天ぷら棒を振っている方が似合っているのかも知れん。

ワシはそんなはみ出し者やったが、職員の中に意外な理解者もいた。

ある冬の夜、ワシたちが練習から帰ってくると、ストーブの上のやかんの中に誰が入れたかわからんようにして、酒が一本入っていた。

メモに「おつかれさん」まぎれもなく校長の字やった。

伊勢君とワシはそのあったかい酒をおいしくちょうだいした。

練習の疲れがいっぺんにすっ飛んでいくような気がした。

STARLINE TOURS
INFORMATION
* UNIVERSAL STUDIOS
* MOVIE STAR HOMES
* BEVERLY GARDENS
* NIGHT CLUB TALKS

凹んだ指揮台

〈第四章〉

（四十五）栄光に翳りが

ワシらが連続優勝を成し遂げるためのエネルギー源にしてきた要素は、何としてもコンクールで栄光を勝ち取るという、熱意、あこがれ、夢というような一般的なものの他に、「怒りに似た闘争心」をあげることができる。あこがれ、夢は当たり前やが、怒りをエネルギー源にするという発想はあまりない。

言い方をかえれば、今中を蹴落とそうと攻めてくる敵国を仮想して、そいつになんとしても勝たなければならん、という「敵愾心（てきがいしん）」を植え付けていったんや。生徒には、常に「日本一」という言葉で、すべての学校に対して闘争心を植え付けさせていた。

名実ともに日本一となった今津中学だが、いつ攻め落とされるかわからん。

特にワシは、豊島十中（東京都豊島区立第十中学校）吹奏楽部の指揮者、酒井正幸先生

の実力を恐れていた。「あそこにはいつ負けるかわからん」という不安が常にあった。

つまり、心の中では、虎キチのワシにとって、豊島十中はジャイアンツみたいな存在やった。野球では先乗りのスコアラーみたいに、たんば たちを敵がどんな音を出しているか偵察に行かせたこともある。カバンの中にこっそり録音機を隠して、何食わぬ顔で「ご挨拶に来ました」とか言うてな。

しかしその不安が的中し、恐れていた日がとうとう来てしまった。

忘れもしない昭和四十一年十一月二十日。

宮城県民会館で行われた第十四回全国大会で『リストのハンガリー狂詩曲』を演奏した今津中学は二位に転落してしまった。

その年の審査員はＮＨＫ交響楽団常任指揮者の山田一雄先生だが、ただ一人ワシらの演奏に批判的な意見やった。

「今中の特徴はリズム、テンポが良くミストーンも少ない等、正確な演奏が評価されているが、私は演奏曲の音楽的理解やデリケートな音楽性をもっと表現してほしいと思う。中学生にジプシーの心がわかるはずがない。そんなことを求めるのは無理だといってしまえば、このコンクールの向上も発展性もなくなってしまうのではないか。今中は優秀なバン

ドであるが故にこの苦言をあえて呈する」

そんな内容やったと記憶する。

結局その年、今中から一位を奪取したのは、やはり東京都代表の豊島区立第十中学校やった。優勝を決定付けた曲は『エルザの大聖堂への行列』。彼らはこのタイトルに相応しく、ゆったりとしたテンポ感で、ワーグナーの名曲を情感豊かに演奏した。

その日は仙台から例のバスに乗って秋田周りで帰ってきたのだが、福井県を出た頃から子どもたちは全員

「俺は帰りたくない、応援してくれたみんなに会わせる顔がない」

といって泣き出した。なかには

「こんな二位のトロフィーなんかいらん。琵琶湖に捨ててしまおう」

と言い出す奴もおった。

ワシは一生懸命がんばった子どもたちに申し訳なくて、

「すまん。全部、俺の責任や！お前らが負けたんと違う、お前らは誰もミスをせず、みごとな演奏をした。」と頭を下げた。

「このままでは帰れない」というみんなの切ない気持ちを乗せたバスは深い雪の中をとろ

とろゆらゆら走った。

夜中になると子どもたちはさすがに疲れて、眠りについたが、ワシとたんばは、そう簡単には寝られるもんやなかった。

「おいたんば、酒や、ヤケ酒や！」と、バスをとめて入った食品店には酒のアテになるものはほとんどなく、売れ残りのバターが一個あるだけ、仕方なくそれを買って二人でかじりながらウイスキーを一本開けてしまった。

頭の中をまたあの山田審査員の言葉が駆けめぐった。

「ジプシーの心がわかっていない……もっとデリケートな音楽的理解を……」

バスの揺れも手伝って、妙な酔い方やった。

酔眼朦朧のワシはたんばをにらみつけて怒鳴った。

「ワシは、もう引退じゃ！」

そして大いびきをかいて寝込んでしまった。

目が覚めた時、バスは琵琶湖の周辺にさしかかっていた。ワシはバスを止めさせ、みん

なをバスから降ろした。
「つまらんことは水に流してしまえ！」
朝もやの美しい琵琶湖を眺めながら、みんなで気持ちよく放尿した。

誰かがスーザの「星条旗よ永遠なれ」を口笛で吹き始めた。
それに合わせてピッコロのパートがオブリガートをおどけて吹いて見せる、手をラッパのようにしてトランペットとチューバが加わる、太鼓はお腹を叩いて『ズンチャカ、チャッチャ、ズンチャカ、チャッチャ、』と口真似する、ワシも行列のお尻について歩いた。
朝日の中を大合唱のマーチングになった。
ジロやんのバスがその後をのろのろとついてきた。

「よーし、また一から出直しや！」

（四十六）まさかの連敗

宮城県民会館での全国大会で、とうとう日本一の座を明け渡した時、ワシは本気で吹奏楽部を辞めることを考えていた。がんばって連続優勝してきた緊張の糸が、ぷつんと切れてしまったような思いがした。

校長にそのことを告げに行ったら、

「あほ！お前の頭とそのヒゲ面はほかに使い道がないやろ。吹奏楽はお前の天職や、死ぬまでやれ！」

といわれた。

そして、その時心の中で「なるほどヒゲ面で吹奏楽か、よおし、このヒゲは一生剃らんぞ！」と誓った。ヒゲは自分との戦いの象徴や、ヒゲを剃る時はその戦いに負けた時や、オレにとってこのヒゲは「心のつっかえ棒」や。

引退まで考えたが、その悔しさは改めて練習に入ると、いつのまにか「来年は絶対勝つ、

今中をもう一回りも二回りも大きく成長させるぞ！」という反発精神がわいて来た。

昭和四十二年、東京大会に復活を夢見て、力いっぱいの『吹奏楽のための序曲』『北の国から』と序曲『リシルド』を演奏した。

いよいよ発表の時、

「今年は今中か、豊島十中（東京都、豊島区立第十中学校）か…」

会場内に緊張が走った。

ところが、高らかに読み上げられたのは、誰もが予想しなかった校名だった。

「第一位……島根県出雲市立第一中学校！」

「まさか……」

会場内にどよめきが走る。

その静寂が破られたのはほんの数秒後。やがて堰を切ったように割れんばかりの拍手がおこり、彗星の如く現れた新しいヒーローたちを観客が祝福していた。

結局その年、今中は二位で宿敵の豊島十中は三位となった。

（四十七）栄光への再挑戦

今津中学もこれまでか……

一時はそう考えたが、いや絶対にそんなはずはない！

まだまだ努力が足らん、三千回の練習では足りんのかも知れん、ワシらはもうこれ以上練習するところがないというところまで練習して、新たな栄光の奪回にむかって再挑戦することにした。

ワシと子どもたちは体育館で合宿した。いわずと知れた『今津ホテル』や。

食事は持ち寄りがほとんどで、保護者が交替で炊き出しに来てくれ、時には寿司桶から、具材まで、何人もの親が持ち寄って作ったチラシ寿司などという豪華なディナーにもありつけることがあった。

「栄養つけて立派な音出しや！」

と保護者総出の応援やった。

今津の土地柄がそうさせたのか、山の手の学校にはない、人情の厚い環境の中でみんなが一体になって、練習を盛り上げていったんや。

保護者のみなさん、ありがとう。ワシも保護者たちに素直に甘えさせてもらっていたが、こんな大勢の協力者のためにも負けるわけにいかんかった。

コンクールがいよいよ目前に迫ってくると寝付けん夜もあった。

誰も信用せんやろがワシは子どもたちが寝静まった体育館で、こっそり灯りをつけて楽譜を見ながら、何度も何度も夜更けまで、指揮のイメージトレーニングをやったもんや。

（四十八）天ぷら棒で微妙な音は出ない

西宮で行われた中学校県大会でのことや。

その年の審査員であった当時大阪フィルハーモニー交響楽団の専任指揮者、宇宿充人先生がワシらの演奏に四位をつけたんや。つまり三位までが入賞できることになっていたか

ら、今中は落第点をつけられたわけや。

先生曰く、

「得津武史は指揮者である前に、暴力的なゴロツキである。楽譜の本質も理解していないし、音楽をなめている。生徒達も生意気である」

というのがその理由やった。

ワシは頭に来た、生徒達も毎回全国大会に出ているので「県大会なんかチョロイもんや！」という気持ちもないではなかったが、「ゴロツキはともかく、音楽をなめたり、楽譜が読める読めなかったり」に関しては、ひとこといいたかった。

大事なのは、まず間違った演奏をしないこと。ワシがジャズをやっていたこともあるので楽譜や規定にとらわれずフィーリングも大切にすること。音楽的な意図をできる限りワシ独特の表現や指導法で子どもたちに伝えて、中学生としては限界に近い完璧な演奏をさせているつもりやった。

それ以上の「難しい音楽理論や曲の解釈は次のステップでいい」と思っていた。

しかし、そんな考えのすべてが、宇宿先生のひとことで根こそぎ覆されたんや。

ワシのことを「ゴロツキ」と言い切った指揮者の宇宿允人さんに

「こん畜生、首でもしめたろか！」
と一度は啖呵を切ったが、いつもその存在が気になって仕方がなかった。
引退を考える前に「コンクールの演奏のどこが悪かったのか、直に聞いて確かめてみたい」
と思った。

宇宿先生は意外なことにあっさりと承諾して今津中学へ来てくれることになった。
練習中だった吹奏楽部の生徒の前で、基本的な指揮法の理論の話があった後、
「では実際に練習中の『ニュールンベルグのマイスタジンガー』を二種類の振り方でやって見せよう」
ということになった。
最初が得津スタイル、次に宇宿先生の振り方を見せられたが、聞いていたワシも演奏した生徒達も吃驚するほどサウンドが変わった。
宇宿先生が指揮棒を振ると、音の出だしがまるで違って聞こえたんや。
満を持したようなタイミングで「ウン、ターン、ターン、タ、ターン」とすごい迫力になる。
それは生徒達の持っているエネルギーを最大に引き出す指揮法のように思えた。

「得津さん、あなたはピアノ弾きだから、音というものは打てば響くように出るものと考えていませんか？私はトロンボーン吹きですから、音を出すためのわずかなタメが必要だと思っているのです。吹奏楽の指揮者はそのタイミングを頭においておくべきでしょう」

宇宿先生のアドバイスは確かに参考になった。

ワシは素直に

「恐れ入りました」

とアタマを下げた。

それまで朝比奈先生や辻井先生から指導を受け、自分なりにこれでいいんだと思い込んでいた指揮法をもう一度、勉強し直す気になった。

宇宿先生はワシの指揮棒にも触れて、

「だいたいこんな重い天ぷら棒で微妙で繊細な音が振れると思いますか？」

ナンセンスとばかりに、〝専売特許〟の天ぷら棒を否定された。

それ以来、コンクールの本番では正式な指揮棒を使うこともあったが、オレの象徴ともいえる天ぷら棒は練習時の〝どつき専用〟としても、やっぱり手放せなんだ。

（四十九）栄光の奪回

昭和四十三年京都会館での第十六回全国大会では、もうこれ以上やることはないほど、積み重ねた練習の成果があって、序曲「さまよえるオランダ人」で三年ぶりに一位を奪還、ついにワシらは返り咲くことができた。

この時は本当にうれしかった。

「ばんざい！　ばんざい！」の歓声とともに会場の外で子どもらに胴上げされたが、その時自分の体が映画のスローモーションのように成層圏に飛んで行くかと思うほど気持ちよかった。

翌、第十七回全国大会は名古屋市公会堂で行われ、ワシらは「吹奏楽のための小品……故郷の情景」と「序曲…ローマの謝肉祭」で二年連続第一位になった。

さあ三年連続全国大会制覇に挑戦する時が来た、と喜んでいたら、次の年から表彰の方法が変わり、順位制ではなく金、銀、銅の三段階方式になってしまった。

金賞は多くて四校ぐらい選出されるので、結果的に一位、二位の差ははっきりしない審査になる。ちょっと気が抜けたような気がしたが、五年連続金賞を勝ち取ると、次の年はコンクールの審査に関係なく、招待演奏の栄誉が得られることになり、また新たな目標に向かって進むことにした。

だが、皮肉なことにこの時期を境に、各校の選曲の傾向が大きく変化し、クラシックからモダンジャズ、ポップス、ロック、ミュージカルに至るまで、さまざまな分野の曲がコンクールに登場し、テクニックも飛躍的に高まっていった。

新しい楽器の普及、過去の優勝校が積み重ねた練習法の採用、独創的なアレンジの研究など全国的なレベルの向上によって、追い上げられる立場としては、安閑とはできない状況となっていった。

しかし、ワシらは今までやってきた独特のスタイルを変えることなく、昭和四十五年の「祝典序曲」に始まり、地元神戸市で行われた四十九年の「トッカータとフーガ ニ短調」など伝統的な選曲法を貫いた。

そしてついに栄誉ある五年連続金賞受賞の念願を達成することができた。

この時の「トッカータとフーガニ短調」は、過去に 出雲第一中学校の歴史的名演があり、

今中が泣かされた曲だから、何も連続五年目の大事な時にそんな因縁の曲を選ばなくても、と周囲は猛反対したが、こんな大事な時だからこそ、あの時のあの悔しさを晴らそうと、あえてこの大曲に挑戦したんや。

振り返れば、我が今津中学は多事多難を懸命に乗りこえることによって成長し、何度も全国優勝を果たして、五連続金賞受賞という不滅の金字塔までも打ち立てることができた。わが、今中吹奏楽部は『文化最果ての地』といわれた今津を日本全国に知らしめ「西宮市の誇り」とか「文教住宅都市の至宝」とまで言わしめる存在となったが、あとを継ぐ後輩たちにとっては誇らしい反面、重苦しい負担にもなったかも知れん。

そのプレッシャーをはねのけて練習に練習を重ね、伝統を受け継ぎ「自分に勝つ」ことを知った今津の息子達は、おそらく実社会に巣立って行っても、「日本一の今津中学のバンドにいたんや！」ということを忘れんはずや。

そして、どんな苦境でものりこえる根性と、音楽で培った、すばらしいハートを生涯の財産にしてくれることと思う。

（生徒の作文）

この伝統を受け継いで

二年一組　常松　誠

今日がコンクールだ。
ぼくたちは、この日のために厳しい練習を重ねてきた。
そして、今、最後の練習を終えて会場に着いた。
応援に来てくれた人たちが、とても励ましてくれた。
そして、出場数分前になった。みんなは握手を交わしたり、はげましあったりしていたが、僕だけは落ち着かないように思えた。
やっと前の学校が終わって、ＯＢの人と一緒に楽器をステージに運んだ。
ライトがつき、先生が指揮台に立った。
太鼓のバチを持つ手が汗ばんでいた。

とうとう曲が始まった。

僕は思いもよらないところでまちがってしまった。もう、あっという間のような出来事だった。曲が終わった時、拍手が大きく、とてもうれしかった。トラックに楽器を積んだ。みんなと、まちがったところなどを話しながら、また会場に入った。

ほかの学校の演奏が終わった。

いよいよ、審査発表だ。演奏する時より心が落ち着かない。

し、ここで負けたらみんなに合わす顔がないという気持ちがわいてくる。

もう発表をしている途中だ。

今津中学校の前までに「金賞」を得た学校が、増えてくるにつけて、よけいに心が落ち着かない。前の学校の発表が終わった。

「十六番、西宮市立今津中学校吹奏楽部。『金賞！』」

「やったぁー！」

みんな手を叩いて喜んだ。

今までの苦労がここに実ったのだ。本当にうれしかった。これからの、今津中学校吹奏楽部にも、この金賞受賞を、受け継いでほしいと、僕は固くそう思った。

（五十）いつのまにか尚子も恋を知る年に……

コンクールで賞をとると、ワシや息子たちもちょっとした有名人になる。新聞社やテレビ局が取材に来て練習風景を特集番組にしたり、時にはワシもテレビ局へ出かけて行ってゲスト出演したりする。

ある日、ＮＨＫでインタビューを受けた時のことや、ひとしきりコンクールや練習の苦労話があった後、若いアナウンサーから突然

「先生は、お子様はいらっしゃらないんでしたね」

と聞かれた。ワシは一瞬戸惑ったが、

「はあ」

と小さな声でこたえた。そして、思わず

「ワシの子どもは今中の息子たちだけですわ」

というてしまっていた。

胸にズキーンと痛むものが走った。
テレビ局からの帰り、ワシは「焼きせんべい」を駅で買って我が家とは反対の方へ向いて歩きだした。なんとなく娘のことが気になっていたんや。
足がひとりでに尚子の住んでいるアパートへ向いてた。
もう何年会ってないやろか。十歳の時、別れた尚子は、もう二十歳近い娘に成長しているはずや。
異様に胸がときめいた。若い頃の奈都子のイメージをダブらせてみたりした。
アパートのある方向に道を曲がると、子どもたちの遊ぶ声に交って、ピアノの音が聴こえてきた。
尚子の弾く「ショパンのスケルツォ」やった。
ピアノの音は二階の窓が少し開いている部分から聴こえてきた。ワシはその下に立ち止まって聴いた。
夕暮れの空がどんどんオレンジ色に変わっていった。
するとピアノの音がふっと止まった。
ひょっとすると尚子も、この夕暮れの空を窓越しに見ているのかも知れんかった。

ピアノがまた鳴り始めた。
今度は今までと全く違う曲やった。おそらく自分で作った曲かも知れん。
夕焼けの空にピッタリのメロディーやった。そして尚子の歌う声が聴こえてきた。

「枯葉が一つぽつんと落ちて
イチョウの木にさよならした
秋は木の葉の別れの季節
黄金色のドレス着て」

ワシは路端に腰をおろして、みやげに持ってきたせんべいをいつのまにか、カリカリやりながらその歌に耳をかたむけた。

「手品みたいに扉が開いて
あなたが戻ればいいな
忘れないわあの愛の日

すべてが輝いていた」

ワシはとうとう娘に会わず、せんべいを齧りながら西宮の浜を歩いて帰った。
いつのまにか娘も恋を知る年頃になってたんや。

（五十一）黙って見つめた尚子の婚礼

「その日」は何の予告もなくやってきた。
尚子の結婚式が宝塚ホテルで行われるという、案内とともに招待状が送られてきた。
オカヤンは
「いくら別れて暮らしていてもあなたは尚子さんの父親なんだから出席してあげなさい」
といってくれたが、やっぱりワシは出るのをやめた。
いや、出たらアカンと思った。

実はオカヤンは

「あなたの子どもは尚子さんだけでいい。もし腹違いの子どもができて後々気まずい問題が起こったらかわいそうや」

と気遣っていてくれたらしい。

そんな気遣いをしたオカヤンのためにも、やっぱり勝手な時だけ父親面して、尚子の前に出られんかった。

しかし、ワシは生涯でたった一度しかない。娘の晴れ姿をこの目で見るチャンスを逃したくなかった。

ワシは、日頃から懇意にしている板橋君に連絡した。彼は、在学中クラリネットを吹いて、ことさら念入りに天ぷら棒の洗礼を受けた奴や。

板橋君は卒業後ピアノの販売業をやっていたが、ワシは何かあるとすぐ彼を呼び出して、よろず雑用係りを命じていた。実に気のええ男で、ワシが夫婦けんかをした時でも、いつも夫婦間の防波堤になってくれた。

婚礼の日も、釣りに行くといってオカヤンをだまし、朝の五時から八ミリカメラを持って彼の車で宝塚ホテルへかけつけた。

魚釣りの帽子を深々かぶって物影から、ホテルの玄関へ天井の高い花嫁さん専用タクシーで到着する尚子の花嫁姿を夢中で撮影した。

後から、映してみたらズームで寄りすぎて画面が小刻みに震えていたけれど、文金高島田の尚子の顔は子どもの時のまんまで、まるで人形みたいなかわいらしさやった。

（五十二）卒業式「いつでもワシのとこへ来いよ！」

ワシにとって毎年、卒業の時期になると一番骨身にこたえる。三年間共に苦労した息子たちと別れるのは、身体の一部をもぎ取られるような辛さや。

卒業式を控えて、吹奏楽部送別会は会費百円でささやかなパーティをやり、ワシのヘソクリでひねり出したアルバムの贈呈式をやる。贈呈を行うのは二年間、三年生にイジメたおされた二年生の役目や。

そして、ワシはとりとめもなく息子たちを槍玉にあげて、思い出話にふける。

『トン平』よ、お前はおばあちゃん子やから気が弱いな。おぼえているか？
コンクールが近づいた夏休みのある日、
「お前の大太鼓のリズムの悪さは死んでも治らんか！」
と怒鳴ったら、お前、家出したなあ。あの時先生はびっくりしたぞ。トクソウ班を編成して捜査にあたったけど見つからんかったな。
夜になってヒョロヒョロ帰って来たお前は何とぬかした？
「甲子園の浜で海を見ていました」
「バカモン！大太鼓と沖の白帆と何の関係があるか！」
とワシは怒鳴りあげたよな。
『殺し屋』よ、お前はけんかをして前歯を折った時、チューバが鳴らんというてピカピカの入れ歯をしてたなあ。あの時、ワシが冷やかしたらお前何というた？
「ほんのチューバしのぎですわ（笑）」
コンサートマスターの『オタ』よ。お前は年中オタオタして落ち着きがないばかりか、アガると真っ赤な顔して、汗びっしょりでテンポを走りまくるもんやから、『ラコッツイの行進曲』なんか漫画映画の伴奏みたいになってしもたやないか。おまけに忘れ物の名人と

きている。コンクールでも、

「お前の吹いたソロ、あれはいったい何や！」

と聞いたら、

「吹いたかどうかも忘れてしもた」

とぬかしたな。

『オタ』よ、オオキニ。お前は楽団全員のことをよく面倒みてくれた。高校行っても、うちのコンサートマスターをやっていたことを忘れるなよ。

『井上馨』、お前は知る人ぞ知る明治初期の鹿鳴館を中心とする、欧化主義政策を実践した外務大臣と同姓同名や。我が今中の一番ラッパにふさわしく、「名前負けしとる」といわれんように、阪急少年音楽隊へ入隊したら、立派なラッパを吹いて、鈴木先生を喜ばしたれよ。

フルートの『チビ』に『子福』よ。

クラリネットの『ネズミ』に『オバケ』よ。

サキソフォンの『ノレン』よ。

トランペットの『ニキビ』に『ユーレイ』に『カオル』に『ガンジー』よ。

トロンボーンの『キリン』に『デベソ』に『モヤシ』よ。
小バスの『山賊』と『海賊』よ。
ドラムの『ポン太』にスルメの『トン平』よ。
三年間、ホンマにようがんばった。とうとうお別れやな。
もし困ったことができたら、きっと先生のところに来いよ。
おまえたちは、ホンマに頭の弱い三年生であったが、三年間シゴキにシゴキ、ドツキにドツクばかりで、なんにもしてやれなかったが、許してほしい。ただ、やろうと思えば何でもやれるという根性だけは、おまえたちにしっかりと叩きこんだつもりや。
先生は、黒潮躍る紀州の和歌山中学校の卒業生である。だから、早熟である。実は、中学校二年生にして酒、タバコ、それから男として致さなければならぬことは全部卒業したが、お前らはまだ未熟や。
将来、酒は大いに飲め。うれしい時、悲しい時、遠方より友来る時、酒はホンマにエエモンや。しかしタバコはいかん。こんな物を発明した奴は、どつき倒さなあかん。腹具合は悪うなるし、頭はボケるし。お前ら、それ以上頭が悪うなったらどうなるのや。
もし女の子のことについての悩みごとがあれば、それは先生の得意中の得意であるから、

いつでも相談に来い。なんとかしてやる。

ともかく身体に気をつけろよ。どうせ、ナントカとナンヤラは長生きするというが、お前らは特別長生きするやろ。ワシが保障する。

コンクールの前になったら、必ず現役にハッパをかけにきてくれよ。その晩は懐かしの今津ホテルで一緒に寝て、いろんな思い出話をやろうやないか。

最後にお前らのスポンサーであるお父ちゃんお母ちゃんによろしく伝えてくれ「オワリ！」てな、具合にワシは迷演説をしめくくる。

（生徒の作文）

今津よ永遠に

三年一組　中田　知子

あと数分で始まろうとしている。もう何を考えたらいいのかわからない。

もうすぐやってくる……最後の十二分が……神さま、どうか私にリードミスをさせないでください。この十二分間だけは決して……。

ライトがついた。目を見開いてみると五千人もの聴衆が今津の演奏を待っている。

昨日まで練習してきたように吹けばいい。

指揮棒が上がった。そしていつものように、先生の手が振りおろされる……

とうとう始まった。何十時間もかけた一音一音がどんどん過ぎていく。

いつもリードミスしたところ、音が全然合わなかったところが、今日は、こんなにもあっさりと過ぎていく。

曲が終わりに近づくにつれて、なんともいえない思いがこみ上げてきた。

頭の中では吹奏楽部での三年間のすべてのことがよみがえり、駆けめぐる。そして普門館での最後の一音。ラストのパーカッションのための四十五名一斉の休符。

そこにはまるでそこに時が一瞬にして止まり、次の先生の一振りとティンパニーと大太鼓だけに、すべての緊張が寄せられたようだった。

そしてその緊張を盛大な一打ちがつきやぶり、拍手が会場全体に、わき起こった。

三年間をこの喜びのためだけに賭けたことを、少しも悔いはしない。

これからの人生の中で、もう一回、こんな三年間がやってくるだろうか。
貴重な経験を与えてくれた吹奏楽を、私は決して忘れることはできないだろう。
今津よ永遠に……。

（五十三）蛍の光

卒業式の日には、二年生以下のメンバーで校庭に列を作って、卒業生たちを『蛍の光』の演奏で送り出す。
この時は送られる者も、送る者も、純粋な気持ちで涙を流す。ワシのテンプラ棒も湿りがちやが、主力の三年が抜けた在校生の吹く音は、
「今中のブラスは、明日からおれたちにまかせてくれ！」
と力いっぱいや。
そんな時ワシは「ブラスバンドとは、何とすばらしいもんや！」と心から思う。

卒業生の作文

ついこの間のような気がするんです。

自分が〝今津〟である最後の日、吹奏楽部の「蛍の光」の中を、巣立っていかなければならないあの日。

〝今中ブラスばんざい〟と書いた天ぷら棒を、指揮をする先生に列を抜けて渡したら、大きな手で握手してくれて、肩を叩いて「がんばれよ」と笑ってくれた。

天ぷら棒を渡す時の言葉にできないほどの気持ちは、三年間を一心に吹奏楽部に捧げた、生徒と先生にしかわからないとことと思う。

どんなに悪態をついた子だって、〝尊敬〟とか〝感謝〟なんて、きれいな言葉は、きっと後から思いついて付け足す言葉。

気のせいか楽譜が、白く光って見える。

何時間も楽譜ばかり見ているためかもしれない。

下唇にマウスピースのための歯型がつく。
先生の声……「Piuanimato から」。
涙が出るほど、口が痛い。
「それが今津の Clarinet の音か」
先生の声とともに天ぷら棒が飛ぶ。
知っているのは先生と私たちだけ。
コンクールでの十二分が終わった後、何ヶ月も緊張していた先生の顔が初めてほぐれる。
〝金賞〟と聞くと同時に、体の力がいっぺんに抜ける。
思いっきりのばんざい三唱。
力いっぱいの胴上げ。
任務を果たした気持ちを感じ合っているのは先生と私たちだけ。
「もうこの一曲で終わり」といっておきながら、続けて五、六曲はやり、ウソを吹くと、「銭返せーっていわれるぞ」が口癖の、あの野菜嫌いで、一日に Seven Star を二箱も吸い、夏休みのお昼は生徒に小僧ずしのバッテラを買いに行かせ、何かにつけて、たこやきの話をする。
もしもう一度、私が中学生に返れたとしたら、そんな得津先生についていきたい。もう

一度、今津で過ごしたい。

記念のアルバムに三年間の〝時〟が止まっている。減ることはなくても、もう決して増えることはない、かけがえのない時がアルバムの中で止まっている。

ついこの間のような気がするんです。

ねじり鉢巻きに、シャツ一枚。シワシワになったスコアとテンプラ棒をいつも持ち歩き、片方の手はタクトをとっている。

「思い出」になろうとしている今津を私はいつまでも大切にしたい。

（卒業生の作文より）

ワシもこの人生を卒業する時は、息子たちのブラスで送られたい。

そうや！みんな、約束してくれ。

オレを送る時は、しめっぽい、お上品な葬送行進曲なんかやめてくれ。

やっぱり『軍艦マーチ』や！

単純豪快な『軍艦マーチ』がワシに一番似合っとるんや！

（五十四）究極の練習作戦

五年連続して金賞をとった翌年、昭和五十年の札幌大会で今中は審査の対象とはならず、特別招待扱いのバンドとなった。そんな気楽さに、ゆったりと「煙が目にしみる」のような軽いアメリカン・ポップスを演奏した。

決して気を抜いていたわけではないが、進駐軍バンド時代に流行ったこのきれいな曲を、アルトサックスをフィーチュアして小粋に演奏してみたかった。

そして、その翌年、横浜の神奈川県民ホールで思ってもみなかったことが起きてしまった。金賞はおろか屈辱の銅賞に泣かされることになってしまった。銀賞はまだしも、オレたちにとって銅賞は『無』に等しい。

巷では

「もうトクさんの時代も終わりや。とうとうネタが切れた。去年の招待演奏以来、良い気になって練習しとらんかったな」

などという勝手な噂が立ってしまった。

ワシの悪口はなんといわれても仕方がないとしても、一生懸命いつも通り練習してきた子どもたちに申し訳なかった。

この屈辱はどんな事をしてでも晴らすぞ、5年連続優勝をとげた今津中学の面目にかけてもワシは金賞奪回を心に誓った。

この頃、コンクールでめきめき実力を上げて来た高校があった。

丸谷明夫先生率いる、大阪府立淀川工業高校や。

約八〇〇人の在校生のうち二〇〇人くらいが丸谷先生に惹かれて，吹奏楽部入部希望をする。

オレはこの丸谷君の実力と彼の吹奏楽に対する情熱に他人とは思えない、ある種の近親感をもっていた。

練習のやり方、生徒への接し方、その口ぶり、おまけにオレの特許の天ぷら棒まで活用しとる。

『マルちゃんは得さんそっくりや』

と他人が冷やかしすのも、実は心地わるくなかった。

そんなわけでオレたちは，頻繁に連絡をとりあい、情報を交換したり，ときにはアルコールつきで議論をしたりした。

さて、去年銅賞をとって「今年はどうしょうー」（テレ笑い）と考えていた昭和五十二年のコンクールの前日、オレはとてつもなくおもろい事を考えついた。

マルちゃんの淀校は自由曲に、偶然ウチとおなじ、序曲『運命の力』を選んどった。

そこでワシはマルちゃんをそそのかし、ウチと淀校で合同練習をしようと持ちかけた。

オレが予約した宿舎の関連施設を練習場にして、まず、二つのバンドを向かい合わせに並ばせた。

中学と高校では技術的ハンデはあるが淀校にとっては、目の前に並んだ相手はたかが中学生と言い切れない連続優勝の実績をもった連中や。しかし彼らにしてみれば、

『今津といえども、中学生ごときに負けてたまるか』
と思っているやろうし、今津にしてみると
「高校生に勝ったら気分ええぞ」
てな雰囲気やった。
練習が始まった。
まず、オレが今津を振る。それからマルちゃんが淀校を振る。
お互い相手が演奏しているときは「じーっ」と耳をそばだてて聞く。
これは相手の音を目前で聞いて良くも悪くもしっかりと自分のものにするという効果がある。
しかしワシのアイデアはこれだけに留まらない。
次に、二人が入れ替わって相手のバンドを指揮するのや。
これで彼らはまた新しい体験をするし、振ったオレたちも多いに参考になる。
オレのバンドを他人が振っているのを見るのも実に不思議な光景や。

ワシは今津を振るマルちゃんの後ろ姿を見て思ったな、

今津生え抜きの石川君にしろ、このマルちゃんにしろ、オレの息子みたいな歳やけれど、きっとこの吹奏楽の未来を明るくしてくれるような、すばらしい指導者になってくれるやろ。

ワシは何となくこの世界の頼もしい後継者たちに思いを巡らしていた。

そんな練習の成果があって、がんばった今津は見事に金賞に返り咲き、得津はまだまだ元気だぞと世間に示しはしたが、実際には体力的にも精神的にも相当まいっていた。

気がつけば、いつのまにか還暦が間近に迫っていた。

（五十四）の2　ある前兆

音楽は「音」を「楽」しむためにあるのに、ワシの場合はずっと音で苦しんできたのかも知れん。なにしろコンクールの練習では、十六分音符一つに命を削り、ステージに上がればいつも

「いい音を出してくれ！いいリズムを出してくれ！」

と、祈るような気持ちで棒を振ってきた。

その結果、いい成績を取った時は痛快やったが、苦しんできたことも多かった。

そんなことを考えるようになって、ワシは少し音楽をゆったり楽しもうと思うようになった。あちこちの演奏旅行では、心に滲みるような懐かしい日本のメロディーも演奏した。

渾身の力で吹きまくるスタイルもあれば、あったかい優しさの表現も多く取り込むようにした。

その頃からだと思う。ワシは度々強烈に襲ってくる頭痛に悩まされるようになった。

ミストーンを聞き逃したり、ハーモニーの感覚がつかめなかったり、ワシの頭の中だけで実際には鳴っていないシンバルが鳴ることもあった。

いつのまにかロッカーの棚は頭痛薬の箱でいっぱいになった。

頬張るように錠剤を飲み込むワシに、

「先生、頭痛いの？」
と梅谷が気遣って聞いてくれたが、正直いうと、医者に行くのが怖かった。ワシはただ、
「ちょっとな」
とうなずくだけやったが
多分それが「くも膜下出血」の前兆やったんやろ。
今更いうても遅いが、元来から酒の飲みすぎで血圧も高かったし、肝臓も悪かった。不規則な食生活もたたっていたんやろうな。
以来、ワシは何時倒れてもいいように、例えばコンクールの最中であっても演奏は続けろとか、棒を落とした時は誰がどうするとか、あらゆるシーンを想定してみんなに対策を指示することにした。

（五十五）楽器盗難事件

退職を一年後に控えた年のことや。

オレが二十五年にわたって積み重ねた、かけがえのない今津の思い出を一度に帳消しにするくらいのショッキングな事件が起きた。

音楽部室に泥棒が入り、命よりも大事にしていた楽器がごそっと盗まれたんや。おまけに古典的な泥棒の儀式である、糞まで現場に残して行きよった。

一番腹が立つのは、ワシのへそくりや借金で購入した「良い楽器」だけ盗み、後はめちゃくちゃにつぶされたことや。

この良い楽器はコンクールで，今中が底力を出す秘策として使われていた。

つまり、重要なパートを吹く生徒に「安もんの楽器」で死ぬほど練習させておいて、コンクールが近づいたら、秘蔵の良い楽器を突然与える。

生徒は目を輝かしてピカピカの良い楽器を吹いてみたら、「これは一体なんじゃ！」というくらい、すばらしい音が出る。そこで息子らは「ボクは天才や」と勘違いしよる。

それがこっちの狙いや、仕上げの段階で急にサウンドのスケールアップを図ることができたんや。そいつをみんな持っていかれたもんやから、さすがのオレもがっくりときた。

警察の現場検証などの結果から、犯行の動機や犯人像について多くの憶測が流れたが、

コンクールに対する妨害や内部犯行という見方もあり、真実は明らかにされずじまいやった。

複雑な状況下でワシはこれまでにない精神的ダメージを受けた。

これは単純なもの盗りではなく、ワシが今まで命がけでやってきたことへの陰湿な嫌がらせなのか、それとも仕返しなのか、スパルタに対する反動なのか。

狼藉の後の部室に一人立ち尽くして考えていると、思いは悪い方向にばかり巡った。

それに追い打ちをかけるように、『暦年の優勝候補、西宮市立今津中学校楽器盗難事件でコンクール不参加か』というニュースが新聞やテレビにも報じられた。

この事件が、想像以上に吹奏楽界に波紋を投げかけたためか、各方面から楽器を貸そうかという援助の申し出もあった。

ありがたい話だったが、心血をそそいで築いた得津サウンドに、突如、不協和音が流れたような状況で、ワシは人の助けを素直に受ける気力も失せていた。

「今津の子どもたちとがんばってきたトクツ・サウンドも、もうこれまでか……」

この事件はワシなりの指導法や、ものの考え方の時代が終わったことを示唆していたのかも知れん。

ワシは疲れた。

その頃から「もう辞めさせてくれ」が口癖になってしまった。

（五十六）退職記念演奏会

昭和五十六年四月、卒業生たちが中心になってワシの今中二十五周年をしめくくる西宮市吹奏楽連盟特別演奏会が市民会館で開かれることになった。

舞台には『ありがとう得津先生、新しい出発を！』と書かれた看板が掲げられてあった。阪急少年音楽隊の『マイウエイ』で開幕し、舞台中央のスクリーンにたんばちゃんが描いてくれたオレのイラストが映し出される中、これまでの活動が司会者から改めて紹介された。

「今津中学に吹奏楽部ができたのは昭和二十八年です。甲子園球場に市内の中学校が集

まって開かれる『連合体育大会』で、各学校がそれぞれのバンドの伴奏で校歌を歌ってエールの交換が行われていましたが、今津中学だけはバンドがなく、生徒たちは肩身の狭い思いをしていました。

そこで生徒会、育英会、地域住民からの強い要望が寄せられ、バンドを作ろうということになったのですが、当時音楽担当の池尻先生はご高齢であったため、外部から、鈴木竹男先生が依頼を受けて初代の今津中学校吹奏楽部の指導者として着任されました。

当初、部員はたったの十八名。楽器もろくろくそろっていませんでしたが、なんとか次の甲子園『連合体育大会』に間に合わせようと、懸命に楽器集めをされながら大変なご苦労の結果、今津中学校吹奏楽部が誕生したわけです。

そして昭和三十一年、今ここにおられる得津武史先生にバトンタッチされ皆様もご存知の通り、全日本吹奏楽コンクールで十五回の金賞を獲得されるなど、輝かしい成果を残されました。朝、昼、晩と妥協を許さない激しい練習で『今津っ子』を日本一に育て上げた得津先生は吹奏楽会の名物教師としても、今津中学とともに全国にその名を轟かせました。『苦節と栄光の四半世紀』、教え子は今や五百人を超え、作曲家や演奏家として多くの方々が輩出し、各方面で活躍されています」

まるで他人ごとであるかのように聞いているワシの頭の中を、長いようで短かかった、あっというまの二十五年の思い出が走馬灯のように走り抜けた。

ＯＢ達の合同演奏、西宮市内の高校合同演奏、応援にかけつけた丸谷君指揮の大阪府立淀川工業高校、西宮吹奏楽団、関西学院大学応援団総部吹奏楽部らがそれぞれ演奏し、会場から

「ありがとう！　得津先生」

のかけ声が上がった。

最後は参加者全員の大合奏『錨をあげて』の演奏をオレが指揮させてもらった。

進駐軍キャンプ時代の、真っ黒なドン公のラッパや長い間のバンド仲間の顔が次々に目に浮かんで甦った。

指揮していたオレの顔は涙でくしゃくしゃになっていたと思う。

「ありがとう」の会場の大合唱の中、西宮市吹奏楽連盟からの感謝状と記念品を今西永兒理事長から手渡された。

腕白どもと過ごした二十五年におよぶ今津中学の教員生活にワシは手を振って別れを告げた。

（五十七）天国への旅立ち

夢中になって話してくれた得津氏の横顔は、語り疲れた様子もなく、むしろ満足気な表情で眼は静かに閉じられていた。

若い担当医の岸川先生が、気忙しそうにマルチモニターに写し出されたパルスと、血圧のインジケーターをチェックした。先程まで刻まれていた波形は一直線に変わっていた。医師は、得津氏の瞳孔をペンライトで覗き込んだ。

対光反応はもうほとんどなかった。

「多木さん、ワシはもう行かなあかん……」

「得津さん！」

私が話しかけても、もう返事はなかった。

後はハイスピード・カメラで撮影された画像のように、得津氏から私の脳裡に投射されるかすかな異次元の光彩を読み取るより仕方がなかった。レンズ前にデフュージョン・フィルターがかけられたような曖昧な世界だったが、彼が目にしているのは、あり余る光にあふれたハワイの白い野外音楽堂であった。

大勢の観衆が立ち上がって拍手を送る輪の中に、アメリカと日本の少年たちがピカピカ光るブラスを生き生きと吹き鳴らしている。

少年たちの眼が、音楽を通じて話し合っている。

アメリカの少年がクラリネット、そして日本の少年がトランペットでそれにこたえる。

全員がテュッティで最後のフレーズを駆け上がり、その頂点をシンバルが炸裂するように極める。

指揮棒がきらめいてコーダに入る。

銀髪の外人指揮者が、深いオーバーラップで得津氏に変わる。

躍るように、泳ぐように、指揮棒が舞う。

「この道より我が生きる道なしこの道をゆく……」
「やっぱり、吹奏楽をやっていてよかった
すばらしい音楽と一緒に
すばらしいやつらにめぐり会えた」

「さいなら！みんな、さいなら……おおきに」

大観衆の拍手の中で、得津氏の生命との戦いは終わった。
みごとなエンディングだった。
堂々たる余韻を残して、得津サウンドが消えていった。

年度	全日本吹奏楽コンクール		曲目
32	32.12.8	3位（東京）	序曲「詩人と農夫」（スッペ作曲）
33	33.11.30	3位（名古屋）	歌劇「ザンパ」序曲（エロール作曲）
34	34.11.15	2位（八幡）	喜歌劇「ジョリ・ヨパーズ」（スッペ作曲）
35	35.11.13	1位（大阪）	歌劇「シシリア島のタベの祈り」（ヴェルディ作曲）
36	36.11.11	1位（東京）	「新世界」交響曲フィナーレ（ドヴォルザーク作曲）
37	37.10.28	1位（室蘭）	スラブ行進曲（チャイコフスキー作曲）
38	38.11.10	全日本3年連続表彰 特別招待演奏（岐阜）	
39	39.11.8	1位（高松）	ハンガリー行進曲（ベルリオーズ作曲）
40	40.11.14	1位（長崎）	英雄行進曲（サン・サーンス作曲）
41	41.11.20	2位（宮城）	ハンガリア狂詩曲3番（リスト作曲）
42	42.11.25	2位（東京）	「リシルド」序曲（バレ作曲）
43	43.11.17	1位（京都）	「さまよえるオランダ人」（ワーグナー作曲）
44	44.11.15	1位（名古屋）	ローマの謝肉祭（ベルリオーズ作曲）
45	45.11.3	金賞（東京）	祝典序曲（ショスタコーヴィッチ作曲）
46	46.11.7	金賞（大阪）	交響曲第5番終楽章（ショスタコーヴィッチ作曲）
47	47.11.15	金賞（東京）	スラブ行進曲（チャイコフスキー作曲）
48	48.11.3	金賞（名古屋）	「ニュルンベルグのマイスタージンガー」序曲（ワーグナー作曲）
49	49.11.4	金賞（神戸）	トッカータとフーガ（バッハ作曲）
50	50.10.25	全日本5年連続表彰 特別招待演奏（札幌）	
51	51.11.6	銅賞（横浜）	「ニュルンベルグのマイスタージンガー」序曲（ワーグナー作曲）
52	52.11.5	金賞（東京）	序曲「運命の力」（ヴェルディ作曲）
53	53.10.14	金賞（東京）	「ダッタン人の踊り」（ボロディン作曲）
54	54.11.3	金賞（東京）	エル・サロン・メヒコ（コープランド作曲）
55	広島、九州方面演奏旅行		
56	得津先生 勇退		

〈終　章〉

（五十八）十一月六日

今津中学の校長室横にある応接室で学校関係者、西宮教育委員たちが集まって得津武史の葬儀の打ち合わせが行われていた。

ありきたりの段取りに関しては、葬儀社の作成した、たたき台が参考にされスムーズにまとまったが、この葬儀を西宮市の市葬に準じた、格調のあるものにするべきであることが決議されたあたりから関係者の心は重たくなっていた。

葬儀委員長である辻井市太郎氏は苦慮した末、少年たちが得津先生との約束だから、ぜひやりたいという『軍艦マーチ』は、この場にふさわしくないという見解を、断腸の思いで裁決した。

今津中学吹奏楽部を引継ぎ、日夜少年たちと交流のあった石川学先生の思いも、沈痛で

あった。

せめて祭壇には菊の花で描かれた『軍艦マーチ』の音符を飾ることが決められたのは、得津氏と約束を交わした者たちにとって、一つの救いであった。

（五十九）「吹きまくれ！思い切り吹きまくれ！」

十一月七日、葬儀の当日は晩秋の雨が降り続いた。得津氏が息を引きとった県立西宮市民病院から、二、三百メートルくらいにある楠会館で葬儀は行われ、参列者は雨の中を、ひきもきらず二千人を超えた。

読経の後、教え子代表が弔辞を読んだ。

得津先生、今日こうして、私たち、先生の教えを受けた者がたくさんお別れに参っております。

私たちはたった一つの心の支えを失ってしまったような気がしています。

こんな情けないことを申しますと、今にもあの天ぷら棒が飛んでくるようですが、でも、もし天ぷら棒でもう一度叩かれることができるのなら。もし、そうできるのでしたら……。

もう何年前になりますでしょうか。

十一月七日、忘れもいたしません。全日本コンクールでしたね。

おぼえてらっしゃいますか。暑い日も寒い日も、朝から晩まで一日も欠かさず練習をし続けたゴールです。

舞台の上でコチコチになっていた私たちに、ばかなことばかりいって、緊張感をほぐそうとしていらっしゃった先生。

その先生自身が、一番上がっていらっしゃいましたね。あの時、思いました。

やっぱり先生も人間なんだと。

練習中は怒鳴られたこと、叩かれたことしか、記憶にありません。でも、それ以外は、いつもいい親父さんでした。

だから、どんなに叱られてもすぐ忘れて、先生のところへ飛んでゆく私たちでした。

そうやって、毎日毎日、怒ったり叱ったりしながら、毎年毎年、この十一月を迎えられた

先生。先生にとっては、十一月という月が、気の落ち着くことのなかった月だったでしょう。

今お写真を拝見しておりますと、

「今年からは、ゆっくり休めるなあ」

と微笑んでいらっしゃるように思えます。

でも私たちは、決して休んでほしくなかったのです。もっともっと先生の怒鳴り声が聞きたかったのです。先生は、こうおっしゃったではありませんか。

「これからは、今までの罪ほろぼしに、みんなの結婚の世話をしてやろう。縁結びの神になってやろう」と。

まだまだ、先生のお世話にならなければならない教え子が、こんなにたくさんいるのですよ。私たち大人になったと自分では思っていても、先生にとっては、いつになっても子どもなのです。

そう、私たちは『心の親父さん』を失ってしまったのです。あまりにも早すぎるではありませんか。

申し上げたいことは、数えきれないくらいあります。

先生も、まだまだいいたいことがたくさんおありだったでしょう。でも、やつれた姿を

一度も見せないで、一瞬のうちに、私たちの目の前から姿をお隠しになった先生。
今はただ、天ぷら棒をふりあげた姿だけが、瞼の裏に浮かんでまいります。
先生には、このお姿が一番よく似合います。
これでいいのですよね、先生。あまりにも不出来な教え子ばかりで、きっと疲れ切ってしまったのでしょうね。
私たちはきっと、立派に生きてゆきます。見ていてください。
先生のお写真を見ておりますと、もう一つ私たちにいっておきたいことがおありになるように思えます。奥様のことですね。
どうぞご心配なく。先生が私たちの親父さんなら、当然奥様は、私たちのおふくろさんです。どうぞ安心してゆっくり休んでください。
そして最後に、今、私たち教え子、一人一人にできることは、胸を張って生きてゆける人間になることです。
さよならはいいたくありません。私たちの命の限り、私たちの心の中でいつまでも生きていてください。
得津先生ありがとう。

本当にありがとうございました。
私たちは先生の教え子であったことを最高の誇りに思っております。
得津先生、どうぞ安らかにお休みください。

昭和五十七年十一月七日

今津中学校吹奏楽部卒業生代表杉本智子

やがて焼香となった。三人の僧侶による読経の声にオーバーラップして、学生たちの演奏による『葬送行進曲』が流れ始めた。
長い長い焼香の列が続き、式は二時間半にも及んだ。その間、比紗子夫人は会葬者の一人一人に立礼していた。
立礼には夫人の配慮で、尚子とその娘、裕美と裕加が列に加えられていた。
いよいよ出棺の時となった。石川先生は迷っていた。少年たちが、そして多くの卒業生がラッパを持って集まっていた。そして全員の目が、

「あれをやりましょう」
と石川先生を見つめていた。
一人の少年が駆け寄って
「僕らは得津先生と約束したんや。石川先生、『軍艦マーチ』をやりましょう」
一瞬の戸惑いがあったが、指揮者・石川は決心した。
「よし、やるぞ。思い切り吹くんやぞ！」
少年たちは大きくうなずいてポジションにつく。
石川のタクトが振り降ろされた。
大音響でイントロがスタートした。
それを聴いたＯＢたちが我も我もと、ラッパを取り出して吹き始めた。
イガグリの現役少年たちから、四十がらみの卒業生まで、そしてコンクールでライバルとしてしのぎを削った他校の生徒までが加わって『軍艦マーチ』は、一層高らかに盛り上がった。
急造の大編成吹奏楽団はテントをはみだし、沿道にまでおよんだ。
楽器のないＯＢ部員は、遠く離れて吹く少年に石川先生のタクトをリレーした。

すべての人に容赦なく降り続く雨は、涙と溶けあって流れた。

勇壮に、誇らかに鳴り響く『軍艦マーチ』が、これほど哀しく、これほど無条件に涙を誘うものとは、参列者の誰もが思ってもみなかった。

この曲をやることに賛成しなかった人たちも、涙を拭おうとしなかった。

二千人の列の中を六人の教え子たちによって棺が運ばれた。

ブラスバンドの鬼として一本の道を歩んできた得津武史の、堂々たる天国へのパレードであった。

『軍艦マーチ』の大合奏の中に、私はその時確かに、得津氏の叫ぶ声を聞いた。

「吹きまくれ！吹きまくれ！　思い切り吹きまくれ！」

六甲の山並みが突然きらめいて、遠雷が一つ鳴り響いた。

完

〈カーテンコール〉

この物語にご登場願った方々や得津武史さんに所縁の深いみなさん方のカーテンコールです（敬称略）。

石川學（西宮市立今津中学校三代目吹奏楽部顧問）

昭和三十一年、私が中学校三年の春、髪の毛が黒くフサフサとした丸顔で体格のがっしりした人が朝礼台の上で挨拶をしました。

「私はこのたび、夙川小学校から転任してきた得津武史です。どうぞよろしく」

当時の吹奏楽部は、鈴木竹男先生（後の阪急少年音楽隊の隊長）がクラブの顧問をされていたので、最初の一年間、得津先生はほとんど練習場には顔を出されませんでした。

私自身、彼が音楽の先生だとは知らなかったように、部員たちも体育の先生か柔道部の

顧問だとばかり思っていたようです。

得津先生と初めて話をしたのは、私が鈴木先生に大阪音大の付属高校に入るためにはどんな勉強が必要なのかを相談に行った時でした。

「大阪音大だったら、得津先生の母校だから、彼に相談しなさい」

といわれて、恐る恐る音楽室へ行ったのを今でもおぼえています。

「何、音大へ行きたい?ピアノは弾けるのか、ソルフェージュは、楽典は、聴音は取れるのか」

とドスの効いた先生の声でまくし立てられ、どぎまぎしていると、いきなりあの太い指でピアノの鍵盤を叩いて、

「おい、この音は何の音や、何、これは、これは!」

と矢継ぎ早に聞かれました。

質問の意味さえわからず、オロオロとしている私にさらに追い討ちをかけるように

「おい、バイエルあるか、明日持ってこい、ピアノの練習じゃ」

で、二度びっくり。その時、あまりの恐ろしさに「バイエルって何ですか」と聞く勇気が私にはありませんでした。

なにしろ、当時私の家にはピアノさえなかったので、慌てて市内に一軒しかない楽器店へ行き「バイエル」という名の教則本を買って帰りました。

それから毎日、家ではみかん箱に紙の鍵盤図を張って練習を始め、学校では吹奏楽部の練習が終わってから、音楽室のおんぼろピアノを借りて夜遅くまで練習しました。

時々、得津先生の宿直の夜などにレッスンをしてもらいましたが、そのレッスンというのが

「なんやお前、まだでけへんのか練習が足らん、もっとしっかりやっとけ！」

の一言で、来る日も来る日も同じ言葉の繰り返しでした。

私は思うように動いてくれない自分の右手を左手で叩きながら、「もうピアノなんてどうでもいい、音大なんてクソくらえ」と思いながらも、毎日時間が来るとピアノに向かっていました。あの罵声が私の意識を完全に支配してしまったかのようでした。

試験がもうすぐだという冬の夜、私が音楽室で空腹と寒さに戦いながら練習をしていると、廊下をミシミシときしませながら近所のうどん屋のおっちゃんがキツネうどんを運んできました。

「得津先生がこれをあの哀れな苦学生に食べさせてやってくれ、ピアノが早う上手になる

ようにといっていましたよ」

火の気のないガランとした音楽室で食べた一杯のキツネうどんのなんとおいしかったことか。先生の心遣いのうれしさに身も心も温まりました。

練習中はとてつも無く厳しく恐ろしい先生でしたが、本当は私たちひとりひとりのことを考えて、指導してくださっているのだとわかり、自分も大人になったら、あのように自分に厳しい先生になろうと夢中で鍵盤を叩きました。

練習が終わって宿直室にいる得津先生に、

「失礼します。先程は、おうどんをありがとうございました」

と挨拶して帰ろうとしたら、宿直室の奥から

「おい、今日はなかなかうまく弾けていたやないか、うどんの効果はテキメンじゃのー」

という声が聞こえました。

同時に襖が開いて、

「はよう、帰れよ。おかあちゃんが心配して待っているでぇ」

と見送ってくれた先生の顔は真っ赤で、とろんとした目が笑っていました。

宿直室の時計が、その時午後十時を打っていました。

そして、昭和三十二年、私があこがれの音大付属高校に無事合格した時、先生に真っ先に報告に行きました。

「そうか、よかったな、おめでとう」

その一言だけでしたが、あの時と同じように目が笑っていました。

高校の三年間、私が一度も母校へ顔を出さなかったのは、一生懸命勉強して音楽についてのいろいろなことをおぼえ、早く得津先生のお役に立ちたいと考えていたからです。

私が音大に推薦入学が決まった夜、連絡があったのは先生の方からでした。

「おい、明日空いているか、学校へきてくれ、話がある」

なんの意味かわからないまま先生のもとに向かうと、

「もう、お前も大学生やし、後輩の面倒を見てやってもええやろ」

といわれ、やっと恩返しができると私は喜んで、先生の助手をお引き受けしたのです。

私が一年生の面倒を見るようになった頃から、現在の大阪市音楽団々長の木村吉宏さんにも指導と編曲で協力していただきました。その頃から今津中学校は飛ぶ鳥も落とす勢いで勝ち進み、全国にその名を知られるようになっていったのです。

「ワシはピアノしかできん、ラッパやクラリネットのことは何もわからんからお前に頼むで」

と我々のような学生の意見も真剣に受け止めて、それをすぐに実行してくれました。だからこそ我々もいろいろなことをさらに研究し、今津中学校の黄金時代を築こうとする得津先生のためにすこしでも貢献することができたのだと思います。

伊勢昌史（西宮市立今津中学校教諭、画家）

得津先生という人は、多分誰もが『純粋でやんちゃで大きな子どもみたいだ』とおっしゃると思います。

でも私にとって得津先生はかけがえのない良き先輩であり、教員仲間でした。

初めて今津中学でお会いした時、その厳つい風貌からはとても繊細な音楽を教える人のようには見えませんでした。

しかし、すぐに垣根を取ってくれたのは先生の方からでいつのまにか、「たんば、たんば」と公私共にかわいがってくれました。

私自身も先生のそばはとても居心地の良い場所で、妙な師弟関係の中であの独特の「得津ワールド」へ引き込まれていったのです。

私が今津中学に赴任して間もなくのこと。得津先生が急に丹波にある茅葺屋根の私の実家を見たいというのでお連れしたんです。

なのに、得津先生は何をするでもなく縁側で二、三時間昼寝をして

「ああ、ええ気持ちやった」

といって、さっさと帰ってしまわれました。

昼寝といえば、「寝る子は育つ」といいますが、先生は私のいる美術室でもよく昼寝をされていました。幸か不幸か美術室は音楽室の隣にあり得津先生はちゃっかりとここに専用の特注ベッドを作って寝に来るんです。そして、「よっぽどのことがない限り起こすなよ」というなり、いびきをかいていました。

そのくせ、私が宿直室で寝ているのを見つけると、耳元で生徒に起床ラッパを吹かせて、たたき起こすのです。しかも自分のことは棚に上げ「たんぱのイビキはすごいぞ」といって、板橋さんに録音までとらせ、子ども達と大笑いのネタにされてしまいました。

また、大の阪神ファンだった得津先生は、同じく阪神ファンで有名なラジオのパーソナリティー中村鋭一さんの番組を聞くために、わざわざ新しいラジオを買ったんです。

ところがある日そのラジオを持ってきて、

「たんば、お前にこれを安うで売ったる！」

というのでありがたくちょうだいしましたが、雑音だけしか聞こえない壊れたラジオでした。しかしそのラジオ、なぜか捨てられなくて今も持っています。

こんなこともありましたね。朝、登校してきた時、開口一番

「たんば、今晩うちでメシ喰うて帰れ」

そんな時は、必ず家で奥さんとけんかをしたあくる日でした。

悪いのは大抵先生の方だったし、案外気が小さくて一人で帰れないんですね。

それで仕方なく得津先生の家について行くと、必ず私を奥さんとの間に座らせる。奥さんも私がいては、さすがにけんかの続きというわけにもいかず、いつのまにか二人は仲直りするんですよ。

でもまた、自分の都合が悪くなると「たんば、たんば」ですからね。子供っぽいこと、この上ありません。それなのに憎めない。それは生徒たちもきっと同じことをいうでしょう。

得津先生の教え方は、暴力的だとか前時代的だとか批判は多いのですが、妙にいじけた敵対感情がなく、むしろ先生にごつんとやられるのは、肩をぽんと叩かれているのと同じくらいに親密感がわいてくるのです。それはやっぱり生徒たちを心からかわいがって、大

切に思っておられたからでしょうね。

あれだけ厳しい練習を一緒にして生まれた心の繋がりは、とても強かったんでしょう。ブラスバンド部に初めて女子が入部した時は、「女子の扱い方がわからん」といって私に聞きにこられたし、練習で夜遅くなった時は私や板橋くんなどに全員家まで送り届けるように頼まれました。

そんな子どもたちが卒業で旅立つのを見る先生の目は親以上に優しいものでした。

卒業式ではブラスバンド部の指揮を素人の私にさせて、自分は各クラスを回り、一人ひとりに

「何かあったらいつでも来いよ、ワシは学校にいるから」

と約束していました。

「こいつらの嫁さんと婿さんはワシが世話するんや」が口癖で、いつぞやのテレビのインタビューでは

「私は子どもがいないので、卒業する時は子どもひとり一人を抱きしめてやりたい気持ちになる。できるなら四十人（当時のクラブ員）全部養子にもらいたいくらいですわ」

とおっしゃっていました。

梅谷忠洋（昭和四十一年卒業生、フルーティスト、作・編曲家）

はっきりいって、少年時代に得津先生に出会えてなかったら、今の私はなかったでしょう。幸いにも十九歳で関西フィルの主席フルートの座に就くことができ、数多くのコンチェルトを演奏する傍ら、ちょっとしたひらめきで作った小林幸子の『思いで酒』がヒットして「演歌も書くクラシック音楽家」といわれるようになりました。

得津先生とのエピソードを話せばきりがありませんが、私が部員時代にはこんなことがありました。

「アレグロコンプリオ」とか音楽上の難しい解釈について質問したら、いつも「適当にやっとけ」という返事。仕方なく図書館で音楽辞典を広げて自分で勉強したものです。

おかげで先生も知らないむずかしい表現用語をたくさんおぼえることができましたけどね。さらに今中卒業後は私を呼び出し

「新入のチリ（低学年）の基礎訓練はお前にまかすぞ、ワシの天ぷら棒で思い切りしごけ！」

と代理指揮者を命じられたこともあります。

まあこんな調子で、得津先生は私『ウメチュー』を実にうまくお使いになったものです。頑固一徹に見える得津先生ですが、晩年は今中のサウンドを向上させることなら何でもする、という素直なところもありましたし、教え子の私にだって

「おい、チュウヨウ。これはどう振ったらええのや」

と聞きにこられたこともあるくらいです。

宇宿先生に指揮法を習うきっかけになったのも実は練習の時、よく得津先生に叩かれていた内村というユーフォニアム奏者がこんなことを言い出したからです。

「宇宿先生がやると吹けるのに、先生がやるとでけへん。たまには自分の頭を天ぷら棒でどついたらどうや」

それを聞いた得津先生は

「何を！」

と怒って、すばしっこく逃げる内村を追いかけましたが、次の日、あっさりと宇宿先生に指揮法を習いに行きたいと言い出したのです。

宇宿先生の指揮というのは、例えば「魔弾の射手」の序曲を演奏する場合、まるでダンプカーがシフトをローに入れるように、うんと力をためておいて、普通のフェルマータで

なく、棒の振り方で独特のフェルマータにするといったやり方でした。

得津先生はそれまでの自分の指揮にはない「ねばり」とか「ため」という細かいニュアンスの違いについて気づかれたようです。

得津先生は常にコンクールのことが頭にあり、あらゆる努力をして、生徒達に優勝の喜びを味合わせてやりたいと心から思っておられたようです。

私は今、日本人が共通規範のない『ぬるま湯のような民主主義』の中で、自信も勇気をも失っているように感じます。そんな事態を少しでも打開するために、私は現在、能力開発校『M&Uスクール』を開き人材育成と企業アドバイザーの活動を行っています。

これは明治の偉人、新渡戸稲造の「武士道」の精神と、得津先生から今中時代にしっかりと叩き込まれた音楽の基礎訓練や吹奏楽を通じて学んだ人間形成にもっとも必要な協調性、そして連帯責任という実地教育のたまものに他なりません。

板橋武靖（昭和三十四年卒業生・ＯＢ会代表）

私は幸せにも公私にわたってご指導いただき、天ぷら棒の洗礼も人一倍ちょうだいいたしました。卒業後も在学中と同じペースでお付き合いいただき、語りつくせないほどの思い出があります。

私的な話ですが、ご夫婦が冷戦状態になると、伊勢さんか私を必ずお宅へ呼び出して、直接会話をされないお二人の伝書鳩みたいな会話の伝令役を努めさせていただきました。

例えば、先生が塩鯖を一本買って来て

「おい、これ今晩食わしてくれ」

と私に渡されます。

私はそれを台所の奥さんに持って行き、

「これ今晩、食べたいそうです」

といって奥さんに渡すと、奥さんは

「焼くの、煮るの、どっち?」

と聞かれる。

私がまた先生に

「焼くか、煮るかどっちか、聞いてはります」

というと、

「あほ、塩鯖を煮てどうするねん」

私はまた奥さんに

「焼いてくれというてはります」

と伝える。

そうこうして食事をしている間に、二人の会話が戻るのを見計らって、そっと逃げるように失礼するのです。

まあ、夫婦けんかは他人から見れば「煮ても焼いても食えん」といいますが。こんなことはしょっちゅうでした。

もう一つは珍しい話ですが、はじめての敗戦だった仙台での全国大会の結果発表の後、旅館に帰ってから私はおそらく誰も見たことがないであろう得津先生の涙を見てしまいました。

「鬼の目にも涙」が光るほど、あのコンクールは悔しかったに違いありません。一曲三千回の練習を重ね、完璧な迄の仕上げ方をして臨むコンクールでしたが思わぬ苦杯を飲むこ

とになったのはよっぽどこたえたのでしょう。声を押し殺して泣いてはりました。
しかし先生はまたそれをバネにして、それまで以上に練習を重ね、栄光の奪回に努力されました。

脇川博允（昭和四十二年度卒業生）

もう五十歳を過ぎた私にとって今津中学校吹奏楽部での経験は、あたかも天体望遠鏡でのぞく遥かかなたの星座のようになってしまいました。しかし今でも得津先生だけは大きく輝く恒星のように見えます。私たち生徒は、みんなその周りを回っている惑星のようなものだったかもしれません。遠くからは全く見えませんが、思いをはせると先輩・同期・後輩のみなさんの顔も浮かんできます。
昭和四十一年の仙台大会が終わって三年生が去り、二年生・一年生が翌年に向けて新しいチームを組んで練習を始めた頃、得津先生が放課後の音楽室で練習中に私たち部員にこういったのを今でもおぼえています。
「おい、お前ら。今津の演奏は世間で何と言われとるか知っとるか？技巧ばかりに走って

心がない。情緒がないといわれとるんやぞ。」

得津先生のその時の困ったような顔が印象的でした。私たちはひたすら、いい音を出し音程を合わせ先生の指揮に合わせて譜面通りに演奏することを目指していました。その上、情緒を出せといわれてもいったい、どうすればよいのやら。途方にくれたものです。

昨年（二〇〇三年）十一月に今津中吹奏楽部創部50周年の記念式典があると知って、急に当時が懐かしくなり昔の写真を引っ張り出して眺めている時、はたと気がつきました。なーんだ、こんなことだったのかと。

それは当時、得津先生が頭を悩まし我々生徒も途方にくれた心を表現する問題解決方法です。二年連続二位になった時の大会審査員の採点表写真や印刷物が残っていました。

それを見ると課題曲は二年とも最高点を獲得していました。

昭和四十一年（今津：五四三・三豊島十中：五四〇・四富田中：五一三・八）。昭和四十二年（今津：五五八・六出雲一中：五五〇・九豊島十中：五四二・五）。

しかし自由曲の評価は昭和四十一年（豊島十中：二四五・七今津：二三八・二富田中：二三一・三）。昭和四十二年（出雲一中：二五四・一豊島十中：二四八・一今津：二四五・一）となっています。

つまり課題曲という同じ土俵では両年とも評価されており、依然として得津先生の指導方法は間違っていなかったということです。問題は自由曲の選曲が一部の審査員にうけなかっただけなのです。

昭和四十一年の豊島十中・ワーグナーの「エルザの大聖堂への行進」に対してリストの「ハンガリアンラプソディー三番」。昭和四十二年の出雲一中、バッハの「トッカータとフーガ」に対してパレの「序曲リシルド」。

もちろん豊島十中や出雲一中の演奏を後年CDで聴きましたが、すばらしい演奏でした。しかし当時、自信喪失されていたかもしれない得津先生に今なら「先生。来年は我々もドイツ人作曲家の曲やりましょう。一部の審査員にドイツ音楽信奉者がいるみたいやから」と大人の悪知恵を言えるのですが当時、六年連続優勝かなわず、しばらく全員脱力状態だったので来年こそ、もっと練習して優勝するぞって考えていただけでした。

一旦方針が決まると、もう後は得津先生のいつもの練習です。もう感情を込めてなんて無かったと思います。所詮、まだ子どもの中学生に人生の喜怒哀楽を表現することを求めること自体がどうかしています。それらしく表現することが関の山ですが、ひねこびた演奏には魅力がありません。

今この歳になってはっきり言えますが、心や情緒・感情等をうまく伝える演奏、いや演奏だけでなく歌や会話・文章等を本当に表現し共感を得るには、伝える人が実際に喜びや哀しみ、誇りや苦しみ等を体験してはじめて可能となるのだということを社会で体験を重ねるにつれ知るようになりました。机上の空論ともいえる当時の批判に対して得津先生のやるせない思いがしのばれます。

得津先生というと世間では鬼のような怖い先生というイメージが定着しています。確かに練習はスパルタ特訓方式で厳しかったですが、何か一本、筋の通ったところがある先生でした。まだ初夏の頃、場所は忘れましたが、あるコンサートで演奏前に舞台上で各楽器紹介があり各パートの三年生がそれぞれ音を出してみせたことがありました。私はオーボエだったので、開演前に先生から受け狙いで、「おい、お前は屋台のラーメン屋のチャルメラ、知っとるやろ。楽器紹介のとき、それをやれ。」と言われました。

オーボエは私の年度から初めて今津中に導入された楽器で、今なら悪乗りして「舞台で屋台引いて吹きまっせ。」と言うところですが、当時は何か自分のやっている楽器を馬鹿にされたようで不満たらたらでした。結局、開演して自分の番になった時、チャルメラのメロディー吹かずに他の楽器と同じように音階を演奏しました。

このときが得津先生の指示に反抗した最初にして最後の経験ですが、何のお咎めも無しでした。

得津先生は、行け行けドンドン親爺みたいなところもありましたが、意外と生徒一人々々の気持ちを細やかに察してフォローしてくれる先生でもありました。だからあれだけ厳しくても、みんな生徒がついていったわけです。

昨年（二〇〇三年）十一月の吹奏楽部五十周年記念コンサート前の楽屋で三十五年ぶりに昔の懐かしい先輩・同期・後輩のお仲間に再会するまで、得津先生のもとで過ごした三年間をまるっきり失念していましたが、当時のお仲間に再会した途端、いろいろなことが頭の中に蘇ってきました。ただ残念なのは一番会いたかった得津先生がもう二十年あまり前に、この世を去られていたことです。

あのドスのきいた声と風貌。今頃ご健在であれば、どんな爺さんになっておられたか。お会いできなかったのが、かえすがえすも残念です。

それぞれ実際の演奏会場で聴いていないので正確ではないのですが、一音楽ファンの耳で聴く限り、得津先生の後継者である石川先生の時代の今津中がクリスタルなサウンド、当時の出雲一中がクリアーでシャープなサウンド、また豊島十中がキラキラ輝くようなサ

ウンドの印象を受けるのですが、得津先生の晩年までのサウンドは、一貫してマイルドで重厚なサウンドの印象を受けます。これが音の個性というものでしょうか。

本物の音楽は流行に左右されることはありません。みんな何らかのオリジナリティーがあるものです。今となっては得津先生の目指した音作りによる演奏を生で聴けないのがさびしい限りです。

昔、今津中の音楽室の壁にかかっていて、練習中よく眺めていた武者小路実篤の「この道以外に我を生かす道無し、我、この道を行く」という額の言葉を久しぶりに噛み締めています。

一九八二年十二月十二日の追悼演奏会に寄せられたメッセージから

秋山紀夫（元・全日本吹奏楽連盟副理事長）

「戦後の中学校吹奏楽の巨星！」得津先生は日本のスクールバンドの大きな目標であり機関車のような人でした。

永長信一（元・全日本吹奏楽連盟副理事長）

先生！これからの関西のそして全日本のバンドの響きをいつまでも天国から聞いていてください。

酒井正幸（全日本吹奏楽連盟副理事長／元・豊島区立第十中学校吹奏楽部顧問）

私にとって得津先生は師匠でありよきライバルでした。まだ新幹線のない三十年代、東京を終列車で発って翌朝大阪着、一刻も早くと今津の練習を見学し、その夜は先生のマンションで一泊させていただくことも度々でした。

早朝、得津先生の新居のマンションで、缶ビールを片手に、窓の外を伊丹空港から飛び立つ飛行機を眺めながら

「酒井さんハワイはええなー。生徒をハワイに連れて行って、軍艦マーチや！」

と目を輝かせておられた姿は今でも忘れることができません。

また、東京大会が近づくと私の送った練習テープを聞いて

「今年の豊島は心配やなー」
と毎日定期便のように電話があるかと思うと、突然
「明日行くで！」
と上京して、幾度となく指導してくれました。
昭和四十九年に共に連続金賞受賞、北海道大会での招待記念演奏、そして終演後に月明かりの中で撮った今津、豊島の合同写真は今でも私の宝です。

坪島照信（元・富商業高等学校吹奏楽部顧問）

日本のスクールバンドを築きあげてこられた得津先生。深く尊敬していました。お写真を見ると、あのいつもの声で話しかけてこられるようで、ただ涙にむせるのです。
日本一の今津中学校とのお付き合いは随分ありましたが、中でも強烈な思い出の一つは、私の富山商業高校野球部・甲子園出場の一コマです。
「今津ホテル」と我々が呼びました体育館での寝泊りです。ベスト八まで二度も行ったので、大変お世話になりました。
得津先生陣頭指揮で、あの体育館が見事な大合宿所」に変身し、生徒さんの家から毛布

二枚とまくらが一つ、学校中のバケツを集めて、その中に蚊取り線香を入れる、保護者の方々の心厚い差し入れは、本当にその時、富山商業高校吹奏楽部一同は、感激して今でもその話題は消えません。

山本誘（元・東海吹奏楽連盟理事長）

昭和三十四年からよき友人、よきライバルとしてやってきて楽しかった思い出はいっぱいあります。そして、厳しさで長年一貫した指導をしてきた得津先生。まだまだこれからだったのに…無念です。

キダ・タロー〈作曲家〉

得津先生！聴こえていますか？
彼らの演奏。
涙もろいくせにテレくさがりの先生。
「何をやっとるんや、お前ら！バラバラやないヶ。死んでも死にきれんわ」
と言いながらも、きっと天国でうれし涙を流してはるんでしょうね。

（故）辻井市太郎（元・大阪市音楽団団長）

貴君の急逝は、日本の吹奏楽界に大きな衝撃と悲しみをもたらしました。

「新しい出発」をされたばかりの貴君と、こんなにも早く永遠の別れをせねばならないとは、何という運命の悪戯でありましょうか。こうしている時も、貴君からあの調子で電話がかかってくるような気がしてなりません。

貴君の吹奏楽に対する情熱は、その独特のスパルタ式訓練法に表れるとおり、まさに他の追随を許さない、激しいものがありました。その情熱は、これまでの栄冠の数々として残り、今日貴君を慕ってやまない教え子達の目に、今なお宿っています。

貴君が倒れる直前、今度の西宮中学生ハワイ遠征のための練習で、最後に指揮した曲、貴君のこよなく愛した「軍艦行進曲」を貴君の教え子達と共に演奏し、捧げたいと思います。

（故）朝比奈隆（元・大阪フィルハーモニー交響楽団音楽総監督）

私の身辺に大きな穴が開いたような気持ちです。

思えば昭和十年頃から半世紀を越える長い間の奇縁といっていい程のかかわり合いでし

た。元気で学校中に渦を巻き起こしていた「やんちゃ」な生徒でしたが、ピアノもよく勉強して卒業演奏会では、メンデルスゾーンの協奏曲を立派に弾いて我々を驚かせ、戦時中は兵役、戦後は進駐軍のクラブなどでバンドを抱えて大車輪の奮闘でした。

それが今津中学に奉職して、吹奏楽指導を受け持つようになると、人が変わったように、吹奏楽一筋に首から突っ込んで行った君。手荒な訓練で日本中に鳴り響いても不思議なことに、生ぬるい戦後教育の現場で問題が起きるどころか、子どもたちにもＰＴＡのお母さん達にもなつかれ、喜ばれて、当時教育委員に就任した私も「これが教育の原点なのだ」と思わせられたものです。

志した道を思い残すところなくやり遂げて、忽然と去った君は子どもたち、そして今は成長して社会に出ている卒業生、そして私たちみんなに忘れられない思い出を残してくれました。西宮の、関西の、日本中での名物男のあまりにも早い死が痛々しい限りです。

（故）竹本義弘（元・関西吹奏楽連盟理事長）

永年、県、関西連盟でご一緒するなかで、今津中学を率いて前人未踏の金字塔を樹立され、素晴らしい業績を残されました。

今にして思えば精魂をかたむけつくされた壮烈な最後だったと思います。
必ずや先生の吹奏楽に寄せられて情熱は関西連盟をはじめ、多くの役員の胸のすみずみにまで生き続け、受け継がれるものと確信いたします。

（故）正門榮一（元・兵庫県吹奏楽連盟理事）

特徴のある声、豪快な笑い顔、ユーモリストで人情家。得津語録を連発し、先生のいくところ人間得津の面目躍如で笑いの渦でした。
先生の数々の業績、教訓を胸に更なる結束と、吹奏楽発展のための努力をする覚悟です。

今西永兒（元・西宮市吹奏楽連盟理事長）

〝得津サウンド〟と呼ばれた、すばらしい吹奏楽を先生は生み出されました。
楽器を初めて手にした中学生楽団を、見事に日本一の座に育て上げ、生徒たちと音楽を通じて、生きる喜びを分かち合ってこられました。
今津中学を退職された後、西宮のみならず、全国各地の吹奏楽団の求めに応じて東奔西走の日々を送られ〝得津サウンド〟の神髄が全国の吹奏楽団員の心にまかれたともいえる

でしょう。

今や〝得津サウンド〟は西宮だけのものではなく、全国の吹奏楽団員のものになっています。それ故に、私たちはさらに前進しなければなりません。

得津先生！

私たちは〝得津サウンド〟の伝道師となることを約束いたします。

どうぞ天国からあのテンプラ棒で私達に進むべき方向を示してください。

得津真也（実弟）

兄とは十一歳も年が違うので、磯遊びや水泳を一緒にした思い出のほかに、少年時代の記憶があまりません。母がやんちゃな兄のことをこぼしているのは良く聞きました。

母は小学校の教師をしていたしっかり者で厳しいがやさしく字が上手で習字の先生から「あなたには教える事はない」

と言われたほどです。

お香を炊いて巻き紙に墨で字を書きたいと、よく源氏物語の世界を夢見るようなことを言っていました。

三味線が好きで、家でよく弾いていたのを思い出します。
父は和歌山で撚り糸工場を営んでいた、いわゆる職人気質の人間で音楽の趣味は一切なかったようです。
しかし、戦争で工場は焼失し、戦後の混乱期に病死しました。葬式も出来なかった事を母は、とても気にしていて
「私が死んでも葬儀は出さないで、お父さんに悪いから」
と言っていました。
その母が亡くなった時、シャイな兄が皆の前で大声で号泣したのです。
兄は反体制的なところがあり、軍隊に入った時、大卒は幹部候補生になる資格が得られたのに、士官になるのを嫌がってずっと伍長止まりの平の兵隊で通しました。
私が後に中学校の教頭になった時、兄は
「そんな堅苦しいものにならず、もっと自由に好きな事をしろ」
といったくせに、私が昇進して校長になった時は
「ワシの弟が校長になりよった」
と自慢していたらしいです。

兄は亡くなる前、頻繁に頭痛に悩まされていたと聞いています。医者をしていた夙川の従兄弟が再三、精密検査を受けるように勧めたのに、頑として受け入れなかったのです。

兄は病院が怖くて、注射が大の苦手だったからです。板橋くんの話だと毎日セデスの錠剤をガリガリ食べるように飲んでいたようです。

兄の教え子だった病院の看護婦がそんなとき

「一度でも病院へ来てくれていたら助かったかも知れない」

と言っていました。

兄の趣味は釣りで、友だちのセスナで隠岐の島まで遠征したりしていました。若いときは野球もしていたそうです。阪神タイガースのファンで缶ビールを飲みながらテレビ観戦、アテには「焼きギンナン」をポロポロやっていたそうです。

兄はしょっちゅう比紗子さんと口げんかをしていましたが、結局大きな甘えた坊主で比紗子さんの掌の上で転がされていたようなものです。また本人はそれが幸せやったのと違いますか。

兄は自分自身で努力をしたからでもありますが、短い人生でやりたいことはすべてやり遂げたのではないでしょうか。それができたのはいつもすばらしい人たちに囲まれ、いい

ブレーンがたくさん居たからでしょうね。

兄は、ひょっとしたら一番良い時に亡くなったのかも知れないと考える事もあります。

十川尚子（得津武史の長女）

私がもし男の子として生まれてきたら、私と父の関係はもっと違っていたかも知れません。父のお得意のゲンコツをたくさんもらったでしょうし、近所のガキ大将に勝つけんかのやり方も教えてもらえたでしょう。

そして、私自身が父と母との間にもっと違った立ち方が出来たのかもしれません。

父は本質的に女の子の扱い方が苦手で、私を妙に照れくさがっていたような気がします。どちらかというと甘えたがりの私は父と母の手にぶら下がって歩いたり、父にだっこやおんぶをされたりするのが夢でした。でもそういうことをしてもらった記憶は一度もありません。

そんな父でしたが、私の事はとても気になるらしく、小さい頃のピアノの発表会には必ず来てくれました。でも会場に姿を見せるのは、いつも私の出番が終わってから。たぶん演奏は場外で聞いていたのでしょうね。

私が父と気兼ねなく話ができるようになったのは、むしろ母と離婚した後からでした。

でも話すのは面と向かってではなく、ほとんど電話でした。
自分を誰とも言わず、いきなり「あんなあー」から話し始めるのです。とりとめもない用件を話す傍ら私たちの暮らしの様子をそれとなく確認していたようです。
そんな父が居なくなって早くも二十年以上経ちました。同じ音楽の道を歩む私たちにとって、もし父がまだ健在だったら音楽の事や人生の事などをいっぱい教えてもらえたのにと最近つくづく感じます。
同じＤＮＡを引き継いだ私と私の二人の娘にとって、父、得津武史はこの上もなく大きな存在であり、目標であり、誇りであると思っています。

十川奈都子（得津武史の先妻）

尚子が申し上げておりますように、私たちが別れて暮らす事になってからの方が、どちらかと言うと素直に心を開いて話ができるようになりました。
結婚当初は戦時中で日本が鬼畜米英と戦う厳しさが、あの人にも乗り移っているかのように、とても怖い存在で新婚なのに優しい言葉など、かけられたおぼえはありません。
女は一度嫁いだら夫に絶対服従しなければならないと、言い含められてお嫁に行った時

代ですから、どんなに怒られても口応えは許されないものと思っていました。

後に比紗子さんと昔話をしていたら、

「私なら言われたら言い返すわ。殴られたら殴り返せばいい、そうすると以外にあの人は大人しくなるのよ」

と笑っておられました。

その時、初めて私の得津武史操縦法が根本的に間違っていた事に気づきました。

こんな話もあります。ある日電話がかかってきて、

「あのなー、離婚調停の時あんたが雇った弁護士、彼を紹介してくれよ」

私がキョトンとしていると、

「違う、違う、オレんとこの話やないねん、仲人をしてやった生徒夫婦が困っとるねん。あの時の弁護士、なかなかしっかりしとったやないか」

かわいい生徒のためには、結婚から離婚迄とことん面倒を見る人でした。

話は前後しますが、音楽上の接点は二人ともクラシック音楽をやっていたにもかかわらず、実際は戦後の進駐軍キャンプでの演奏でした。あの人はジャズ・バンドでしたが、チェンジバンドとしてタンゴ・バンドが必要になり、強引に私が引っ張り込まれたのです。

クラシック以外の音楽は邪道だと思っていた私ですが、タンゴやラテン音楽の楽しさにみるみる引き込まれ、まるで目からうろこが落ちる思いでした。

クラシックの奏法をきちんとやってきたピアニストにとって、ポピュラーや歌謡曲を演奏することはそう難しいものではなかったからです。

そして、私たちのバンドはキャンプだけではなく、ラジオや劇場への出演に発展して、「ピアノの得津奈津子」は週七本のレギュラー番組や地方への演奏旅行にもでかけるほどになったのです。

絶対服従の女房がいつのまにか亭主より名前が売れるのは誰だって愉快な事ではなかったと思います。気がついたときは二人の間にとても大きな溝ができていました。

今思う事は、得津武史流のものの考え方や表現をしっかり私が理解できないでいた事が悔やまれます。あの人は物事をストレートにではなく、ねじまげて表現する癖があるんです。その独特のニュアンスをきちんと解読する能力に私は欠けていたのだと思います。

得津比紗子（得津武史夫人）

「おーい、子どもらになんか食わしたってくれ！」

得津は休みにはよく子どもを家に呼んできて食事をさせていました。私の留守中にも来るのですが、うちにあるいろんなお菓子を探し出しては食べさせていたようです。

あるとき、私が大事にとっておいたエーデルワイスの高級菓子がみんな無くなっていたので、私は大人げないとは思いつつ

「あれは子どもが食べるものじゃありません！」

と言ってしまい、けんかになったこともあります。

子どもにおつかいをさせて、

「お礼に何かを食べさせてやってくれ」

というパターンも多かったですね。

板橋さんもうちに来てよく食事をしていましたが、そんな時は私と口げんかをした後とか、自分が不利な状況になった時の照れ隠しのためなのです。

とにかく、得津はみんなと賑やかに食事をするのが大好きで、いつ誰が何人来るか予測できない家でした。だから私は毎日夕食を二人分というわけにはいかず、必ず余計に作っておかなければならなかったのです。

「体罰がなつかしい思い出になるなんて…」

そんなことがあるんですね。

今津中学の吹奏楽部員は、中学になってから初めて楽器を触る子どもがほとんどでした。得津は音楽的に人より格別優れたものを持っているとは思いませんが、楽譜も読めないし、楽器に触った事もない子供たちをたった半年でコンクールに出して優勝させるのはやっぱりすごい能力だと思います。

子どもたち自身も自分ひとりの力ではできないけれど、みんなの力を寄せ集めればコンクールに優勝することができるのです。そして人間はなんでもやればできる、人が力を合わすとすばらしいことができるという、人生で最も大切なことを学んだと思います。

だからこそ得津に殴られたことを、懐かしがるのかもしれません。ずいぶん無茶なことをされたのにね。

卒業生はいまでもよく私を訪ねてきてくれます。みんなが集まると必ず得津に叱られたことが話題になります。私は常々

「子どもを感情に任せて怒るのは最低だ」

と言ってきました。

そのせいか、彼らには恨みがましさは全くなく、むしろ懐かしがっています。それをみ

ているとつくづく「この人たちはいい人だ」と思ってしまいます。彼らは得津と過ごした時代が人生で一番かけがえのないものだと思ってくれているんです。

当時の親たちも彼の体罰について深い理解がありました。

今は子どもも親もダメ。特に親に問題があるような気がします。ちょっと叩かれても文句を言いにきます。今の子供は親からも、先生からも叱られないので、たまに注意されると逆恨みするのです。

得津が今の時代に生きていたら間違いなく、そんな子をひっぱたいて、すぐにクビになるでしょう。

得津のやったことは、あの時代に、あの子供たちと、あの今津という所だけに起きた、幻のような出来事なんですよ、きっと。

丸谷明夫（大阪府立淀川工業高校）

カーテンコールの最後が僕ですか。そういえば、ご葬儀の止め焼香も僕でしたね。

ともかく何時出来るかと思っていた、得津先生の本がようやく完成して喜んでます。

ご存命なら一番に電話がかかってきたかも知れません。

知る人も多いんですが、得津さんは『電話魔』でして、お閑なときは早朝から今津中学の電話機の前に住所録をドンと置いて、あらゆるところへ電話をかけまくるのです。（ここだけの話、得津さんが今中を退職してから電話代が半分になったとかって聞いてます）

私が前夜遅くなったので、仮病をつかったりして電話に出ないでいると、西宮市の教育委員長の名前を騙って掛けてくるんですよ。慌てて受話器をとると、けろっとして『ワシや！』からはじまって、こちらの状況におかまいなく用件を一方的にしゃべりまくる。

この本にも出てくる昭和52年の大会での話ですが、

「おい、今年はもうお江戸の宿はとったか？」と尋ねられた。私ももうそろそろ予約しないと、と考えていたのですが、

「まだとってないのか、もう遅いわ。今年はもうドッコも空いてないぞ」

「えー、それは困ったな」と私がいうと、

『世の中には親切な男がおるもんじゃ、ちゃんと練習のできる宴会場つきのホテルをお前の分も一緒に予約しといてくれたやつがおるんじゃ』

私がきょとんとしていると、

「その親切な男というのは、このワシじゃ、感謝せいよ」ときた。

あの対面リハーサルのアイデアを思いついたと同時に、電話魔の面目躍如、強引にホテルまで予約していたのです。

そして、その年のコンクールの結果は今中が予定通り金賞をとり、ウチはなんと銅賞に泣いたのです。しかも後日審査員から『君たち、たまには今津中学の演奏を聞いて研究てみたらどうだ』と言われた。

『聞くどころか一緒に練習したわい！』と怒鳴ってやりたかった。

得津さんの思惑通り、今中の子供たちはわれわれの演奏を聞いて良いところはすぐにしっかり吸収し、悪いところは自分たちの自信のタネにしよったんですね。得津さんはおそらくそんな事は計算のうえで、この合同練習を画策したんでしょう。前年銅賞で落ち込んでいた彼らは、このコンクールであらゆる手をつくしてでも勝ちたかったのでしょう。闘争心をむきだしにして恐ろしいほどの執念を燃やしてました。そして今津は見事に返り咲いたのです。

思えば私はあの人と人生の一番良いときにめぐりあったような気がします。いろんな事を教わりましたが、中学と高校という関係も却って良かったのかも知れません。

淀校が最初にコンクールに出た時は銀賞でした。得津さんは「最初は銀の方がええ、いきなり『金』取るとチョーシにのって、空中分解するぞ。来年こそ金賞やという目標を与えた方がええのや」

「子供達をむりやり教え込むな、本人達に自然に音楽を好きにならせることが良い演奏をする原動力になるぞ」と教えられました。

俵万智の短歌に「親は子を育てて来たというけれど勝手に赤い畑のトマト」というのがあります。子供達をむりやり育てるとつぶれてしまう。子供達は自然に得たものしか覚えない。

自然に覚えたものを土台にして勝手に大きく育っていくのです。

得津さんも教えよう、育てようとした訳でなく、自分をさらけ出して勝手にすべてを吸収させた。指導者としては、そんな開き直りが出来るか出来ないかで勝負がきまると思います。

子供に対しては、きまりきった教え方や、計算された受け狙いは通用しない。悪いときは本気で叱る、良いときは褒める。何事も自然体でないと生徒たちはついてこないとおもいます。

だから先生と言う仕事は、自分のもっている全人格が左右するする仕事なのでしょう。

今は得津さんの時代のように簡単にぶん殴れる時代ではありませんが、本気で叱り、本気で褒めればぶん殴るのと同じ効果があると信じます。

そして音楽は演奏している子供達より、教えたり指揮している本人が心から楽しむことが一番大切じゃないでしょうか、そうしないと聞いている人も楽しませたり、感動させたりはできません。

この本の著者と同じように、私もよく夢の中で得津さんと話をします。

コンクールであわてて家を出ようとしたら、彼が屋根の上から「最後の音、振りわすれるな！」とか「ワシがしっかり聞いとるぞ！」とか言われます。

そんな得津先生は、やはり私にとってかけがえのない師匠であり、大きな目標だと思っています。

もし私が得津さんの一番血気盛んな時代にめぐり会っていなかったら、今の僕はどうなっていたのでしょう。

得津先生、これからも吹奏楽の道を歩む私たちを、高いところからしっかりと見守っていてください。

《エピローグ》

著者の独り言

筆を置く前に、この物語を書きたいと思った、筆者自身の無駄話をお許し願いたい。

私は京都市中京区の町医者の三男坊として生まれた。小学生だった戦時中、日本中にB―29からばらまかれる爆弾や空襲の被害を映画館のニュースで見た記憶しかない。アメリカ軍が京都に歴史的文化遺産としての価値観を持っていなければ、私はどうなっていたか分からない。大阪や神戸など近隣の都市には申し訳ないほどアメリカに優遇された京都人は空襲警報のサイレンを聞く事にそれほど恐怖感をもたず、小学生にとっては授業が中止されて早く帰宅できる妙な嬉しさもあった。滅多に砲撃も爆撃もしないでやってくるロッキードやグラマンに向かって、防空壕からこうもり傘を機関銃に見立てた戦争ごっこをやったりしたものだ。

やがて、終戦になり、あの鬼畜米英と教えられ遠巻きにしていたアメリカ兵は、怖いど

ころか、ジープからチョコレートやガムを投げてくれる、あこがれの存在となった。

育ち盛りのわれわれにとって当時最も深刻な問題は飢餓感だった。やたらと腹が減っていて、食べられるものは何でも食べた。大豆油を搾ったあとの「豆かす」、サツマイモの蔓、トウモロコシのパン、原っぱのはこべの葉まで食べた。

そんな時、進駐軍の救援物資として配給されたコーンビーフの缶詰の味は忘れられない。そして、胃袋だけでなく、干涸びた心も潤してくれたのは、ＦＥＮ（Far East Network）という進駐軍放送だった。

私はラジオに耳をすりつけ、意味の分からない歌をカタカナで書き取って、まる覚えした。ダイナ・ショア、ドリス・デイ、ナット・キング・コール、ベニー・グッドマン。そしてテディー・ウイルソンの軽妙なピアノサウンドは父親が遺した古いSPレコードには無い魅力にあふれていた。

ピアノレッスン

我が家には東京音大生の姉が弾くアップライト・ピアノがあり、それでジャズをいたずら弾きし始めた私を姉が見かねて、ピアノの先生を紹介してくれた。

「そんなに音楽が好きなら，将来どんな音楽をやるにしても基礎となるピアノだけはしっかりやりなさい」と言われて、死ぬほど退屈な「バイエル」や「ハノン」を弾き始めたが、この種のメロディーはすぐに覚えてしまう私の「特技」が災いし、ろくに譜面を見ないで弾いたり、適当に作曲してしまったりで、いつも私の右手は先生から竹の定規のお仕置きを受けた。それは結構痛かった。

得津先生に天ぷら棒で殴られた痛さがどんなだったかは解らないが、意気地なしの私はその辛さを乗りこえることができず、ピアノが旨く弾けない理由を生まれつき極端に短い小指のせいにしてしまった。

そんな私とは対照的に、姉は6歳からピアノをきちんと習い続け、しかも女学校時代は水泳選手としても活躍するというマルチな才能とガッツをもっていた。

姉が東京音大を卒業してコンサートピアニストとしての活動を始めたある日、奇しくも得津武史の軍隊時代に部下であったという、井口基成先生が来宅されて、姉に『ベートーベンの熱情ソナタ』をレッスンされた事がある。

私はその光景を部屋の隅っこで見学したのだが、我が家のアップライト・ピアノを大柄

の井口先生が演奏されると、それはまるで小さな下駄箱のように見え、ぐらぐらと揺れた。

始めて目前にする井口先生の『熱情ソナタ』は嵐のような激しさと、心に滲みるような繊細さがあり、少年の私にとっては感動というよりもむしろ驚愕の体験となった。

それ以来、到底弾きこなす事はできないであろうピアノという楽器に恐れをなしてしまった。

楽器をマスターする途上で誰もが体験する辛さや苦しみを乗りこえないと、楽器というものは、そう簡単に弾き手に音楽の歓びを与えてくれるものではない。

生涯にわたって楽器と相愛の関係を保つには、人間関係と同じように、相手を理解する辛抱強い努力が必要なのかもしれない。

得津さんの口癖だが、「音楽を一生聴くだけで終わるか、演奏も楽しむかは人生を左右するくらいの違いがある」と私も思う。

もしあの難関を歯をくいしばって乗りこえていたら、そしてもしも基本的なピアノ演奏をマスターできていたら、おそらく私の人生は変わっていただろう。

今まさにそれを痛感している。

父の遺したSPレコード

父は医者の不養生というべきか、急性肺炎で私が3歳のとき他界したが、軽いクラシックや、欧米のダンス音楽のSPレコードをたくさん遺してくれた。

幼少時代の私は無心にそのレコードと蓄音機を玩具にして育ち、レーベルに書かれた横文字が読めなくても、そのレコードのメロディーを口にして大人たちを驚かせた。

この特技は中学時代、ダンスパーティーのレコードボーイに雇われて重宝がられた。フォックストロット、タンゴ、ワルツ、クイックステップ、パソドーブルなどを間違わず順番にかけ、どんな曲を皆が好んで踊るかも観察した。

私のかけるレコードでみんなが一斉に踊りはじめるのを物陰から見るのがとても楽しかった。

メロディーを覚える特技があったのは、音楽を聴くとすぐにその音楽の持つ喜怒哀楽の情感やその曲想の世界に入り込み、勝手なストーリーを夢想する。例えばガブリエル・マリーの『金婚式』は、おめでたい楽曲である事を知らず、一人の老人が暗い小径を寂しく、とぼとぼ歩いて行く姿を連想したり、勝手なストーリーを結びつけて記憶した。後にこうした性癖は映像に音楽をつける選曲の仕事のために大いに役立った。

夢見る映画少年

「虹を掴む男」というコメディータッチのハリウッド映画が戦後まもなく公開された。ダニー・ケイがウォルター・ミティという出版社の若いエディターを演じたのだが、彼には妄想癖があり、白昼に何度も夢の世界へ遊泳する。エディターというクリエイティブな仕事のせいか、会議中であろうが、車の運転中であろうが、自分が主役となるドラマの世界に突如入り込んでしまう。ある時は荒れ狂う海と戦って舵をとる船長であり、またある時は瀕死の患者を手術する外科医であったりするが、その夢は「こら！また夢をみてるナ！」という社長のどなり声で現実にひきもどされる。

母親に「誰かにそっくり！」とからかわれたこの映画「虹を掴む男」を観たのは高校生時代。私の白昼夢症候群は少年時代から治らずに居た。

「また、ぼーっと夢ばっかり見て！」と叱られるのは大概きのう見た映画を頭で中でプレーバックしたり、非現実的な事が想像の世界で繰り広げられているときだった。

これが授業中でも起こるものだから、嫌いな学科は極端に劣等生だったが、絵を描いたり、音楽の時間は得意だった。

そんな私だったから、父親のあとを継がせたい悲願をもっていた母親をひどく悲しませていたのかも知れない。

それとは知らず高校生の私は、音楽もさることながら今度は「映画の世界」に向かって暴走していた。

学校が終わるとまず近くの小さな映画館でアルバイト。フィルム運びや、看板描き、時には映写技師までやる小器用な才能を発揮した。映画館にアルバイトを求めたのは、あの薄暗い空間でカチャカチャと廻る映写機の機械音と、光芒が支配する別世界に身を置く事の快感がたまらなかった。もうひとつの現実的な理由はあらゆる映画館に入れる「業務関係者証」という印篭のようなパスが使えたからである。

仕事が終わると京極の映画館街へまっしぐら、話題作は勿論、B級、C級まで雑誌「映画の友」を片手にむさぼるように見た。

『オーケストラの少女』『アメリカ交響楽』テクニカラー総天然色時代になって『パリのアメリカ人』『雨に歌えば』ジーン・ケリー、フレッド・アステアなどの音楽映画に胸をときめかせたが、『我らの生涯最良の年』や『打撃王』などに主演したテレサ・ライトの愁いを含んだ可憐さにも魅せられた。多分、初恋かも知れない。

映画と共に過ごした高校時代から大学へ進学と共に、アルバイトは更に拡大し趣味を兼ねた流行のハワイアンバンドに入ってベースを弾いた。プロの音楽家を放念した私は手当り次第にいろんな楽器に挑戦して、アマチュアに毛の生えた程度の演奏が出来るようになり、たまにプロのジャズバンドからエキストラの仕事をもらって進駐軍キャンプのステージにも上がることもあった。今から思えば待遇もさることながら、それは夢のような体験だった。

この実体験が得津さんの進駐軍バンド時代のエピソードを書くのに大いに役立った。

そんな大学時代だから母が望んだ医学部編入試験に合格する訳もなく、ごくストレートに文科系を卒業してしまった。

CMプランナー

その頃から映画は産業として大きな転換期をむかえ、時代は急速にテレビ時代にシフトしていった。

京都府立大学卒業後、学業とは無縁の梅田コマ劇場の裏方や録音スタジオの制作マンを

経て、広告代理店電通に入社し、ラジオ番組の録音制作を担当、当時大活躍の売れっ子ピアニストである得津奈都子さんと公開録音の現場で度々お目にかかった。私がマイクをピアノサイドに立てに行くと、青二才の私にまで「ご苦労様」と上品でやさしい笑顔を向けてくださった。思えばこれが私と得津家所縁の方との最初の出会いだった。後に奈都子さんの妹さんにあたる、十川千江子さんとも、電通時代の数々のイベントでお仕事をご一緒する事になる。千江子さんは当時一斉を風靡したジャズピアニストで、ジョージ・シャーリングのスタイルを彷彿させる、しゃれた都会センスのバンドを率いて活躍し、現在も私の演出するコンサートには欠かせない存在である。

やがてテレビＣＭのプランナーとなった私は「パンシロンでパンパンパン」とか「ハウスバーモントカレーだよ」とか音楽を活用したＣＭのほかに映画屋になれなかったコンプレックスをエネルギーにして、たくさんの「映画もどき」のＣＭを作った。

若尾文子、岡田茉莉子、岩下志摩、十朱幸代、の代表的な日本映画のスターたちをＣＭに起用したり、カトリーヌ・ドヌーブ、チャールス・ブロンソン、デヴィット・ニーブンなど世界的なスターたちを登場させるＣＭも手掛け、フランシス・レイやポール・モーリアなどの音楽家との仕事のチャンスにも恵まれた。

中でもブロンソンの「マンダム」はCM界で外人タレントブームの火付け役となり、無名のジェリー・ウオレス歌うCMソングはシングル一三〇万枚のヒットとなった。

この作品は当時まだ映像制作部などなかったホリプロの若き創始者、堀威夫氏や前出の笹井英男プロデューサーと出演折衝からアリゾナロケまでも苦楽を共にし、演出はテレビCM創成期時代の戦友のようでもあった大林宣彦監督と肝胆相照らして作った思い出深い作品である。

なかでも大林監督は私と同じように夢多き映画少年時代を手廻しの活動写真機と共に故郷の尾道で過ごしたと聞いている。ロケ先の安ホテルで酒を酌み交わしながら、「将来おれたちも〝本編〟（長篇劇場映画のことをCMや短編映画制作者はこう云う）を撮りたいな」などと話し合ったものである。

数年後、ホリプロは山口百恵作品をはじめ数多くの劇場映画を制作し、大林監督も志を果たして映画監督への大きな一歩を踏み出していった。

斜陽産業と云われた映画も80年代になって、新しい制作・配給のシステムが確立し、内外ともに新しい展開の時代を迎えつつあった。

映画化のはなし

光陰矢のごとく時は流れ、時代の様相は変わっても、映画制作への憧れを持ったままCM制作マンを続けていた私も五十路にさしかかっていた。

そんなある時、私が担当していたハウス食品のテレビCMに奈都子さんのお嬢さんの十川尚子さんが西城秀樹と競演する話がまとまり、この作品はその年の国際CMコンクールで賞を取る作品に仕上がった。

尚子さんはピアニストとしての技量もさることながら、キュートなボーカルも評判をよび多くのファンを擁する存在に成長していた。

かくして前述の通り私と三人の十川家の方々とのご縁から、この小説のストーリーと邂逅する事となったのだが、序章にも書いた通り、『得津武史物語』は私が永年夢見ていた音楽映画のテーマではないのか、との思いに駆られ、資料やビデオを見るうちに、天衣無縫な音楽教師、得津武史の生き様に心酔してしまったのである。

電通映像開発プロジェクトチームの一員でもあった私は、この得津物語を映画事業計画

として提案し、ついに東宝一九八九年度の制作ラインアップに『我が道を行く』というタイトルで発表されるまでに具体化作業を進めた。得津武史役を西田敏行が演じることの内諾も得てご本人に挨拶もすませていた。

しかし、晴天の霹靂だった脚本家の急逝は資金調達難航などの逆風と重なって、『音楽映画製作』プロジェクトチームは一年あまりで解散することになった。長年の夢は雲散霧消に帰し、孤城落日の寂寞感とともに段ボール箱一杯になった資料や準備稿をロッカーに片づけたのだった。

定年退職後に

映画化を断念して数年がたち、三十三年務めた職場を去る日、「パソコン嫌い」を標榜していた私に、送別会で後輩達からアップルコンピュータを贈られた。おそらく私の退職後の生活に欠かせないものだろうと考えた愛ある餞別だった。

悠々自適の老後を送るというパターンが嫌いで、むしろ限られた人生の残り時間をどう有意義に過ごそうかと、わくわくしながら迎えた第二の人生だった。

早速キーウエストという個人オフィスを立ちあげ、例のパソコンを自宅のデスクにおい

て仕事を始めた。この原稿を打ち始めたのもそのパソコンである。

ウエスト（関西）をキーにして仕事をする、という意味で名付けたオフィスの最初の仕事は、海外に西日本の郷土芸能を紹介するというディナー・ショウのプロデュースや関西のミュージッシアンによるジャズやクラシック音楽のコンサートイベントだったりのスタートだった。

六十歳はまだまだ青春だ、とばかり今までとは違った世界の好きな仕事だけを一匹狼で楽しんだ。

仕事上で付き合う人も変わって若いスタッフやミュージッシアン仲間が多くなった。アマチュアのジャズメンたちとも意気投合してモダンジャズバンド「タイニー・ストリームス」を結成、街のライブハウスに出演したり、プロのトランペッター奥田章三をゲストにＣＤのリリースも果たした。

満員電車で一時間かかった通勤が、ベッドからオフィスまで20秒の生活になり、運動不足解消に新しい仲間とゴルフをやったり、女房とスポーツジムにも通う理想の退職者生活だった。

しかしこの有頂天時代も長くは続かなかった。定例の人間ドックで右腎にガン腫瘍が発

見され、即刻摘出手術を勧められた。自覚症状も何も無く元気そのものなのに、精密検査の結果胆嚢にもポリープが見つかり、一挙に手術することになった。前述のごとくこの手術は、そう簡単なものではなかったらしい。予想外に出血が多く、輸血を頑に拒否していた私は青びょうたんのへろへろ状態になって病室へは戻れずICUに入れられた。手術後の制がん剤投与も私の生半可な医学知識から拒絶して医師にも妻にも素直な患者ではなかった。

母から「父さんのあとを継いでお前も医者になっておくれ」といわれながら「人間の修繕屋より誰にもできないものを創るんだ」と、好き勝手にやってきた自分に大きな天罰が当たったような気がした。

病気で必要以上に苦しむのは嫌、それを直す薬の副作用も嫌、天の邪鬼な私は手術後の高熱にうなされながら、夢うつつのなかで、あの段ボール箱にしまい込んでしまった得津武史物語のことを、ふと思い出した。

命がけの手術をうけたあとにも、得津物語は何かやり残した宿題のように、いつも意識に奥底にあったのかもしれない。

「おい！ワシの本ができるまえに、お陀仏になったらあかんぞ、しっかりせんか！」

得津さんに一喝された私は退院後、もう一度映画の為に書いたシノプシスや資料を読み返して、あらためて冒頭からこの話を書き始めることにしたのである。

韓国で体罰許可のニュース

本文をおおむね描き終わるまでにまた八年の歳月がながれた。その間二度目のガン闘病を余儀なくされた。PSA値一九(正常値四)の前立腺癌を告げられ、ショックで筆は止まったままになっていた。

金輪際手術はまっぴらの私は、今度は超先端医療施設である兵庫県立粒子線医療センターをインターネットで見つけて入院し近代医療の素晴らしい治療をうけた。ロビーにはピアノがあり院内はゴルフ場のクラブハウスのようだった。入院中に十川一家が見舞ってくださり、即席のコンサートを開いて患者たちをリゾートホテルにくつろぐような気分にさせてもらった。

苦痛ゼロという入院生活なので、パソコンを持ち込んだ私はふたたび病室で原稿をかきはじめた。

早く書き終えないとそろそろこちらの人生の方の締め切りが近づくかもしれないと感じ

たある日のこと、枕元のテレビが偶然面白いニュースを伝えていた。

韓国の話だが、小・中学校の生徒にくわえる体罰のためのルールが設定され、体罰棒というのが公式に認可されたという。これは得津氏のてんぷら棒に非常に良く似たもので、生徒の年令によって太さや、長さが決められている。

韓国の体罰許可のニュースになった朝鮮日報の記事はこう伝えている。

二〇〇二年六月二十六日韓国教育部、体罰を公式許可

今年の二学期から全国の小・中・高校で、生徒に対する罰点制が導入され、生徒の罰点が一定基準を超えた場合と学習態度が悪い場合は体罰を与えることが公式的に許可される。体罰を与える際は、小学生の場合、幅一・五センチ前後、長さ五〇センチ以下のまっすぐな木を、中高生の場合は、幅一・五センチ、長さ六〇センチ以下のまっすぐな木を使用しなければならない。体罰の部位は男子生徒の場合は尻、女子生徒の場合は太股、回数は小学生は五回以内、中高生は一〇回以内に制限される。

体罰は他の生徒のいない別途の場所で教頭や生活指導部長など、第三者が同席している状態で行われなければならない。体罰を受ける際、生徒は代替の罰を要求することができ、

罰点についても異議を申し出、審査を受けることができるようにするなど、生徒の人権と権益を保護するための規定も設けられた。

教育部は生活規定をすべての教職員と父兄、生徒の三者が共に参加する中で制定し、改正する際は学校運営委員会と生徒会の審議を経るようにした。（梁根晩（ヤン・ケンマン）　記者）

得津氏が聞けば「オレの専売特許をぬすまれた！」とわめくかも知れないが、あの天ぷら棒にそっくりなものが法令化された体罰の小道具として認定され、隣国の子供たちの教育に役立てられていることを偶然知った。

体罰について

教育における体罰の是非論は韓国のみならず、今も国際的に共通な問題点かもしれないが、いずれにせよ21世紀となった現代では得津武史式のスパルタ教育法は論外に近いほど否定されるに違いないだろう。

体罰はもちろん最近の親も先生もよほどの事が無い限り子供をなるべく叱らないで済まそうとする傾向がある。

現代の先生方に得津氏のやり方についてご意見を伺ったが、「とんでもない、今そんな事やったらいっぺんに親がとんできますよ」と論外の意見だった。

一部のサラリーマン化した先生をのぞけば、にぎりしめた拳をひっこめ、辛辣な語気をのみこんで、どう子供を指導統率してゆくかに、相当苦心惨憺されておられるのではないだろうか。

この小説の舞台となった西宮市今津という土地柄と、時代背景の違う話を現在の日本の平均的な教育や躾けの概念に結びつけるのはナンセンスかも知れないが、当時得津氏はそんな事には全くおかまいなしに自分の正体をさらけ出し、職員室に呼んでながながと説教をするより、天ぷら棒の一撃の方が遥かに子供の心に傷を与えないで目的を達成できると考えていた。それは彼流の子供達への愛情表現でもあったのだ。

その結果、教員組合を脱退し暴力教師とかゴロツキという称号も甘んじてうけた。彼が最も嫌うのは他人に迷惑をかける行為で、それが悪ふざけや不注意が原因であったりすると特に厳しく叱った。合奏中の一人のミストーンが全体のアンサンブルを壊すことは、一般社会でも一人の無責任な行為が社会全体の規律を乱すのと同じだと教えた。

しかし得津式自己流スパルタ教育法が批判もありながら結果として、奇跡に近い成果を

あげ、しかもその体罰を受けたほとんどすべての教え子達が四〇年近く経った今も、肉親のように慕い懐かしんでいる事実は否定できない。

つまり、少年達は先生と過ごした、厳しく辛い3年間を却っていとおしく思い、痛いたんこぶと共に「楽器を演奏できる」という生涯の財産をもらうことが出来たのだ。

得津式教育法

「教育とは同化作業である」という説がある。

「教える」とは先生の考えている事や能力に近づけること。言い換えれば先生が指し示した目的地へいかに正確に着地させることができるかという作業である。

得津氏のスタイルを継いだ指導者のひとりにあげられる、淀川工業高校の丸谷先生の指導法を拝見していると、天ぷら棒を指揮棒代わりにし、それで一発お見舞いするかどうかはさておいて、得津氏におとらぬ独特の語気がある。練習室に張りつめた厳しい空気感がある。それによって生徒たちは完璧に統率管理されているし、彼らの行儀作法の完璧さがそれを物語っている。

得津氏と共通した考えを持っておられるとすれば、先生と生徒は出来るだけ自然体で接

すること、音楽の素晴らしさを自分で気づかせる。口で解いても無理。

指揮者と心をひとつにして最高の『音楽』を演奏する。その結果コンクールに勝って日本一になる、日本一にならなければ努力した意味が無い。という最もシンプルな目標をかかげ、スポーツに近い『勝つ』ための演奏技術をあらゆる策を講じて仕上げて行った。

唐突ながら、いま日本は何処へ向かっているのだろう。

六〇年代、高度経済成長をとげた日本への諸外国からの反発に、自己反省したかのように『狭い日本そんなに急いでどこへ行く』という、キャッチフレーズがあったが、その頃から日本独特の勤勉さや生真面目さに急ブレーキがかかったような気がする。

経済大国とかナンバーワン日本という自己陶酔に、あるいは自由主義、民主主義のぬるま湯的な状況から国自体の目的地とともにすべてが曖昧になったような気がする。

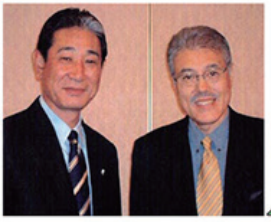
得津武史の世界から少々飛躍する論点かもしれないが、

日本が世界という大編成のアンサンブルですばらしいハーモニーを奏でる事が出来るようにちょっとやそっとでは折れない指揮棒で明快な目標を提示する指揮者の輩出を待望する。

東宝のラインナップ「わが道を行く」と91年ゴールデンウィーク全国公開の幻のチラシ

西谷尚雄氏と映画「わが道を行く」

チャールス・ブロンソンと若き日の西谷尚雄氏



あとがき

思えばこの本の出版は大変な難産だった。長編小説というマラソンに似た忍耐力も必要だったし、予期せぬ闘病もあったが、長期にわたって得津武史という大きな人物に迫れば迫るほど、私ごとき浅学非才の手におえる存在ではないような畏怖の念にかられた。

しかし今この時代にこそ得津武史の物語を世に出す意義について実に多くの方々の激励やアドバイスの言葉にたすけられ、やっとここまで走破することができた。

長期間にわたって取材に協力してくれたライターの大松有紀子さん。原稿の締め切りを守れない私のお尻をたたき、あらゆる雑用と日常の仕事のきりもりをこなしてくれた北良恵さん。お二人のタフなアシストがなかったらこのプロジェクトは空中分解していただろう。そして出版の具体化に当たり、購買予約を取ったり、なみなみならぬ熱意で尽力をしてくださった「かんぽう出版」の桐生敏明さん。

兵庫県揖保郡の粒子線医療センターへ入院中にも遠路はるばる見舞っていただき、得津

氏を描写するにあたって熱心にアドバイスを与えて頂いたこの本の監修者ともいうべき石川学先生。丹波篠山のアトリエまで押し掛けてイラストや表紙画を懇請した際、名物のうまい蕎麦を食べながら裏話しも聞かせてくださった伊勢昌史先生。

ときには得津先生の代理指揮者も務めたという梅谷忠洋さんには宇宿允人先生にまつわる貴重なエピソードを伺い、板橋さんには得津さんの隠れたウイークポイントを伺った。

そして、緋沙子夫人と奈都子さんとは、千万無量の思い出ばなしを伺わせて頂いた。お二人がこんなに仲良くされている事は得津さんもさぞお喜びだろうと思いながら、お命日にはご一緒に墓参のお供をした。

この本を書くきっかけを作ってもらった十川尚子さんとは今も私がプロデュースするコンサートやディナーショウに華を添えていてくださっているし、裕未、裕加の二人のお孫さんもとびきり元気にママの経営するミュージック・アカデミーのパートナーぶりを発揮している。

ほかにも沢山のご協力やアドバイスを頂戴した。

卒業生の脇川博允さんはわざわざ埼玉県から拙宅までお越しいただき貴重な写真提供や

ご自身のホームページ「今津っ子」でこの本の出版PRにご協力願った。私の仕事上のパートナーの一人・松村千秀君と奥さんの光代さんは私の悪筆を根気よくワープロで清書してくださった。電通時代の同僚で名コピーライターの鞍井修一君、カトリーヌ・ドヌーブを撮りまくったカメラマンの山田俊弥君、一〇〇年後の人間国宝を自認する陶芸家の赤水美文君、映画化プロジェクトに尽力してくれた今は名僧・根来宣明君、粒子線医療センター入院中の患者仲間で電子物理学者・松井純爾教授、そして「線友会」の皆さん、この本の出版に賛同して頂いた、今津中学現校長の先生、第四代指揮者岸田繁之先生、西宮市吹奏楽連盟・今西永兒氏、関西吹奏楽連盟・松平正守先生ほか、それぞれの方々のご支援に厚く感謝をもうしあげます。

この本を完結するにあたって、最後の取材に応じてくださった、淀川工業高校の丸谷明夫先生には、得津氏なきあと学生吹奏楽界の強力な担い手としてご登場願い有意義な結末への取材をさせていただいた。二〇〇六年グリーンコンサートは大阪中之島フェスティバルホール二日間にわたる4回公演がすべて満席となる盛況。一校の高校生吹奏楽団が一二、〇〇〇人の観客を動員する超人気に仕上げられた功績はあまりにも偉大である。得津サウンドを研究しつくされたご努力の結果だとすれば、一吹奏楽ファンとして、こんな嬉

しい事は無い。今後の更なるご活躍を期待して巻末の感謝の言葉と致します。

最後に大学卒業直後に下宿部屋から暮らし始め五〇年も辛抱強く仕事一辺倒の私を支えてくれた妻・弘子に衷心より感謝の意を表します。

得津さん、
遅くなってごめんなさい。
あまりにも多くの武勇伝やエピソードをお持ちのあなたをすべてを
描きあげることはできませんでした。
もっともっと話し足りない事がおありだったでしょう、
もっともっと、気がかりな事がおありだったでしょう。
それは私がそっちへ行ったとき、ゆっくり聞かせていただきます。
それまで、ごきげんよう。

著者略歴

西谷尚雄／Hisao Nishitani

一九三四年京都市に生まれる。
一九五六年京都府立大学卒。
電通にてＣＭプランナー、クリエイティブ・ディレクターとして
三〇年間で一〇〇〇本のテレビＣＭ企画制作に関与。
多くの作品がＡＣＣ、カンヌ、ＣＬＩＯ等、
内外のＣＭコンクールで受賞多数。
特に一九七〇年にチャールズ・ブロンソンを起用した、
「マンダム」のデビューキャンペーンは日本で外国人タレント起用の
画期的な成功例として評価され、日本のＣＭ史一〇〇傑に選出された。
一九八三年「ベニス国際広告映画祭」に引続き、
一九八四年には「カンヌ国際広告映画祭」日本代表審査員を務める。
現在、キーウエスト・オフィス代表として、

心斎橋そごう劇場チーフプロデューサーをはじめ、多方面で活躍中。

二〇一九年八月　電子版として発行

著者／西谷尚雄
装画／伊勢昌史
電子版発行／編集工房ＤＥＰ